

【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ

（例）僕^{ぼく}

：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）十分酬^{むく}イテ

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213の面区点番号またはUnicode、底本のページと行数）

（例）「#コト、1-2-24】

「#…」：返り点

（例）慎「#レ」独

／＼：二倍の踊り字（「く」を縦に長くしたような形の繰り返し記号）

（例）イエ何デモアリマセン／＼

*濁点付きの二倍の踊り字は「／＼」

一月一日。……僕八今年カラ、今日マデ日記ニ記スコトヲ躊躇シテ
 イタヨウナ事柄ヲモアエテ書キ留メル。「#コト、1-2-24」ニシタ。僕
 八自分ノ性生活ニ関スル。「#コト、1-2-24」、自分ト妻トノ関係ニツ
 イテハ、アマリ詳細ナ。「#コト、1-2-24」ハ書カナイヨウニシテ来タ。
 ソレハ妻ガコノ日記帳ヲ秘カニ読ンデ腹ヲ立テハシナイカトイウ。「#
 コト、1-2-24」ヲ恐レテイタカラデアツタガ、今年カラハソレヲ恐レヌ
 「#コト、1-2-24」ニシタ。妻ハコノ日記帳ガ書齋ノドコノ抽出ニハ
 イツテイルカラ知ツテイルニ違イナイ。古風ナ京都ノ舊家ニ生レ封建的
 ナ空気ノ中ニ育ツタ彼女ハ、今日モナオ時代オクレナ舊道徳ヲ重ンズル
 一面ガアリ、或ル場合ニハソレヲ誇リトスル傾向モアルノデ、マサカ夫
 ノ日記帳ヲ盗ミ読ムヨウナ。「#コト、1-2-24」ハシソウモナイケレド
 モ、シカシ必ズシモソウトハ限ラナイ理由モアル。今後従来ノ例ヲ破ツ
 テ夫婦生活ニ関スル記載ガ頻繁ニ現ワレルヨウニナレバ、果シテ彼女ハ
 夫ノ秘密ヲ探ロウトスル誘惑ニ打ち勝ち得ルデアロウカ。彼女ハ生レツ
 キ陰性デ、秘密ヲ好ム癖ガアルノダ。彼女ハ知ツテイル。「#コト、1-
 2-24」デモ知ラナイ風ヲ装イ、心ニアル。「#コト、1-2-24」ヲ容易ニ
 口ニ出サナイノガ常デアルガ、悪イコトニハソレヲ女ノ嗜ミデアルトモ
 思ツテイル。僕八、日記帳ヲ入レテアル抽出ノ鍵ハイツモ某所ニ隠シテ
 アルノダガ、ソシテ時々ソノ隠シ場所ヲ変エテイルノダガ、詮索好キノ
 彼女ハ事ニヨルト過去ノアラユル隠シ場所ヲ知ツテシマツテイルカモ知
 レナイ。モットモソナ面倒ヲシナイデモ、アンナ鍵ハイクラデモ合イ
 鍵ヲ求メル。「#コト、1-2-24」ガデキヨウ。……僕八今「今年カラ
 ハ読マレル」「#コト、1-2-24」ヲ恐レヌ。「#コト、1-2-24」ニシタ」
 ト云ツタガ、考エテミルト、実ハ前カラソナニ恐レテハイナカッタノ
 カモ知レナイ。ムシ口内々読マレル。「#コト、1-2-24」ヲ覚悟シ、期

待シテイタノカモ知レナイ。ソレナラバナゼ抽出ニ鍵ヲ懸ケタリマタソ
ノ鍵ヲアチラコチラへ隠シタリシタノカ。ソレハアルイハ彼女ノ搜索癖
ヲ満足サセルタメデアツタカモ知レナイ。ソレニ彼女ハ、モシ僕ガ日記
帳ヲ故意ニ彼女ノ眼ニ触レヤスイ所ニ置ケバ、「コレハ私ニ読マセルタ
メニ書イタ日記ダ」ト思イ、書イテアル。「#コト、1-2-24」ヲ信用シ
ナイカモ知レナイ。ソレドコロカ、「ホントウノ日記ガモウーツドコカ
ニ隠シテアルノダ」ト思ウカモ知レナイ。……郁子ヨ、ワガ愛スルイ
トシノ妻ヨ、僕ハ才前ガ果シテコノ日記ヲ盗ミ読ミシツツアルカドウカ
ヲ知ラナイ。僕ガ才前ニソソナ。「#コト、1-2-24」ヲ聞イテモ、才前
ハ「人ノ書イタモノヲ盗ミ読ミナドイタシマセン」ト答エルニキマツテ
イルカラ、聞イタトコロデ仕方ガナイ。ダガモシ読ンデイルノデアツタ
ラ、決シテコレハ偽リノ日記デナイ。「#コト、1-2-24」ヲ、コノ記載
ハスベテ真実デアル。「#コト、1-2-24」ヲ信ジテホシイ。イヤ、疑イ
深イ人ニ向ツテコウイウ。「#コト、1-2-24」ヲ云ウトカエツテ疑イヲ
深クサセル結果ニナルカラ、モウ云ウマイ。ソレヨリコノ日記ヲ読ンデ
サエクレレバソノ内容ニ虚偽ガアルカ否カハ自然明ラカニナルデアロウ。
モトヨリ僕ハ彼女ニ都合ノヨイ。「#コト、1-2-24」バカリハ書カナ
イ。彼女ガ不快ヲ感ズルデアロウヨウナ。「#コト、1-2-24」、彼女ノ
耳ニ痛イヨウナ。「#コト、1-2-24」モ憚^{おそ}カラズ書イテ行カネバナラナ
イ。モトモト僕ガコウイウ。「#コト、1-2-24」ヲ書ク気ニナツタノハ、
彼女ノアマリナ秘密主義、夫婦ノ間^{けいぼう}ニ閨房ノ「#コト、1-2-24」
ヲ語り合ウサエ恥ズベキ。「#コト、1-2-24」トシテ聞キタガラズ、タ
マタ僕ガ猥談^{わいたん}メイタ話ヲシカケルトタチマチ耳^{みみ}ヲ蔽^{おほ}ウテシマウ彼女ノ
イワユル「身嗜^みミ」、ア 偽善^{ごぜん}的ナ「#ア 偽善^{ごぜん}的ナ」ハママ」「女
ノラシサ」、アノワザトラシイオ上品趣味ガ原因ナノダ。連レ添^そウテニ

十何年二モナリ、嫁入り前ノ娘サエアル身デアリナガラ、寢床二ハイツテモイマダニタダ黙々ト事ヲ行ウダケデ、ツイソシンミリトシタ睦言ヲ取り交ソウトシナイノハ、ソレデモ夫婦トイエルデアロウカ。僕ハ彼女ト直接閨房ノ「#コト、1-2-24」ヲ語り合ウ機会ヲ与エラレナイ不満ニ堪エカネテコレヲ書ク氣ニナツタノダ。今後ハ僕ハ、彼女ガコレヲ實際ニ盗ミ読ミシテイルト否トニカカワラズ、シテイルモノト考エテ、間接ニ彼女ニ話シカケル氣持デコノ日記ヲツケル。

何ヨリモ、僕ガ彼女ヲ心カラ愛シテイル「#コト、1-2-24」、コノ「#コト、1-2-24」ハ前ニモタビタビ書イテイルガ、ソレハ偽リノナイ「#コト、1-2-24」デ、彼女ニモヨク分ツテイルト思ウ。タダ僕ハ生理的ニ彼女ノヨウニアノ方ノ慾望よくぼうが旺盛おつせいデナク、ソノ点デ彼女ト太刀打チデキナイ。僕ハ今年五十六歳（彼女ハ四十五ニナツタハズダ）ダカラマダソソナニ衰エル年デハナイノダガ、ドウイウワケカ僕ハアノ「#コト、1-2-24」ニハ疲レヤスクナツテイル。正直ニ云ツテ、現在ノ僕ハ週ニ一回クライ、ムシロ十日ニ一回クライガ適當ナノダ。トコロガ彼女ハ（コンナ「#コト、1-2-24」ヲ露骨ニ書イタリ話シタリスル「#コト、1-2-24」ヲ彼女ハ最モ忌ムノデアル）腺病質せんびょうしつデシカモ心臟ガ弱イニモカカワラズ、アノ方ハ病的ニ強イ。サシアタリ僕ガハナハダ当惑シ、参ッテイルノハ、コノ一事ナノダ。僕ハ夫トシテ、彼女ニ十分ノ義務ヲ果タシ得ナイノハ申シワケガナイケレドモ、ソウカトイッテ、彼女ガソノ不足ヲ補ウタメニ、モシ仮リニ、コンナ「#コト、1-2-24」ヲ云ウト、私ヲソソナミダラナ女ト思ウノデスカト怒ルおこデアロウガ、コレハ「仮リニ」ダ、他ノ男ヲ拵こしらエタトスルト、僕ハソレニハ堪エラレナイ。僕ハソソナ仮定ヲ想像シタダケデモ嫉妬しつとヲ感ズル。ノミナラズ彼女自身ノ健康ノ「#コト、1-2-24」ヲ考エテモ、ア

ノ病的ナ慾求ニ幾分ノ制御ヲ加工タ方ガヨイノデハアルマイカ。……

僕ガ困ツテイルノハ、僕ノ体力ガ年々衰エヲ増シツツアル。「#コト、1-2-24」ダ。近頃ノ僕ハ性交ノ後デ実ニ非常ナ疲労ヲ覚エル。ソノ日一日グッタリトシテモノヲ考エル氣力モナイクライニ。……ソレナラ僕ハ彼女トノ性交ヲ嫌きらツテイルノカトイウト、事實ハソレノ反対ナノダ。僕ハ義務ノ觀念カラ強しイテ情慾ヲ驅リ立テテイヤイヤ彼女ノ要求ニ応ジテイルノデハ断ジテナイ。僕ハ幸力不幸力彼女ヲ熱愛シテイル。ココデ僕ハ、イヨイヨ彼女ノ忌避きひニ触レル一点ヲ発あはカネバナラナイガ、彼女ニハ彼女自身全ク氣ガ付イテイナイトコロノ或ル独得ナ長所ガアル。僕ガモシ過去ニ、彼女以外ノ種々ノ女ト交渉ヲ持ツタ経験ガナカッタナラバ、彼女ダケニ備ワツテイルアノ長所ヲ長所ト知ラズニイルデモアロウガ、若カリシ頃ニ遊ビヲシタ。「#コト、1-2-24」ノアル僕ハ、彼女ガ多クノ女性ノ中デモ極メテ稀まれニシカナイ器具ノ所有者デアル。「#コト、1-2-24」ヲ知ツテイル。彼女ガモシ昔ノ島原しまはらノヨウナ妓楼ぎろうニ売ラレテイタトシタラ、必ズヤ世間ノ評判ニナリ、無数ノ嫖客ひょうかくガ競ツテ彼女ノ周圍ニ集マリ、天下ノ男子ハ悉ことごとク彼女ニ悩殺サレタカモ知レナイ。(僕ハコンナ「#コト、1-2-24」ヲ彼女ニ知ラセナイ方ガヨイカモ知レナイ。彼女ニソウイウ自覚ヲ与エル。「#コト、1-2-24」ハ、少クトモ僕自身ノタメニ不利カモ知レナイ。シカシ彼女ハコレヲ聞イテ、果シテ自ラ喜ブデアロウカ恥ジルデアロウカ、アルイハマタ侮辱ヲ感ジルデアロウカ。多分表面ハ怒ツテ見セナガラ、内心ハ得意ニ感ジル。「#コト、1-2-24」ヲ禁ジ得ナイノデハナカロウカ)僕ハ彼女ノアノ長所ヲ考エタダケデモ嫉妬ヲ感ズル。モシモ僕以外ノ男性ガ彼女ノアノ長所ヲ知ツタナラバ、ソシテ僕ガソノ天与ノ幸運ニ十分酬むくイテイナイ。「#コト、1-2-24」ヲ知ツタナラバ、ドンナ「#コト、1-2-24」ガ起ルデアロウカ。僕ハソ

レヲ考エルト不安デモアリ、彼女ニ罪深イ。「#コト、1-2-24」ヲシテ
 イルトモ思イ、自責ノ念ニ堪エラレナクナル。ソコデ僕ハイロイロナ方
 法デ自分ヲ刺戟シヨウトスル。タトエバ僕ハ僕ノ性慾点 僕ハ眼ヲ
 ツブツテ眼瞼ノ上ヲ接吻シテ貰ウ時ニ快感ヲ覺エル、 ヲ彼女ニ刺
 戟シテ貰ウ。マタ反対ニ僕ガ彼女ノ性慾点 彼女ハ腋ノ下ヲ接吻シ
 テ貰ウ。「#コト、1-2-24」ヲ好ムノデアル、 ヲ刺戟シテ、ソレ
 ニヨツテ自分ヲ刺戟シヨウトスル。シカルニ彼女ハソノ要求ニサエアマ
 リ快クハ応ジテクレナイ。彼女ハソウイウ「不自然ナ遊戯」ニ耽ル。「
 #コト、1-2-24」ヲ欲セズ、飽クマデモオーソドックスナ正攻法ヲ要求
 スル。正攻法ニ到達スル手段トシテノ遊戯デアル。「#コト、1-2-24」
 ヲ説明シテモ、彼女ハココデモ「女ヲシイ身嗜ミ」ヲ固守シテソレニ反
 スル行為ヲ嫌ウ。彼女ハマタ僕ガ足ノ fetishist デアル。「#コト、
 1-2-24」ヲ知ツテイナガラ、カツ彼女ハ自分ガ異常ニ形ノ美シイ足（ソ
 レハ四十五歳ノ女ノ足ノヨウニ思エナイ）ノ所有者デアル。「#コト、
 1-2-24」ヲ知ツテイナガラ、イヤ知ツテイルガユエニ、メツタニソノ足
 ヲ僕ニ見セヨウトシナイ。真夏ノ暑イ盛りデモ彼女ハ大概足袋ヲ穿イテ
 イル。セメテソノ足ノ甲ニ接吻サセテクレト云ツテモ、マア汚イトカ、
 コンナ所ニ触ルモノデハアリマセントカ云ツテ、ナカナカ願イヲ聴イテ
 クレナイ。ソレヤコレヤデ僕ハ一層手ノ施シヨウガナクナル。……正
 月早々愚痴ヲナラベル結果ニナツテ僕モイササカ恥カシイガ、デモコン
 ナ「#コト、1-2-24」モ書イテオク方ガヨイト思ウ。明日ノ晩ハ「ヒ
 メハジメ」デアル。オーソドックスヲ好ム彼女ハ毎年ノ吉例ニ従イ、必
 ズソノ行事ヲ厳肅ニ行ワナケレバ承知シナイデアロウ。……

一月四日。……今日であは珍しい事件に出遇であった。三カ日の間書齋そうの掃

除をしなかつたので、今日の午後、夫が散歩に出かけた留守に掃除を
にはいったら、あの水仙すいせんの活いけてある一輪 「#「挿」でつくりの縦棒
が下に突き抜けている、第い水準りん2-13-28」しの載おっている書棚しょだなの前に
鍵が落ちていた。それは全く何でもないとかなのかも知れない。でも夫
が何の理由もなしに、ただ不用意にあの鍵をあんな風に落しておいたと
は考えられない。夫は実に用心深い人なのだから。そして長年の間毎日
日記をつけていながら、かつて一度もあの鍵を落したことなくなかつ
たのだから。……私はもちろん夫が日記をつけていることも、その日
記帳をあの小机の抽出に入れて鍵をかけていることも、そしてその鍵を
時としては書棚のいろいろな書物の間に、時としては床の絨緞じゅうたんの下に隠
していることも、とうの昔から知っている。しかし私は知ってよいこと
と知ってはならないこととの区別は知っている。私が知っているのはあ
の日記帳の所在と、鍵の隠し場所だけである。決して私は日記帳の中を
開けて見たりなんかしたことはない。だのに心外なことには、生来疑い
深い夫はわざわざあれに鍵をかけたりその鍵を隠したりしなければ、安
心がならなかつたのであるらしい。……その夫が今日その鍵をあんな
所に落して行ったのはなぜであろうか。何か心境の変化が起つて、私に
日記を読ませる必要を生じたのであろうか。そして、正面から私に読め
と云つても読もうとしないであろうことを察して、「読みたければ内証
で読め、ここに鍵がある」と云っているのではなからうか。そうだとす
れば、夫は私がとうの昔から鍵の所在を知っていたことを、知らずにい
たということになるのだろうか？ いや、そうではなく、「お前が内証
で読むことを僕も今日から内証で認める、認めて認めないふりをしてい
てやる」というのだろうか？ ……

まあそんなことはどうでもよい。かりにそうであったとしても、私は

決して読みはしない。私は自分でここまでときめている限界を越えて、夫の心理の中にまではいり込んで行きたくない。私は自分の心の中を人に知らせることを好まないように、人の心の奥底を根掘り葉掘りすることを好まない。ましてあの日記帳を私に読ませたがっているとするれば、その内容には虚偽があるかも知れないし、どうせ私に愉快なことばかり書いてあるはずはないのだから。夫は何とでも好きなことを書いたり思ったりするがよいし、私は私でそうするであろう。実は私も、今年から日記をつけ始めている。私のように心を他人に語らない者は、せめて自身に向って語って聞かせる必要がある。ただし私は自分が日記をつけていることを夫に感づかれるようなへまはやらない。私はこの日記を、夫の留守の時を窺^{うかが}って書き、絶対に夫が思いつかない或る場所に隠しておくことにする。私がこれを書く気になった第一の理由は、私には夫の日記帳の所在が分っているのに、夫は私が日記をつけていることさえも知らずにいる、その優越感がこの上もなく楽しいからである。……

一昨夜は年の始めの行事をした。……あゝ、こんなことを筆にするとは何という恥かしさであろう。亡^なくなった父は昔よく「慎」「#レ」^{ひとりをつし}「独」ということを教えた。私がこんなことを書くのを知ったら、どんなにか私の墮落を歎^{なげ}くであろう。……夫は例により歡喜の頂天に達したらしいが、私はまた例により物足りなかった。そしてその後の感じがたまらなく不快であった。夫は彼の体力が続かないのを恥じ、私に済まないということを毎度口にする半面、夫に対して私が冷静過ぎることを攻撃する。その冷静という意味は、彼の言葉に従えば私は「精力絶倫」で、その方面では病的に強いけれども、私のやり方はあまりにも「事務的」で、「ありきたり」で、「第一公式」で、変化がないというのである。平素何事につけても消極的で、控え目である私が、あのことにだけは積極的で

あるにもかかわらず、二十年来常に同じメソッド、同じ姿勢でしか応じてくれないというのである。そのくせ夫はいつも私の無言の挑み

を見逃さず、私の示すほんの僅かな意志表示にも敏感で、直ちにそれと察するのである。それはあるいは、私の頻繁過ぎる要求に絶えず戦々兢兢々として居る結果、かえってそんな風になるのかも知れない。私は

実利一点張りで、情味がないのだそうである。僕がお前を愛している半分も、お前は僕を愛していないと、夫は云う。お前は僕を単なる必需品としか、それも極めて不完全な必需品としか考えていない、お前がほんとうに僕を愛しているなら、もっと熱情があつてもよいはずだ、いかなる僕の註文にも応じてくれるはずだと云う。僕が十分にお前を満足させ得ない一半の責めはお前にある、お前がもっと僕の熱情をかき立てるようにしてくれれば、僕だってこんなに無力ではない、お前は一向そういう努力をしようとせず、自ら進んでその仕事に僕と協力してくれない、お前は食いしんぼうの癖に手を拱いて据え膳の箸を取ることもばかり考えていると云い、私を冷血動物で意地の悪い女だとさえ云う。

夫が私をそういう眼で見るとも一往無理のないところがある。だけど私は、女というものはどんな場合にも受け身であるべきもの、男に対して自分の方から能動的に働きかけてはならないもの、という風に、昔氣質の親たちからしつけられて来たのである。私は決して熱情がないわけではないが、私の場合、その熱情は内部に深く沈潜する性質のもので、外に発散しないのである。強いて発散させようとすればその瞬間に消えてなくなってしまうのである。私のは青白い熱情で、燃え上る熱情ではないということ、夫は理解してくれない。……この頃になつて私がつくづく感じることは、私と彼とは間違つて夫婦になつたのではなかつたか、ということである。私にはもっと適した相手があつたであらうし、

彼にもそうであつたろうと思う。私と彼とは、性的嗜好が反撥し合つて
いる点が、あまりにも多い。私は父母の命ずるままに漫然とこの家に嫁
ぎ、夫婦とはこういうものと思つて過して来たけれども、今から考える
と、私は自分に最も性の合わない人を選んだらしい。これが定められた
夫であると思うから仕方なく忪えているものの、私は時々彼に面と向つ
てみて、何という理由もなしに胸がムカムカして来ることがある。そう、
そのムカムカする感じは、昨今に始まつたことではなく、そもそも結婚
の第一夜、彼と褥をともしたあの晩からそうであつた。あの遠い昔の
新婚旅行の晩、私は寢床にはいつて、彼が顔から近眼の眼鏡を外したの
を見ると、とたんにゾウツと身慄いがしたことを、今も明瞭に思い出す。
始終眼鏡をかけている人が外すと、誰でもちよつと妙な顔になるものだ
が、夫の顔は急に白ツちやけた、死人の顔のように見えた。夫はその顔
を近々と傍に寄せて、穴の開くほど私の顔を覗き込んだものだつた。私
も自然彼の顔をマジマジと見据える結果になつたが、その肌理の細かい、
アルミニウムのようにツルツルした皮膚を見ると、私はもう一度ゾウツ
とした。昼間は分らなかつたけれども、鼻の下や唇の周りに髭が微かに
生えかかっているのが（彼は毛深いたちなのである）見えて、それがま
た薄気味が悪かつた。私はそんなに近い所で男性の顔を見るのは始めて
だつたので、そのせいもあつたかも知れないが、以来私は、今日でも夫
の顔を明るい所で長い間視つめてみると、あのゾウツとする気持になる
のである。だから私は彼の顔を見ないようにしようと思ひ、枕もとの電
燈を消そうとするのだが、夫は反対に、あの時に限つて部屋を明るくし
ようとする。そして私の体じゅうのここかしこを、能う限りハッキリ見
ようとする。（私はそんな要求にはめつたに応じないことにしているけ
れども、足だけはあまり執拗く云うので、已むを得ず見せる）私は夫以

外の男を知らないけれども、総体に男性というものは皆あのように執拗いのであるうか。あのアクドい、べたべたと纏わりついてさまざまな必要以外の遊戯をしたがる習性は、すべての男子に通有なのであるうか。……

一月七日。……今日木村が年始二来夕。僕八フオークナーノサンクチュアリヲ読ミカケテイタノデ、チヨット挨拶シテ書齋ニ上ツタ。木村八茶ノ間デ妻ヤ敏子トシバラク話シテイタガ、三時過ギニ「麗しのサブリナ」ヲ見ニ行クト云ツテ、三人デ出力ケタ。ソシテ木村八六時頃マタ一緒ニ帰ツテ来テ、僕ヲ家族ト夕食ヲトモニシ、九時少シ過ギマデ話シテ行ツタ。食事ノ時敏子ヲ除ク三人ハブランデーヲ少量ズツ飲ンダ。郁子ハ近頃酒量ガヤヤ増シタヨウニ思ウ。彼女ニ酒ヲ仕込ンダノハ僕ダガ、モトモト彼女八行ケル口ナノダ。彼女八勸メラレレバ黙ツテカナリノ量ヲ嗜ム。酔ウ「#コト、1-2-24」ハ酔ウガ、ソノ酔イ方ガ陰性デ、外ニ発セズ、内攻シ、イツマデモジツト恠エテイルノデ、人ニ八分ラナイ「#コト、1-2-24」ガ多イ。今夜八木村ガシエリーグラスニ二杯半マデ彼女ニススメタ。妻ハイクラカ青イ顔ヲシテイタガ、酔ツタ様子八見エナカッタ。カエツテ僕ヤ木村ノ方ガ紅イ顔ニナツタ。木村ハソソナニ強クハナイ。妻ヨリ弱イクライデアル。妻ガ僕以外ノ男カラブランデーノ杯ヲ受ケタノハ、今夜ガ始メテデハナイダロウカ。木村ハ最初敏子ニ差シタノダガ、「私ハダメデス、ドウカママニオ酌ナスツテ」ト敏子ガ云ツタカラデアツタ。僕ハカネテカラ、敏子ガ木村ヲ避ケル風ガアル「#コト、1-2-24」ヲ感じテイタガ、ソレハ木村ガ彼女ヨリハ彼女ノ母ニ親愛ノ情ヲ示ス傾向ガアル「#コト、1-2-24」ヲ、彼女モ感ツクニ至ツタカラデハナイデアロウカ。僕ハ僕ノ嫉妬カラソソナ風ニ気が廻ル

ノカト思ツテ、ソノ考エヲ努メテ打チ消シテイタノデアルガ、ヤハリソ
ウデハナサソウデアル。一体妻ハ来客ニ対シテハ不愛想デ、コトニ男ノ
客人ニハ会イタガラナイノデアルガ、木村ニダケハ親シムノデアル。敏
子モ、妻モ、僕モ、イマダカツテ口ニ出シタ。「#コト、1-2-24」ハナ
イガ、木村ハジエームス・スチュアートニ似テイル。ソシテ僕ノ妻ハ、
ジエームス・スチュアートガ好キデアル。「#コト、1-2-24」ヲ僕ハ知ツ
テイル。(妻ハソレヲ口ニ出シタ。「#コト、1-2-24」ハナイガ、ジエ
ームス・スチュアートノ映画ダト缺カサズ見ニ行クラシイノデアル)モッ
トモ妻ガ木村ニ接近スルノハ、僕ガ彼ヲ敏子ニ妻めあワセテハドウカトイウ
考エガアツテ、家庭ニ出入リサセルヨウニシ、妻ニソレトナク二人ノ様
子ヲ見ルヨウニト命ジタカラナノデアル。トコロガ敏子ハコノ縁談ニハ
ドウモ氣乗リガシテイナイラシイ。彼女ハナルベク木村ト二人キリニナ
ル機会ヲ作ラヌヨウニシ、イツモホトンド郁子ト三人デ茶ノ間デ話シ、
映画ヲ見ルニモ必ず母ヲ誘ツテ出カケル。「才前ガツイテ行クカラ悪イ、
二人キリデ出シテミナサイ」ト云ウノダガ、妻ハソレニハ不賛成デ、母
親トシテ監督スル責任ガアルト云ウ。「ソレハ才前ノ頭ガ時代オクレダ
カラダ、二人ヲ信用シタラヨイノダ」ト云ウト、「私モソウ思ウノデス
ケレドモ、敏子ガツイテ来テクレト云ウノデス」ト云ウ。事實敏子ガソ
ウ云ウノダトスレバ、ソレハ自分ヨリモ母ノ方ガ木村ヲ好イテイルトコ
ロカラ、ムシロ自分ガ母ノタメニ仲介ノ勞ヲ取ロウトシテイルノデハア
ルマイカ。僕ハ何トナク、妻ト敏子トノ間ニ暗黙ノ示シ合ワセガアルヨ
ウナ氣ガシテナラナイ。少クトモ妻ハ、自分デハ意識シテイナイノカモ
知レナイガ、自分デハ若イ二人ヲ監督シテイルツモリカモ知レナイガ、
實際ハ木村ヲ愛シテイルヨウニ思エテナラナイ。……

一月八日。昨夜は私も酔ったけれども、夫は一層酔っていた。夫は近頃あまり強要したことなかつた眼瞼の上の接吻を、してくれるようにとしきりに迫った。私もブランデーの加減で少し常軌を逸していたので、フラフラと要求に応じた。それはよいが、接吻するついでに、あの見てはならないものを、彼の眼鏡を外した顔を、ついウツカリして見てしまった。私はいつも眼瞼に接吻を与える時は、自分も眼をつぶるようになっているのだが、昨夜は途中で眼を開けてしまった。あのアルミニウムのような皮膚が、キネマスコープで大映しにして見るように巨大に私の眼の前に立ち塞がった。私はゾウツと身慄いをした。そして自分の顔が急に青ざめたのを感じた。でもよいあんばいに、夫は眼鏡をすぐにかけた、例によって私の手足を事細かに眺めるために。……私は黙って枕もとのスタンドを消した。夫は手を伸ばしてスイッチをひねり返そうとしたが、私はスタンドを遠くの方へ押しやった。「おい、後生だ、もう一度見せてくれ。後生お願い。……」と、夫は暗い中でスタンドを探したが、見つからないので諦めてしまった。……久しぶりの長い抱擁。……

私は夫を半分は激しく嫌い、半分は激しく愛している。私は夫とほんとうは性が合わないのだけれども、だからといって他の人を愛する気にはなれない。私には古い貞操観念がこびり着いているので、それに背くことは生れつきできない。私は夫のあの執拗な、あの変態的な愛撫の仕方にはホトホト当惑するけれども、そういつても彼が熱狂的に私を愛していてくれることは明らかなので、それに対して何とか私も報いるところがなければ済まないと思う。あゝ、それにつけても、彼にもう少し昔のような体力があつてくれたらば、……一体どうして彼はあんなにあの方面の精力が減退したのであろうか。……彼に云わせると、それは

私があまり淫蕩いんとうに過ぎるので、自分もそれにつり込まれて節度を失った結果である、女はその点不死身だけれども、男は頭を使うので、ああいうことがじきに体にこたえるのだという。そう云われると恥かしいが、しかし私の淫蕩は體質的のものなので、自分でもいかんともすることができないことは、夫も察してくるであろう。夫が真に私を愛しているのならば、やはり何とかして私を喜ばしてくれなければいけない。ただくれぐれも知っておいて貰いたいのは、あの不必要な悪ふざけだけは我慢がならないということ、私にとってあんな遊びは何の足しにもならないばかりか、かえって気分を損そこうばかりだということ、私は本来は、どこまでも昔風に、暗い奥深い閨ねやの中に垂たれ籠こめて、分厚い褌つとに身を埋うめて、夫の顔も自分の顔も分らないようにして、ひっそりと事を行いたいのだということ、である。夫婦の趣味がこの点でひどく食い違っているのはこの上もない不幸であるが、お互いに何か妥協点を見出す工夫くふうはなにもものだろうか。……

一月十三日。……四時半頃二木村が来タ。国カラ「#「魚+鐵のつくり」、第4水準2-93-92」子ガ届かいらキマシタカラ持ツテ来マシタト云ツテ、ソノアト一時間ホド三人デ話シテ帰リカケル様子ダツタノデ、僕八下へ降りテ行ツテ、飯ヲ食ツテ行ケト引キ留メタ。木村八別ニ辞退セズ、デ八御馳走ごちそうニナリマスト云ツテ坐リ込すわンダ。食事ノ支度ガデキル間、僕ハマタ二階ニ上ツテイクガ、敏子ガ一人デ台所ノ用事ヲ引キ受ケテ、妻ハ茶ノ間ニ残ツテイタ。御馳走ト云ツテモ有リアワセノモノシカナカツタガ、酒ノ肴さかなニ八到来ノ「#「魚+鐵のつくり」、第4水準2-93-92」子ト、昨日妻ガ錦にしきノ市場デ買ツテ来タ鮎ふなずしガアツタノデ、スグブランドエニナツタ。妻ハ甘イモノガ嫌イデ、酒飲ミノ好クモノガ好き、ナカン

ズク鮎鯨ガ好きダ。 僕八両刀使イダケレドモ、鮎鯨ハアマリ好き
 デナイ。家ジユウデ妻以外ニアレヲ食ウ者ハイナイ。長崎人ノ木村モ
 「#「魚+鐵のつくり」、第4水準2-93-92」子ハ好きダガ、鮎鯨ハ御
 免ダト云ツテイタ。 木村八土産物みやげものナンカ提さゲテ来タ 「#コト、
 1-2-24」ハナイノダガ、今日ハ始メカラ晩ノ食事ヲトモニスル底意ガアッ
 タノデアロウ。僕ハ彼ノ心理状態ガ今ノトコロヨク分ラナイ。郁子ト敏
 子ト、彼自身ハドツチニ惹ひカレテイルノデアロウカ。モシ僕ガ木村デアッ
 タトシテ、ドツチニヨケイ惹ひキ付ケラレルカトイエバ、ソレハ、年ハ取ッ
 テイルケレドモ母ノ方デアル 「#コト、1-2-24」ハ確カダ。ダガ木村
 ハドウトモ云エナイ。彼ノ最後ノ目的ハカエツテ敏子ニアルノカモ知レ
 ナイ。敏子ガソレホド彼トノ結婚ニ乘リ氣デナイラシイノデ、サシアタ
 リ母ノ歡心ヲ買イ、母ヲ通ジテ敏子ヲ動かソウトシテイル? イヤ
 ソンナ 「#コト、1-2-24」ヨリモ、僕自身ハドンナツモリナノダロウ。
 ドンナツモリデ今夜モ木村ヲ引キ留メタノダロウ。コノ心理ハ我ナガラ
 奇妙ダ。先日、七日ノ晩ニ僕ハスデニ木村ニ対シ淡イ嫉妬（淡クモナカッ
 タカモ知レナイ）ヲ感ジツツアッタノニ、 イヤソウデハナイ、ソ
 レハ去年ノ暮アタリカラダツタ、 ソノ半面、僕ハソノ嫉妬ヲ密ひそカ
 ニ享樂シツツアツタ、ト云エナイダロウカ。元来僕ハ嫉妬ヲ感ジルトア
 ノ方ノ衝動ガ起ルノデアル。ダカラ嫉妬ハ或ル意味ニオイテ必要デモア
 リ快感デモアル。アノ晩僕ハ、木村ニ対スル嫉妬ヲ利用シテ妻ヲ喜バス
 「#コト、1-2-24」ニ成功シタ。僕ハ今後我々夫婦ノ性生活ヲ満足ニ
 続ケテ行クタメニハ、木村トイウ刺戟劑ノ存在ガ缺クベカラザルモノデ
 アル 「#コト、1-2-24」ヲ知ルニ至ツタ。シカシ妻ニ注意シタイノハ、
 云ウマデモナイ 「#コト、1-2-24」ダケレドモ、刺戟劑トシテ利用ス
 ル範圍ヲ逸脱シナイ 「#コト、1-2-24」ダ。妻ハ随分キワドイ所マデ

行ッテヨイ。キワドケレバキワドイホドヨイ。僕ハ僕ヲ、氣ガ狂ウホド嫉妬サセテホシイ。事ニヨツタラ範圍ヲ踏^ふミ越エタノデハアルマイカ、ト、多少疑イヲ抱^{いだ}カセルクライデアツテモヨイ。ソノクライマデ行く「#コト、1-2-24」ヲ望ム。僕ガコノクライニ云ツテモ、トテモ彼女ハ大胆ナ「#コト、1-2-24」ハデキソウモナイケレドモ、ソウイウ風ニシテ努メテ僕ヲ刺戟シテクレル。「#コト、1-2-24」ハ、彼女自身ノ幸福ノタメデモアルト思ツテ貰イタイ。

一月十七日。……木村ハアレキリマダ来ナイガ、僕ト妻トハアレカラ每晚ブランデーヲ用イツツアル。妻ハススメレバ随分行ケル。僕ハ妻ガ一生懸命酔イヲ隠シテ冷タイ青ザメタ顔ヲシテイルノヲ見ルノガ好きダ。妻ノソウシテイル様子ニ何トモイエナイ色氣ヲ感ジル。僕ハ彼女ハ酔イツブシテ寝カシテシマオウトイウ底意モアツタガ、ドウシテ彼女ハソノ手ニハ乗ラナイ。酔ウトマスマス意地ガ悪クナリ、足ニ触ラセマイトスル。ソシテ自分ノ欲スル。「#コト、1-2-24」ダケヲ要求スル。……

一月二十日。……今日は一日頭痛がしている。二日酔いというほどではないが、昨日は少し過したらしい。……だんだん私のブランデーの量が殖^ふえて行くのを木村さんは心配している。近頃は二杯以上はお酌をしない。「もう好い加減になすつたら」と、止める方に廻ろうとする。夫は反対に、前より一層飲ませたがる。差されれば拒^{こは}まない癖を知っている。夫や木村さんの見ている前で取り乱したことは一度もないが、酒を殺して飲むために後が苦しい。私は用心した方がよい。……

一月二十八日。……今夜突然妻が人事不省二ナツタ。木村が来て、四人で食卓ヲ囲ンデイル最中ニ彼女ガドコカへ立ツテ行ツテ、シバラク戻ツテ来ナイノデ、「ドウナスツタノデシヨウ」ト木村ガ云イ出シタ。妻ハブランデーガ過ギルト時々中座シテ便所ニ隠レテイル。「#コト、1-2-24」ガアルノデ、「ナニ、今ニ戻ツテ来ルヨ」ト僕ハ云ツテイタガ、アマリ長イノデ木村ハ氣ヲ揉ンデ呼ビニ行ツタ。ソシテ間モナク、「オ嬢サン、チヨット変ダカライラシツテ下サイ」ト、廊下カラ敏子ヲ呼ンダ。敏子ハ今夜モホドヨイ所デ自分ダケサツサト食事ヲ済マシテ部屋ニ引キ取ツテイタ。「オカシイデスヨ、奥サンガドコニモイラツシヤラナイラシイデス」ト云ウノデ、敏子ガ捜スト、妻ハ風呂ニ漬カッタママ浴槽ノ縁ニ両手ヲ掛ケ、ソノ上ニ顔ヲ打ツ俯セニシテ睡ツテイタ。「ママ、コンナ所デ寝ナイデヨ」ト云ツテモ返事ヲシナイ。「先生、大変デス」ト木村ガ飛ンデ来て知ラセタ。僕ハ流シ場ニ下リテ脈ヲ取ツテ見タ。脈搏ガ微弱デ、一分間ニ九十以上百近クモ打ツテイル。僕ハ裸体ニナツテ浴槽ニハイリ、妻ヲ抱エテ浴室ノ板ノ間ニ臥カシタ。敏子ハ大キナバスタオルデ母ノ体ヲ包ンデヤツテカラ、「トニカク床ヲ取リマシヨウ」ト云ツテ寢室へ行ツタ。木村ハドウシテヨイカ分ラズ、浴室ヲ出タリハイツタリウロウロシテイタガ、「君モ手ヲ貸シテクレタマエ」ト云ツテ、二人デ乾イタエ「ト云ウト安心シテノコノコハイツテ来タ。「早く拭イテヤラナイト風邪ヲ引ク、済マナイガ手伝ツテクレタマエ」ト云ツテ、二人デ乾イタオトルヲ持ツテ濡レタ体ヲ拭キ取ツテヤツタ。(コンナ咄嗟ノ間合ニモ僕ハ木村ヲ「利用」スル。「#コト、1-2-24」ヲ忘レナカツタ。僕ハ彼ニ上半身ヲ与エ、自分ハ下半身ヲ受け持ツタ。僕ハ足ノ指ノ股マデモキレイニ拭イチテヤリ、「君、ソノ手ノ指ノ股ヲ拭イテヤツテクレタマエ」

ト木村ニモ命ジタ。ソシテソノ間ニモ木村ノ動作ヤ表情ヲ油断ナク觀察シタ。敏子ガ寢間着ヲ持ツテ来タガ、木村ガ手伝ツテイルノヲ見ルト、「湯タンポヲ入レルワ」ト云ツテスグマタ出テ行ツタ。僕ト木村ハ二人デ郁子ニ寢間着ヲ着セテ寢室ヘ運ンダ。「脳貧血力モ知レマセンカラ、湯タンポハ才止メニナツタ方ガヨクハナイデスカ」ト木村ガ云ツタ。医者ヲ呼ボウカドウシヨウカトシバラク三人デ相談シタ。僕ハ児玉氏ナラ差支エナイト思ツタケレドモ、ソレデモ妻ノコウイウ醜態ヲ見セルノハ好マシクナカッタ。ガ、心臟ガ弱ツテイルヨウナノデ、結局来テ貰ツタ。ヤハリ脳貧血ダソウデ、「御心配ハアリマセン」ト云ツテ、ヴィタカンフルノ注射ヲシテ児玉氏ガ帰ツテ行ツタノハ、夜中ノ二時デアッタ。……

一月二十九日。昨夜飲み過ぎて苦しくなり便所に行ったことまでは記憶にある。それから風呂場へ行つて倒れたことも微かに思い出すことができる。それ以後のことはよく分らない。今朝明け方に眼が覚めてみたら誰かが運んでくれたのだと見えてベッドに寝ていた。今日は終日頭が重くて起き上る気力がない。覚めたかと思うとまたすぐ夢を見て一日じゅうウトウトしている。夕方少し心持が回復したので、辛うじて日記にこれだけ書きとめる。これからまたすぐ寝るつもり。

一月二十九日。……妻ハ昨夜ノ事件以来マダ一遍モ起キタ様子ガナイ。昨夜僕ト木村トデ彼女ヲ風呂場カラ寢室ヘ運ンダノガ十二時頃、児玉氏ヲ呼ンダノガ〇時半頃、氏ガ帰ツタノガ今暁ノ二時頃。氏ヲ送ツテ出ル。「#トキ、33-6」外ヲ見タラ美シイ星空デアツタガ寒氣ハ凜烈デアツタ。寢室ノストーブハイツモ寝ル前一トツカミノ石炭ヲ投ゲ込ンデ

オケバソレデ大体又クマルノダガ、「今日八暖カニシテ上ゲタ方ガヨウ
ゴザンスネ」ト木村ガ云ウノデ、彼ニ命ジテ多量ニ石炭ヲ投ゲ込マセタ。
木村ハ「デハドウゾオ大事ニ。僕八帰ラシテ貰イマス」ト云ツタガ、コ
ンナ時刻ニ帰ラセルワケニ行カナイ。「寝具ハアルカラ茶ノ間デ泊ッテ
行キタマエ」ト云ツタガ、「ナニ近インダカラ何デモアリマセン」ト云
ウ。彼八郁子ヲ担ギ込ンデカラソノママ寢室デウロウロシテイタノダガ、
（腰掛ケルニモ餘分ノ椅子ガナイノデ、僕ノ寢台ト妻ノ寢台ノ間ニ立ッ
テイタ）ソウイエバ敏子ハ、木村ガハイッテ来ルト入レ違イニ出テ行ッ
テ、ソレキリ姿ヲ見セナカッタ。木村ハドウシテモ帰ルト云イ、「イエ
何デモアリマセンノ」ト云ツテトウトウ帰ッテ行ツタ。シカシ正直ノ
「#コト、1-2-24」ヲ云エバ、実ハソウシテ貰ウ方ガ僕ノ望ムトコロ
ダツタノダ。僕八先刻カラ或ル計画ガ心ニ浮カビツツアッタノデ、内心
八木村ガ帰ッテクレル「#コト、1-2-24」ヲ願ッテイタノダツタ。僕
八彼ガ立ち去ッテシマイ、敏子モモハヤ現ワレル恐レガナイノヲ確カメ
ルト、妻ノベッドニ近ツイテ、彼女ノ脈ヲ取ツテミタ。ヴィタカンフル
ガ利イタトミエテ、脈八正常ニ搏チツツアッタ。見タトコロ、彼女八深
イ深イ睡リニ落ちテイルヨウニ見エタ。彼女ノ性質カラ推シテ、
果シテホントウニ睡ッテイタノカ寢タフリヲシテイタノカ、ソノ点八疑
ワシイ。ダガ寢タフリヲシテイイルノナラソレデモ差支エナイト思ツタ。
僕八マズストーブノ火ヲ一層強ク、カスカニゴウゴウ鳴ルクライニ燃
ヤシタ。ソレカラ徐々ニフロアスタンドノシェードノ上ニ被セテアッ
タ黒イ布ノ覆イヲ除イテ室内ヲ明ルクシタ。フロアスタンドヲ静カニ
妻ノ寢台ノ側近クニ寄せテ、彼女ノ全身ガ明ルイ光ノ輪ノ中ニハイルヨ
ウナ位置ニ据エタ。僕ノ心臓ハニワカニ激シク脈搏チツツアルノヲ感ジ
タ。僕八カネテカラ夢ミテイタ「#コト、1-2-24」ガ今夜こそ実行デ

キルト思イ、ソノ期待デ興奮シタ。僕八足音ヲ忍バセテイッタン寢室ヲ出、二階ノ書齋ノデスクカラ螢光燈けいこうとうランプヲ外はずシテ、ソレヲ持ッテ戻ッテ来、ナイトテーブルノ上ニ置イタ。コノ「#コト、1-2-24」ハ僕ガトウカラ考エテイタ。「#コト、1-2-24」デアッタ。去年ノ秋、書齋ノスタンドヲ螢光燈ニ改メタノモ、実ハイツカハコウイウ機会ガ来ルデアロウ。「#コト、1-2-24」ヲ豫想よそづシタカラナノデアッタ。螢光燈ニスルトラジオニ雑音ガ交ルト云ツテ妻ヤ敏子ハ当時反対ダッタノニ、僕八視力ガ衰エテ読書ニ不便デアル。「#コト、1-2-24」ヲ理由ニ螢光燈ニ変エタノダツタガ、 事実読書ノタメトイウ。「#コト、1-2-24」モアッタニハ違イナイノダガ、 ソンナ「#コト、1-2-24」ヨリモ僕八、イツカハ螢光燈ノ明リノ下ニ妻ノ全裸体ヲ曝あぶシテ見タイトイウ慾望ニ燃エテイタノダツタ。コノ「#コト、1-2-24」ハ螢光燈トイウモノノ存在ヲ知ツタ。「#トキ、36-7」カラノ妄想ちやんそうダツタノダ。……………

…………… スベテハ豫期ノゴトクニ行ツタ。僕八モウ一度彼女ノ衣類ヲ全部、何カテ何マデ彼女ガ身ニ纏まとッテイルモノヲ悉しつじつク剥はギ取り、素ッ裸ニシテ仰向カセ、螢光燈トフロアスタンドノ白日ノ下ニ横タエタ。ソシテ地図ヲ調べルヨウニ詳細ニ彼女ヲ調べ始メタ。僕八マズソノ一点ノ汚レモナイ素晴ラシイ裸身ヲ眼ノ前ニシタ。「#トキ、36-12」ニシバラクハ全ク度ヲ失はッテ呆然ぼうぜんトサセラレテイタ。なぜトイッテ、僕八自分ノ妻ノ裸体ヲカヨウナ全身像ノ形ニオイテ見タノハ始メテダツタカラダ。多クノ「夫」ハ彼ノ妻ノ肉体ノ形状ニツイテ、恐ラクハ巨細ニ互むたッテ、足ノ裏ノ皺しわノ数マデモ知り悉しつじつシテイル。「#コト、1-2-24」デアロウ。トコロガ僕ノ妻ハ今マデ僕ニ決シテ見セテクレナカッタ。情事ノ「#トキ、37-2」ニ自然部分的ニトコロドコロヲ見タ。「#コト、1-2-24」ハアルケレドモ、ソレモ上半身ノ一部ニ限ラレテイタノデアッテ、情事

二必要ノナイトコロハ絶対ニ見セテクレナカッタ。僕ハタダ手デ触ツテ
 ミテソノ形状ヲ想像シ、相当素晴ラシイ肉体ノ持主デアロウト考エテイ
 タノデアツテ、ソレユエニコソ白光ノ下ニ曝シテ見タイトイウ念願ヲ抱
 イタワケデアツタガ、サテソノ結果ハ僕ノ期待ヲ裏切ラナカッタノミナ
 ラズ、ムシロハルカニソレ以上デアツタ。僕ハ結婚後始メテ、自分ノ妻
 ノ全裸体ヲ、ソノ全身像ノ姿ニオイテ見タノデアル。ナカンズクソノ下
 半身ヲホントウニ残ル限くまナク見ル。「#コト、1-2-24」ヲ得タノデアル。
 彼女ハ明治四十四年生レデアルカラ、今日ノ青年女子ノヨウナ西洋人臭
 イ体格デハナイ。若イ頃ニハ水泳トテニスノ選手デアツタトイウダケニ、
 アノ頃ノ日本婦人トシテハ均整ノ取レタ骨格ヲ持ツテイルケレドモ、タ
 トエバソノ胸部ハ薄ク、乳トでんぶ臀部ノ発達ハ不十分デ、脚モシナヤカニ長
 イニハ長イケレ。「#トモ、38-8」、下腿部かたいぶガヤヤO型ニ外側わんきょくへ彎曲シ
 テオリ、遺憾ナガラマツスグトハ云イニクイ。コトニ足首ノトコロガ十
 分ニ細ク括レテイナイノガ缺点ダケレ。「#トモ、38-11」、僕ハアマ
 リニ西洋人臭イスラリトシタ脚ヨリモ、イクラカ昔ノ日本婦人式ノ脚、
 私ノ母ダトカ伯母おばダトカイウ人ノ歪ゆがンダ脚ヲ思イ出サセル脚ノ方ガ懐なつかシ
 クテ好キダ。ノツペラボウニ棒ノヨウニマツスグナノハ曲ガナサ過ギル。
 胸部ヤ臀部モアマリ発達シ過ギタノヨリハ中宮寺ノ本尊ノヨウニホンノ
 微力かすナ盛り上リヲ見セテイル程度ノガ好キダ。妻ノ体ノ形状ハ、恐ラク
 コンナ風デアロウトオオヨソ想像ハシテイタノダガ、果シテ想像ノ通り
 デアツタ。シカモ僕ノ想像ヲ絶シテイタノハ、全身ノ皮膚ノ純潔サダツ
 タ。大概ナ人間ニハ体ノドコカシラニチヨツトシタ些細ささいナ斑点はんでん、薄
 紫ヤ黝黒等ノシミグライハアルモノダガ、妻ハ体ジユウヲ丹念ニ捜シテ
 モトコニモソソナモノハナカッタ。僕ハ彼女ヲ俯向キニサセ、臀しりノ孔マ
 デ覗イテ見タガ、臀肉ガ左右ニ盛り上ツテイル中間ノ凹くぼミノトコロノ白

サトイツタラナカッタ。……四十五歳トイウ年齢ニ達スルマデ、ソノ
 間ニ八女兒ヲ一人分^{ぶん}娩^{べん}シナガラヨクモソノ皮膚ニ少シノ疵^{きず}モシミモ附ケ
 ズニ来タモノヨ。僕八結婚後何十年間モ、暗黒ノ中デ手ヲモツテ触レル
 「#コト、1-2-24」ヲ許サレテイタダケデ、コノ素晴ラシイ肉体ヲ眼
 デ視ル 「#コト、1-2-24」ナク今日ニ至ツタガ、考エテミレバソレガ
 カエツテ幸福デアッタ。二十数年間ノ同^{どう}棲^{せい}ノ後ニ、始メテ妻ノ肉体美ヲ
 知ツテ驚ク 「#コト、1-2-24」ヲ得ル夫八、今カラ新シイ結婚ヲ始メ
 ルノト同ジダ。スデニ倦^{けん}怠^{たい}期^きヲ通り過ギテイル時期ニナツテ、私八昔ニ
 倍加スル情熱ヲモツテ妻ヲ溺^で愛^{あい}スル 「#コト、1-2-24」ガデキル。……

僕八俯向キニ寝テイル妻ノ体ヲモウ一度仰向キニ打^か反^えシタ。ソウシ
 テシバラク眼ヲモツテソノ姿態ヲ貪^むり食^ほイ、タダ歎息シテイルバカリデ
 アッタ。フト僕八、妻八ホントウニ寝テイルノデハナイ、タシカニ寝タ
 フリヲシテイルノニ違イナイト思ワレテ来タ。彼女八最初ハホントウニ
 寝テイタラシイガ、途中カラ眼ガ覺メタノダ。覺メタケレドモ事ノ意外
 ニ驚^おき呆^あレ、アマリニ羞^はかシイ恰^か好^{こう}ヲシテイルノデ、寝タフリヲシテ通
 ソウトシテイルノダ。僕八ソウ思ツタ。ソレハアルイハ事^じ実^じデハナク、
 僕ノ単ナル妄想デアルカモ知レナイガ、デモソノ妄想ヲ僕八無理ニモ信
 ジタカッタ。コノ白イ美シイ皮膚ニ包マレタ一個ノ女体ガ、マルデ死骸
 ノヨウニ僕ノ動カスママニ動キナガラ、実ハ生キテ何モカモ意識シテイ
 ルノダト思ウ 「#コト、1-2-24」ハ、僕ニタマラナイ愉^ゆ悦^{えつ}ヲ与エタ。
 ダガモシ彼女ガホントウニ睡ツテイタノダトスレバ、僕ハコンナ悪戯ニ
 耽^ふツタ 「#コト、1-2-24」ヲ日記ニ書カナイ方ガヨイノデハアルマイ
 カ。妻ガコノ日記帳ヲ盗ミ読ミシテイル 「#コト、1-2-24」ハホトン
 ド疑イナイトシテ、コンナ 「#コト、1-2-24」ヲ書イタラ今後酔ウ

「#コト、1-2-24」ヲ止メハシナイカ。……イヤ、恐ラク止メハシナイデアロウ、止メタラ彼女ガコレヲ盗ミ読ミシテイル。「#コト、1-2-24」ヲ証拠立テルヨウナモノデアルカラ。彼女ハコレヲ読ミサエシナケレバ、意識ヲ失ツテイル最中ニ何ヲサレタカ知ラナイハズナノデアルカラ。……

僕八午前三時頃カラ約一時間以上モ妻ノ裸形ヲ見守リツツ尽キル。「#コト、1-2-24」ノナイ感興ニ浸ツテイタ。モチロンソノ間タダ黙ツテ眺メテイタバカリデハナイ。僕ハ、モシ彼女ガ空寝入リヲシテイルノダトスレバ、ドコマデソレヲ押シ通セルカ試シテヤレトイウ氣モアツタ。最後マデ空寝入リヲセザルヲ得ナイ羽目ニ陥レテ困ラセテヤレトイウ氣モアツタ。僕ハイツモ彼女ガ厭ガツテイルトコロノ悪戯ノ数々、彼女ニ云ワセレバ執拗イ、恥カシイ、イヤラシイ、オーソドックスデナイトコロノ痴戯ノ数々ヲ、コノ機会デアルト思ツテ代ル代ル試ミテヤッタ。僕ハ何トカシテアノ素晴ラシイ美シイ足ヲ、思ウ存分ワガ舌ヲモツテ愛撫シ尽シタイトイウ長い間心ニ秘メテイタ念願ヲ、始メテ果たス。「#コト、1-2-24」ガデキタ。ソノ他アラユル様々ナ。「#コト、1-2-24」ヲ、彼女ノ常套語ヲ真似レバ、ココニ書き記スノモマコトニ恥シイヨウナイロイロナ。「#コト、1-2-24」ヲシテミタ。一度僕ハ、彼女ガイカナル反応ヲ示スカト思ツテアノ性慾点ヲ接吻シテヤツタガ、誤ツテ眼鏡ヲ彼女ノ腹ノ上ニ落シタ。彼女ハソノ時八明ラカニハットシテ眼ヲ覺マシタラシク瞬イタ。僕モ思ワズハットシテ慌テテ螢光燈ヲ消シ、一時室内ヲ暗クシタ。ソシテルミナール錠トカドロノツクス半錠トヲ、ストープノ上ニカカツテイタ湯沸シノ湯ニ水ヲ割り微温湯ヲ作ツテ飲マシタ。僕ガ口移シニスルト、彼女ハ半バ夢見ツツアルカノゴトキ様子デ飲ンダ。(ソノクライノ分量ヲ服シテモ利カナイ。「#トキ、43-3」ハ

利キハシナイ。僕八必ズシモ睡ラセルノガ目的デ飲マシタノデハナイ。彼女ガ睡ル真似ヲスルノニ都合ガヨカロウト思ッテ飲マシテヤツタノデアル）

彼女ガ睡リ込ンダ（モシクハ睡リ込ンダ風ヲシタ）ノヲ見定メテカラ、僕八最後ノ目的ヲ果タス行動ヲ開始シタ。今夜八僕八、妻ニ妨ゲラレル「#コト、1-2-24」ナク、スデニ十分ニ豫備運動ヲ行イ、情慾ヲ掻キ

立テタ後デアツタシ、異常ナ興奮ニフルイ立ッテイタ際デアツタカラ、自分デモ驚クホドノ「#コト、1-2-24」ヲ行ウ「#コト、1-2-24」

ガデキタ。今夜ノ僕八イツモノ意気地ノナイ、イジケタ僕デハナクテ、相当強力ニ、彼女ノ淫乱ヲ征服デキル僕デアツタ。僕八今後モ頻繁ニ彼女ヲ悪酔イサセルニ限ルト思ツタ。トコロデ彼女八、彼女ノ方モ数回ニ互リ事ヲ行ツタニモ力カワラズナオ完全ニ八睡リカラ覚メテイナイヨウニ見エタ。ナオ半醒半睡ノ状態ニアルカノゴトクデアツタ。時々彼女八眼ヲ半眼ニ見開イタガ、ソレハアラ又方角ヲ見テイタ。手モユツクリト動カシテイタガ夢遊病者ノヨウナ動カシ方デアツタ。ソシテ今マデニナ

イ「#コト、1-2-24」ニハ、僕ノ胸、腕、頬、頸、脚ナドヲ手デ探ルヨウナ動作ヲシタ。彼女ハコレマデ決シテ必要以外ノ部分ヲ見タリ触レタリシタ「#コト、1-2-24」ガナカッタノダ。彼女ノ口カラ「木村サン、トイウ一語ガ譚語ノヨウニ洩レタノハコノ時ダツタ。カスカニ、実ニカスカニ、タツタ一度ダケデアツタガ、確力ニ彼女ハソウ云ツタ。コレハホントウノ譚語ダツタノカ、譚語ノゴトク見セカケテ故意ニ僕ニ聞カセタノデアルカ、コノ「#コト、1-2-24」ハ今モナオ疑問ダ。ソシテイロイロナ意味ニ取レル。彼女八寝惚ケテ、木村ト情交ヲ行ッテイルト夢見タノデアルカ、ソレトモソウ見セカケテ、「ア、木村サントコンナ風ニナツタラナア」ト思ッテイル気持ヲ、僕二分ラセヨウトシテイル

ノデアロウカ、ソレトモマタ、「私ヲ酔ワセテ今夜ノヨウナ悪戯ヲスレバ、私ハイツモ木村サント一緒ニ寝ル夢ヲ見マスヨ、ダカラコンナ悪戯ハオ止メナサイ」トイウ意味デアロウカ。……

……夜八時過木村カラ電話。「ソノ後奥サンハイカガデスカ、才見舞イニ伺ウハズナノデスガ」ト云ウノデ、「アレカラマタ睡眠剤ヲ飲マシタノデマダ寝テイル、別ニ苦シンデハイナイラシイカラ心配ニ及バヌ」ト答エル。……

一月三十日。あれからまだずっとベッドにいる。時刻は今午前九時半。月曜で夫は三十分ほど前に出かけたらしい。出かける前そつと寝室にはいつて来、私が空寝入りしていると、しばらく寝息を窺^{みか}つてもう一度足に接吻して出て行った。婆やが「御気分はいかがですか」と云つてはいつて来たので、熱いタオルを持って来させ、室内の洗面台で簡単に顔を洗い、牛乳と半熟卵を一個持って来させた。「敏子は」と云うと「お部屋にいらつしゃいます」ということだったが姿を見せない。私はもう気分も良くなり、起きて起きられはないのだが、寝たまま日記をつけることにして一昨夜以来の出来事を静かに思い返している。いったい一昨日の夜はどうしてあんなに酔ったのかしら。体の工合^{くあい}もいくらかあったに違いないが、一つにはブランデーがいつものスリースターズではなかった。夫はあの日新しいのを一本買って来たのだが、ブランデー・オプ・ナポレオンと書いてある、クルボアジエという名のブランデーであった。私には大層口あたりが好かつたので、つい度を過した。私は人に酔つたところを見られるのが嫌^{いや}なので、飲み過ぎて気分が悪くなると便所へ閉^とじ籠^{こも}る癖があるのだが、あの晩もそうであった。私は何十分間ぐらい便所に籠^{こも}っていたのだろうか。何十分？ いや一時間も二時間もではなかつ

たろうか。私はちつとも苦しくはなかった。苦しいよりは恍惚こっくわうとした気持だった。意識はぼんやりしていたけれども全然覚えがないわけではなく、ところどころ分っている部分もある。あまり長時間便器に跨またがって蹲うすづみつていたのでも、腰や脚が疲れて、いつの間にか金隠しの前に両手をついてしまい、とうとう頭までべったり板の間についてしまっていたことも、うる覚えに思い出される。そして私は体じゅうが便所臭くなった気がして外へ出たのであったが、その臭気を洗い落すつもりだったのか、まだ足もとがふらついているので人に遇あうのが嫌だったのか、そのまま風呂場へ行って着物を脱いだのであったらしい。らしいというのは、何か遠い遠い夢の中の出来事のように記憶に残っているのだが、それから先はどうなったのか思い出せない。(右の上膊部じょうはくぶに絆創膏ばんそうこうが貼はつてあるのは誰かに注射されたのらしいが児玉先生でも呼んだのだろうか)気がついた時はすでにベッドの中にいて、早い朝の日光が寢室を薄明るくしていた。それが昨日の払暁の午前六時頃のことだったらしいのだが、それ以後ずっと意識がハッキリしつづけていたわけではない。私は頭が割れるように痛み、全身がズシンと深く沈下して行くのを感じつつ幾度も眼が覚めたり睡すたりすることを繰り返していた、いや、完全に覚め切ることも睡り切ることもなく、その中間の状態を昨日一日繰り返していた。頭はガンガン痛かったけれども、その痛さを忘れさせる奇怪な世界を出たりはいつたりしつづけていた。あれはたしかに夢に違いないけれども、あんなに鮮かな、事実らしい夢というものがあるだろうか。私は最初、突然自分が肉体的な鋭い痛苦と悦楽との頂天に達していることに心づき、夫にしては珍しく力強い充実感を感じさせると不思議に思っていたのだが、間もなく私の上にいるのは夫ではなくて木村さんであることが分った。それでは私を介抱するために木村さんはここに泊っ

ていたのだろうか。夫はどこへ行ったのだろうか。私はこんな道ならぬことをしてよいのだろうか。……しかし、私にそんなことを考える餘裕を許さないほどその快感は素晴らしいものだった。夫は今までにただの一度もこれほどの快感を与えてくれたことはなかった。夫婦生活を始めてから二十何年間、夫は何とつまらない、およそこれとは似ても似つかない、生ぬるい、煮えきらない、後味の悪いものを私に味あわせていたことだろう。今にして思えばあんなものは真の性交ではなかったのだ。これがほんとのものだったのだ。木村さんが私にこれを教えてくれたのだ。……私はそう思う一方、それがほんとうは一部分夢であることも分っていた。私を抱擁している男は木村さんのように見えるけれども、それは夢の中でそう感じているので、実はこの男は夫なのだということ、夫に抱かれながら、それを木村さんと感じているのだということ、それも私には分っていた。多分夫は、一昨日私を風呂場からここへ運び込んで寝かしつけておいてから、私が意識を失っているのをよいことにして私の体をいろいろと弄もてあそんだに違いない。私は彼があまり猛烈に腋の下を吸いつづけるので、ハツとして或る一瞬間意識を回復した時があった。彼がその動作に熱中し過ぎて掛けていた眼鏡を落したのが、私の脇腹わきばらの上に落ちてヒヤリとしたので、とたんに私は眼を覚ましたのだった。私は体じゅうの衣類を全部キレイに剥はぎ取られ、一絲も纏まとわぬ姿にされて仰向けに臥ねかされ、フロアスタンドと、枕元の螢光燈のスタンドとが青白い圈けんを描えいている中に曝さらされていた。そうだ、螢光燈の光があまり明るいので眼が覚めたのかも知れない。それでも私はただボンヤリしていただけであつたが、夫は私の腹の上に落ちた眼鏡を拾って掛け、腋の下を止めて下腹部のところに唇を当てて吸い始めた。私は反射的に身をすくめ、慌あわてて体を隠かくそうとして毛布を

探ったのを覚えているが、夫も私が眼を覚ましかけたのに気がついて私に羽根布団と毛布を着せ、枕元の蛍光灯を消し、フロアスタンドのシェードの上に覆いを被せた。寝室に蛍光灯などが置いてあるわけはないのだが、夫は書斎のデスクにあるのを持って来たのだ。夫は蛍光灯の光の下で、私の体のデテイルを仔細に点「#「てへん+兪」、第³水準「-84-94」」することに限りない愉悦を味わったのであろうと思うと、

私は私自身でさえそんなに細かく見たことのない部分々々を夫に見られたのかと思うと、顔が赧あかくなるのを覚える。夫はよほど長時間私を裸体にしておいたのに違いなく、その証拠には、私に風邪を引かせまいために、そうしてまた眼を覚まさせまいために、ストーブを真赤まっかに燃やして部屋を異常あまたに暖めてあった。私は夫に弄もばれたことを、今になって考えると腹立たしくも恥かしく感じるけれども、その時はそんなことよりも頭がガンガン疼つぎくのに堪えられなかった。夫が、カドロノツクスカルミナールかイソミタールか、何か睡眠剤だったのだろう、水と一緒にタブレットを噛かみ砕いたものを口うつしに飲ましたが、頭の痛みを忘れたいので私は素直にそれを飲んだ。と、間もなく私はまた意識を失いかけ、半醒半睡の状態に入ったのだ。私が、夫ではなくて木村さんを抱いて寝ているような幻覚を見たのはそれからであった。幻覚？　というと、何かぼうつと今にも消えてなくなりそうに空くうに浮かんでいるものようだけれども、私が見たのはそんな生やさしいものではない。私は「抱いて寝ているような幻覚」と云ったが、「ような」ではなく、ほんとうに「抱いて寝てい」た実感が今もなお腕や腿ももの肌はだにハツキリ残っているのである。それは夫の肌に触れたのとは全く違う感覚である。私はシカとこの手をもって木村さんの若々しい腕の肉を掴つかみ、その弾力のある胸板に壓おしつけられた。何よりも木村さんの

皮膚は非常に色白で、日本人の皮膚ではないような気がした。それに、……
 …… あゝ、恥かしいことだが、……… よもやよもや夫はこの日記の存在を
 知るはずはないし、まして内容を読むわけではないと思うので書くのだけ
 れども、……… あゝ、夫がこの程度であつてくれたら、……… 夫はどう
 してこういう工合に行かないのだろう。……… 実に奇妙なことなのだが、
 私はそう思いながらそれが夢であることも、……… 夢といつても、一部
 分が現実で、一部分が夢であることを、……… というのは、ほんとうは
 夫に犯されているのであつて、夫が木村さんのように見えているのであ
 るらしいことも、意識のどこかで感じていた。ただそれにしてはおかし
 いのは、あの内容の充実感だけが、……… 夫のものとは思われない^{あつかく} 壓
 だけが、依然として感じられていたのであつた。………

……… もしあのクルボアジエのお蔭^{かげ}であのように酔うことができるの
 であつたら、そしてあのような幻覚を感じることもできるのであつたら、
 私は何度でもあのブランデーを飲ましてほしい。私は私にああいう酔い
 を教えてくれた夫に感謝しなければならぬ。だがそれにしても、私が
 幻覚で見たものは、果して実際の木村さんなのであろうか。私は現実に
 は木村さんの容貌^{ようぼう}衣服を通しての姿態を知っているだけで、まだ一遍も
 ハダカを見たことはないのに、どうしてそれが幻覚になつて出て来たの
 であらうか。あれは私の空想している木村さんであつて、現実の木村さ
 んとは違ふのであろうか。一度私は、夢や幻覚でなく、実際に木村さん
 のハダカの姿を見てみたい気がする。………

一月三十日。……… 正午過木村カラ学校へ電話、「御容態ハイカガデ
 スカ」ト云ウカラ、「今朝僕ガ出カケル時マデ八寝テイタガモウ何デモナ
 サソウダ。今夜マタ飲ミニ来テクレタマエ」ト云ツタラ、「トンデモナ

イ、一昨夜ノ晩ハビックリシマシタ、少シ先生モ慎ンデ下サイ。シカシトニカク才見舞イニ参リマス」ト云ツテイタガ、午後四時二来夕。妻モモウ起キテ茶ノ間ニイタ。木村ハ「モウスグ失礼シマス」ト云ツタガ、
 「今夜ハゼヒ飲ミ直ソウヨ、マアイイマアイ」ト僕ハ強ク引キ止メタ。妻モ傍^{そば}デソレヲ聞キナガラニヤニヤシテイタ。決シテ嫌ナ顔ハシテイナカッタ。木村モ口デハソウ云イナガラソノ実腰ヲ上ゲル様子ハナカッタ。木村ハ一昨日ノ深夜、彼ガ辞去シタ後ニワレワレノ寢室ニオイテイカナル事件ガ起ツタカヲ知ルハズハナイノダガ、（僕ハ一昨夜夜ガ明ケル前ニ螢光燈ヲ二階ノ書齋ニ戻シテオイタ）、ソシテマタ、マサカ自分ガ郁子ノ幻影ノ世界ニ現ワレ、彼女ヲ陶醉セシメタ 「#コト、1-2-24」ヲ知ツテイルハズハナイノダガ、ニモカカワラズ、内心郁子ヲ酔ワセタガツテイルカノゴトキ様子ガ見エルノハ何故デアロウカ。木村ハ、郁子ガ何ヲ欲シテイルカヲ知ツテイルカノゴトクデアル。知ツテイルトスレバ、ソレハ以心伝心デアロウカ、アルイハ郁子カラ暗示サレタノデアロウカ。タダ敏子ダケハ、三人デ酒ガ始マルト必ズ嫌ナ顔ヲシテ自分ダケサツサト切り上げて出テ行ツテシマウ。……………

……………今夜モ妻ハ中座シテ便所ニ隠レ、ソレカラ風呂場（風呂ハ一日置キナノダガ、当分毎日沸カス 「#コト、1-2-24」ニスルト妻ハ婆ヤニ話シテイタ。婆ヤハ通イナノデ夕方水ダケ張ツテオイテ帰り、瓦斯^{ガス}ニ火ヲ付ケルノハワレワレノウチノ誰カナノダガ、今夜八時分ヲ見計ラツテ郁子ガ付ケタ）へ行ツテ倒レタ。スベテ一昨日ノ通りデアッタ。児玉氏ガ来テカンフルヲ射シタ。敏子ガ逃ゲタノモ、木村ガ適當ニ介抱シテ辞去シタノモ先夜ト同ジ。ソノ後ノ僕ノ行動モ同ジ。ソシテ最モ奇怪ナノハ、妻ノアノ譚語^{たわごと}モ同ジ。……………「木村サン」トイウ一語ガ今夜モ彼女ノ口カラ洩レタ。彼女ハ今夜モ同ジ夢、同ジ幻覺ヲ、同ジ狀況ノ下ニ

オイテ見夕？……………僕八彼女二愚弄サレテイルト解スベキナノデアロウ
力。……………

二月九日。……………今日敏子が別居させてくれと申し出た。理由は静かに勉強したいからであるとい、幸い別居するに好都合な家があるので急にその気になったのだと云う。それは同志社で彼女がフランス語を教えて貰っていたフランスの老夫人の家で、今も敏子はその老夫人に個人教授を受けているのである。夫人の夫は日本人であるが、目下中風で臥床しており、夫人だけが同志社に教鞭を執ったり個人教授をしたりして夫を養っているのであるが、夫が発病して以来自宅では敏子以外に生徒を取らず、もっぱら出教授を主にしている。家は夫婦二人きりで、間数は廣くないけれども、夫が書齋に使っていた離れ座敷の八畳が今は不用に帰しているから、そこに寝泊りして下されば夫人も病人の夫を置いて外出するのに安心である。電話もあるし、瓦斯風呂の設備もある。敏子が借りてくれれば願ってもない仕合せであると夫人の方から話があった。ピアノを持ち込むのなら、離れ座敷の床下に煉瓦でも敷いてネダを丈夫にし、電話も切り換えができるようにし、便所や風呂場も、夫の病室を通り抜けて行くようになっていて不便であるから、離れから直接行けるように通路をつける、それも極めて簡単に僅かな費用で取りつけられる、夫人の留守中、病人の夫に電話がかかって来ることはめつたにないが、あつても一切不問に附することにきめてあるから、敏子はそんなことに一々煩わされないでよいと云う、そういう条件で、部屋代も安くするそうだから、しばらくそうさしてほしいと云うのである。このところほとんど三日置きぐらいに木村さんが来てブランデーが始まり、クルボアジエはすでに二本目が空になり、そのたびごとに私が風呂場で倒れるので、

敏子も愛憎^{あいそ}が尽きたのであろう。深夜両親の寢室で時々煌々^{くわんくわん}と電燈^{とん}が点つたり、螢光燈ランプが輝いたりするのも、彼女は気がついて不思議に感じてゐるに違いない。ただし全くそれだけが理由であるのか、他にも私たちに秘している理由があつて別居を欲しているのであるか、そのところは何とも云えない。「パパが何とおっしゃるかあなたが直接聞いてごらん。パパがよいとおっしゃれば私は反対しません」と答える。……

二月十四日。……木村が今日妻が台所へ立ッテ行ッタ留守ニ妙ナ話ヲシタ。「アメリカニポーラロイド (Polaroid) トイウ写真機ガアルノヲ御存ジデスカ」ト云ウノダツタ。ソノ写真機ハ写シタモノガ即座ニ現像サレテ出テ来ル。テレビデ相撲ノ実写ノ後デ、アナウンサーガ取り口ノ解説ヲスル時ニ、キメ手ノ状況ガ早くモスチル写真ニ撮^とラレテ出テ来ルノハポーラロイドヲ使ッテ写スノデアル。操作ハ極メテ簡単デ、普通ノ写真機ト変リハナク、携帯ニモ便利デアル。ストロボノフラッシュユヲ用イレバ露出時間モ長キヲ要シナイカラ、三脚ヲ使ワナイデ写セル。目下ノトコロ好事^{こうず}ノ士ガ稀ニ用イルノミデ一般ニ普及シテイナイガ、普通ノ手札型ノロールフィルムニ印画紙ガ重ねテアルモノデ、容易ニ日本デハ手ニ入ラズ、一々アメリカカラ取り寄セルノデアル。トコロデ木村ノ友人ニソノ機械トフィルムヲ持ッテイル人ガアルノダガ、「オ入り用ナラ借リテ来テモヨロシユウゴザイマス」ト云ウノダツタ。ソウ云ワレテ僕ハ直チニ一ツノ着想ヲ思イツイタガ、シカシ、僕ニソウイウ機械ノアル「#コト、1-2-24」ヲ教エタラ僕ガ喜ブデアロウトイウ「#コト、1-2-24」ヲ、ドウシテ木村ハ察シタノデアロウカ、ソレガ不思議ダ。彼ハヨクヨクワレワレ夫婦ノ間ノ秘密ヲ知ッテイルモノト思ワナケレバナラナイ。……

二月十六日。……先刻、午後四時頃、ちよつと気になる出来事があった。私は日記帳を茶の間の押入の用筆筒ようだんすの抽出（私以外には用のない、誰も手を触れることのない抽出）の、臍へその緒書おだの父母の古手紙だの重ねてある一番下に突っ込んでおいて、なるべく夫の外出の隙すきを狙ねらって書くようにしているのだが、忘れないうちに書いておきたいこともあるし、急に書きたい衝動に駆られることもあるので、夫の外出を待つていられず、彼が書齋に閉じ籠こもっている時にも書く。書齋はこの茶の間の真上にあるので、音は聞えて来ないけれども、夫が今何をしつつあるか、書見しょけんをしているか、書き物をしているか、彼は彼で日記をつけているか、それともボンヤリ考えごとをしているか等々のことは、おおよそ私に察知できるような気がするのだが、それは恐らく夫の方も同様であろう。書齋はいつもシーンとして静かなのだけれども、しかし時々、夫が俄然がぜん息を詰めて階下の茶の間に注意を凝らし始めたらしく思われる、或る特別にシーンとしてしまう　ような気がする　瞬間がある。私が二階を意識しながら密かに日記帳を取り出して筆を執りつつある時に、ややもするとそういう瞬間が訪れるのであるが、それは私の気のせいばかりでもあるまい。私は音を立てないようにするために、西洋紙にペン字で書くことを避け、かように柔かい薄い雁皮紙がんびしを袋綴じにした小型の和装の帳面を作り、それへ毛筆の細字でしたためているのだが、さつきは私としてついぞないことに、書く方に興が乗り過ぎて、ほんの一二秒の間二階への注意を怠おろそかしていた。と、その時故意か偶然か、夫が音もなく便所へ下りて来て、茶の間の前を素通りして、用を済ますとまたすぐ二階へ上って行った。「音もなく」というのは、私が主観的にそう感じたので、夫は多分用便をする以外に他意はなかったであろう。夫とし

ては足音を忍ばしたわけではなく、全く普通の歩き方で階段を下りて来たのを、たまたま私が注意を外らしていたために聞くべき音を聞き損ったのである。とにかく私は夫が階段を下り切った時に始めて足音に心づいた。私は食卓に靠れて書いていたのだが、慌てて日記帳と矢立（私はこういう場合に備えて硯を用いず、矢立を用いている。それは父の遺品で、唐木で作った、中国製のものらしい骨董的価値のある矢立である）を卓の下に隠したので、現場は見られないで済んだが、帳面を慌てて隠す時に雁皮の紙を揉みくしゃにしたので、ひよつとしたら、あの紙に特有なびらびらした音が聞えはしなかったかと思う。いや、聞えたに違いないと思う。そして、あの音を聞けば雁皮を想像するに違いないし、そうすればそれを私が何の目的で使っているかを、推知したのではあるまいかと思う。私は今後用心しなければいけないが、夫に日記帳の存在を嗅ぎつかれたとすれば、どうしたらよいか。今さら隠し場所を変えたところで、この狭い室内のどこへ隠しても発見されずに済むはずはない。唯一の方法は、夫の在宅中は私も努めて家を空けないようにすることである。私は近頃頭の重い日がつづくので、以前のように頻繁に外出することはなく、錦への買い出しも大概敏子が婆やに任せているのだが、実は木村さんに、朝日会館で「赤と黒」を上映しているのを見に行きませんかと、この間から誘われているのである。行きたいことは行きたいが、何かそれまでに対抗策を考えておく必要がある。……

二月十八日。……昨夜デ僕八、妻ノ「木村サン」トイウ語ヲ耳ニスル「#コト、1-2-24」ガ四回ニ及ンダ。モハヤアノ譚語八、譚語ヲ装ツテイルノデアル「#コト、1-2-24」ヲ疑ウ餘地ガナクナツタ。トスルト、何ノ目的デサヨウナ「#コト、1-2-24」ヲスルノデアロウカ。「

私ハホントウハ睡ッテイルノデハナイ、睡ツタフリヲシテイルノデスヨ」
 トイウ。「#コト、1-2-24」ヲ分ラセテイルノデアルトシテモ、ソレハ、
 「私ハセメテ相手ヲアナタト思イタクナイノデス、木村サンダト思イタ
 イノデス、ソウシナケレバ感興ガ湧^わイテ来ナイノダカラ、結局ハソレガ
 アナタノタメデモアリマス」トイウ意味ナノカ、「コレモヤハリアナタ
 ヲ嫉妬サセテ刺戟ヲ与エル手段ナノデス。私ハドンナ場合デモ常ニ夫ニ
 忠実ナル妻デアル以外ノ何者デモアリマセン」トイウ意味ナノカ。……
 ……敏子ガ今日イヨイヨ別居ヲ決行スル。「#コト、1-2-24」ニナッ
 テ、マダム岡田ノ家ニ引キ移ツタ。風呂場ト離レ屋トヲ廊下デツナゲル
 ノト、ピアノノ床下ニ煉瓦ヲ積ム工事ハアラカタ終ツタガ、電話ノ切り
 換エガマダアルシ、今日ハ赤口デ日ガ悪イカラ二十一日ノ大安マデ待
 チナサイト昨日郁子ハ云ツテイタガ、敏子ハ構ワズ行ツテシマツタ。ピ
 アノダケハ運搬ノ都合デ二三日^{おく}後レルガ、他ノ荷物ハ木村ガ手伝イニ来
 テ大体運ンダ。(昨夜ノ今日デ郁子ハ例ニヨリ今朝ハマダ^{こんすい}昏睡シテイタ。
 夕方ニナツテヨウヤク起キタノデ引ツ越シノ手伝イハセズニシマツタ)
 場所八田^{たなかせきでんちよう}中関田町デアルカラ、ココカラ歩イテ五六分ノ所ダ。木村ガ間
 借りシテイルノモ百万^{ひゃくまんべん}遍ノ近所デ田中門前町デアルカラ、コノ方八関田
 町ニ一層近い。木村ハ手伝イニ来タツイデニ、「ヨロシユウゴザイマス
 カ」ト階段ノ途中カラ声ヲカケテ上ツテ来テ書齋ニハイリ、「オ約束ノ
 品ヲ持ツテ来マシタ」トポーラロイドヲ置イテ行ツタ。

二月十九日。……敏子の心理状態が私には掴めない。彼女は母を愛
 しているようでもあり憎んでいるようでもある。だが少くとも、彼女が
 父を憎んでいることは間違いない。彼女は父母の閨房関係を誤解し、生
 来淫蕩な体質の持主であるのは父であって、母ではないと思っ

しい。母は生れつき繊弱なたちで過度の房事には堪えられないのに、父が無理やりに云うことを聴かせ、常軌を逸した、よほど不思議な、アクドイ遊戯に耽^{ふけ}るので、心にもなく母はそれに引きずられているのだと思っ
ているらしい。（ほんとうを云うと、私が彼女にそう思わせるように仕
向けたのである）昨日彼女は最後の荷物を取りに来て寝室へ挨拶に見え
た時に、「ママはパパに殺されるわよ」とたった一言警告を発して行っ
た。私同様沈黙主義の彼女にしては珍しいことだ。彼女は私の胸部疾患
が、こんなことから悪化して本物になりはしないかを、ひそかに心配し
ているらしくもあるのだが、そうしてそれゆえに父を憎んでいるらしい
のだが、でもその警告の云い方が妙に私には意地の悪い、毒と嘲^{あざけ}りを含
んだ語のように聞えた。娘の身として母を案じる暖かい気持から云って
いるようには受け取れなかった。彼女の心の奥底には、自分の方が母よ
り二十年も若いにかかわらず、容貌姿態の点において自分が母に劣って
いるというコンプレックスがあるのではないか。彼女は最初から木村さ
んは嫌いだと云っていたが、母 ジェームス・スチュアート
木村さん という風に気を廻して、ことさら彼を嫌っているらしく
装っているので、本心は反対なのではないか。そして内々私に敵意を抱^{いだ}
きつつあるのではないか。

……私はできるだけ家を空けないことにしているけれども、いつど
んな事情で外出の必要に迫られることがあるかも知れず、夫も授業中で
あるべき時刻に突然帰宅することがないとも限らず、いかに日記帳を処
置しておくべきかについて種々考えた。隠しても無駄^{むだ}であるとするれば、
私の留守に夫が果してあの内容を盗み読みしたかどうかを、せめて確か
める方法だけは講じておきたい。せめて私は、夫が内証で私の日記帳に
眼^めを通したかどうかを、知るだけは知りたい。私は何か日記帳に目印を

つけておく。夫が内証で中を覗いたか否かは目印を見れば分るようになっておく。その目印は私にだけ分つて、彼には分らないようなものであれば一層よい。いや、彼にも分るようなものの方がかえつてよいのではあるまいか。彼が、自分が盗み読みしていることを妻に知られたと悟れば、以後盗み読みすることを慎しむ結果になりはしまいか。(どうか怪しいものだけでも) が、いずれにしてもそういう目印を考へることは容易でない。一回は成功するかも知れないが、たびたび同じ方法を用いれば裏を搔かれる恐れがある。たとえば爪楊枝つまようじを何ページ目かに挟はさんでおいて、開けるとパラリと落ちるようにしておく。一回は巧うまく行くとして、二回目からは夫はその爪楊枝を落さないように取り扱あつかい、それが何ページ目に挟んであるかを勘定して、もとの通りに戻しておくであろう。(夫はそういう点は実に陰険なのである) そうかといつて一回々々新しい方法を案出することは不可能に近い。私はいろいろ考へて、試みにスコッチ印のセロファンテープの六〇〇番を適當の長さ(測つてみたら五センチ三ミリあつた)に切り、帳面の表紙の或る一箇所を選んで、表と裏とをそのテープで封じてみた。(その位置は天から八センチ二ミリ、地から七センチ五ミリの所であつたが、テープの長さや貼る位置はそのつど少しずつ変へる必要がある) こうすると、中を読むためにはテープを一度剥はがさなければならぬ。一度剥がして、また新しいテープを同じ長さに切り、同じ位置に正確に貼つておくということは、理論上できなくはないにしても、実際にはとても面倒で煩瑣はんさで、できるものではない。それにテープを剥がし取る時に、どんなに注意深くしても周囲の表紙の表面に擦過した痕あとを残すことになる。好都合にも私の日記帳の表紙は、ももけやすい奉書こぶんに胡粉を塗つたような紙なので、テープを剥がすと、それと一緒に周囲の表面がところどころ二三ミリぐ

らい剥ぎ取られて行く。この方法を用いると、夫は絶対に、痕跡を残すことなく内容を読むことはできない。……………

二月二十四日。……………敏子ノ別居以来、木村ハ遊ビニ来ル表向キノ口実ガナクナツタワケダケレドモ、相変ラズニ三日置キニ来ル。僕ノ方カラモ電話ヲカケル。(敏子モ日ニ一度ハ顔ヲ見セルラシイガ長クハイナイ)ポーラロイドハスデニ二晩使用シタ。写真ハ全裸体ノ正面ト背面、各部分ノ詳細図、イロイロナ形状ニ四肢ヲ歪曲サセ彎屈サセ、折ツタリ伸バシタリシテ最モ^{こわくてき}震撼的ナル角度カラ撮ツタ。僕ガコレヲ撮ツタ目的ハ何ニアルカトイウト、第一ハ撮ル。「#コト、1-2-24」自体ニ興味ヲ感じタカラダ。寝テイル(モシクハ寝テイルフリヲシテイル)女体ヲ自由ニ動かシテ種々ナ姿態ヲ作ツテミル。「#コト、1-2-24」ニ愉悦ヲ覚エタカラダ。第二ノ目的ハ、コレヲ僕ノ日記帳ニ貼付シテオク。「#コト、1-2-24」ダ。ソウスレバ妻ハ必ズコレヲノ写真ヲ見ルニ違イナイ。ソウスレバ彼女ハ今マデ彼女自身気ガツカナイデイタ部分ノ彼女ノ姿態ノ美ヲ発見シ、ソシテ驚クニ違イナイ。第三ノ目的ハ、ソウスレバ彼女モ、僕ガイカニ彼女ノ裸体ヲ見タガツテイルカノ理由ヲ解シ、僕ニ同感 ムシロ感激スルデモアロウカラダ。(本年五十六歳ノ夫ガ四十五歳ノ妻ノ裸体ニカクモ^{あしが}憧レルトイウ。「#コト、1-2-24」ハ希有ノ「#コト、1-2-24」ダ。ソレヲ考エテミルガヨイ)第四ノ目的ハ、ソウスル。「#コト、1-2-24」ニヨツテ彼女ヲ極度ニ辱カシメ、彼女ガドコマデシラヲ切ツテイラレルカラ試シテヤリタイノダ。コノ写真機ハレンズガ暗ク、レンジ・ファインダーガ付イテイナイノデ、目測デ写サナケレバナラズ、僕ノヨウナ未熟ナモノガ撮ツタノデハピンボケニナリヤスイ。ソレニ、ポーラロイド用ノフィルムモ最近ハ非常ニ感光度ノ優レ

タモノガ出テイルソウダケレドモ、日本デハチヨット入手困難ダソウデ、木村ノ持ツテ来タモノ八期限ノ切レタ古フィルムデアルカラ、ヨイ結果ガ得ラレルハズハナイ。一々フラッシュユヲ用イナケレバナラナイ。「#コト、1-2-24」モ厄やっかい介かいデ不便ダ。コノ機械きがいデハ僕ハワズカニ第一ト第四ノ目的ヲ満足サセ得ルニ過ギナイノデ、マダ今ノトコロ貼付スル。「#コト、1-2-24」ヲ見合ワセテイル。……………

二月二十七日。日曜だというのに、木村さんが朝九時半に「赤と黒」を見に行きませんかと云ってやって来た。今は大学志望の学生たちが入学試験の準備に追われているので、教師たちも相当忙しい。三月になればかえっていくら暇になるが今月は週に何回か学校に残って、補習授業をしてやらなければならない。宿に帰ってからも、時々学校以外の学生で、特に木村さんに指導を仰ぎに来る者もある。木村さんは勘がよくて、ヤマを当てることが名人で、木村さんがここと思ったところはきつと試験に出るのだという。彼のそういう勘のよさは私にも分るような気がする。学問のことはどうか知れないが、勘では私の夫なんかとても木村さんの足元にも及びそうもない。……………そんなわけで、今月は日曜だけが一番ゆつくりできるのだそうだが、日曜は夫が朝から家にいるので、私の外出には都合が悪い。木村さんは来がけに敏子に声をかけて来たので、敏子も後から誘いに来た。「自分は一緒に行きたくはないのだが、二人では工合が悪いだろうから、ママのために犠ぎせい牲せいになつて付き合つて上げる」といったような顔をしている。「日曜は朝早く行かないと席がありませんからね」と木村さんは云う。「己おれは一日家にいるよ。構わな

いから行って来なさい、『赤と黒』は見たいと云っていたじゃないか」と夫が傍からしきりにすすめる。夫のすすめる理由は分るが、こういう

場合のことも考えておいたのであるから、三人で出かけることにした。十時半に入場し、午後一時過ぎ退場。昼の食事に寄るように云ったけれども二人とも宿へ帰った。夫は一日家にいると云ったくせに、私が戻ると入れ違いに三時頃から夕方まで散歩に出かけて帰らなかった。私は夫が留守になると早速日記帳を取り出してみた。セロファンテープは大体元の位置に貼ってあった。表紙も一見擦り切れた痕がなかった。が、拡大鏡をあてて見ると、微かに二三箇所きずのあること（よほど注意深く剥がしたとみえる）が蔽おほい隠すべくもなかった。私は二段構えをして、テープの外に、内部にも何枚目ということを数えて小楊枝を挟んでおいたが、それも前と違った場所になっていた。今は夫がこの日記帳を盗み読みしたことは疑いない。すると私は、今後日記を附けることを継続すべきであろうか中止すべきであろうか。私は自分の胸中を他人に語ることを欲しないがゆえに、自分自身にだけ語って聞かせるのが目的で日記をつけ始めたのであるが、今や他人に読まれていることが明らかになった以上、中止すべきであるようにも思うけれども、他人というのが夫であり、表面はどこまでも互いに見ない建て前になっているのであるから、やはり継続してしかるべきであるように思う。つまりこれからは、こういう方法で、間接に夫にもものを云うのである。直接には恥かしくて云えないことも、この方法でなら云える。しかしくれぐれも、夫が内証で読むことは仕方がないとして、決して読んだということを露骨に云わないで貰いたい。もつとも彼は読んでも読まないふりをする人だから、そんなことを断る必要はないかも知れない。次に、夫はどうであろうとも、私は決して夫の日記帳を読んでいないことを信じてほしい。私が至って舊式な、かりにも他人の手記などを盗み読むことのできるような育ち方をした女でないことは、誰よりも夫がよく知っている。私は夫の日記帳

のありかを知っており、時にはそれにそつと手を触れたこともあり、稀には中を開けて見たことさえもないではないが、文字は一字も読んだこととはない。それは本当のことなのである。……

二月二十七日。……ヤツパリ推察通りダツタ。妻八日記ヲツケテイタノダ。僕八今日マデワザトコノ「#コト、1-2-24」ヲ日記ニ書カズニイタノダガ、実八数日前ニウスウス気ガ付イタノダツタ。先日ノ午後、便所へ下リテ茶ノ間ノ前ヲ通ツタ「#トキ、72-13」ニ、中硝子なかガラスノ中ヲ覗クト妻ガ不安定ナ姿勢デ食卓ニ靠もたレテイタ。ソノ前ニ僕八、雁皮ノヨウナ紙ガ急ニクシヤクシヤト揉ミクシヤニサレル音ヲ聞イタ。ソレモ一枚ヤ二枚デハナイ。恐ラク一冊ニ綴とジタ厚味ノアルモノガ慌テテ荒々シク座布団ノ下力何カへ押し隠サレル音デアツタ。僕ノ家庭デ雁皮ヲ使ウ「#コト、1-2-24」ハメツタニナイ。僕八妻ガ、嵩張かさばラナイデ音ノシナイアノ紙ヲ何ノ用途ニ使ツテイルカヲ直チニ想像スル「#コト、1-2-24」ガデキタ。デモ今日マデハソレヲ確カメル機会ガナカツタガ、今日彼女ガ映画ヲ見ニ出カケタ間ニ茶ノ間ヲ捜シテ、容易ニ探リアテル「#コト、1-2-24」ヲ得タ。トコロガ何ト驚イタ「#コト、1-2-24」ニハ、早くモ僕八嗅ギツカレル「#コト、1-2-24」ヲ豫想シテ、セロファンテープデ封ジテアルノダ。馬鹿ナ「#コト、1-2-24」ヲスル女デアル。彼女ノ疑イ深イノニハ呆おきレル。僕八女房ノ日記トイエドモ、無断デ読ムヨウナ「#コト、1-2-24」ヲスル卑劣漢デハナイ。ガ、ツイ意地悪ナ気持ガ起ツテ、テープヲ上手うまニ痕跡ヲトドメル「#コト、1-2-24」ナク剥ガス「#コト、1-2-24」ガデキルカドウカヲ試シテミタ。僕八彼女ニ、「テープデハ駄目ダゾ、コンナモノデハ知ラナイウチニ盗ミ読ミサレルゾ、モットホカノ方法ヲ考エロ」ト注意シテヤリタクナツ

タノダ。結果ハシカシ失敗ダツタ。サスガニ彼女ノ計画ノ綿密ナノニハ
 恐れ入ツタ。僕ハ随分注意深く剥ガシ取ツタツモリデアツタガ、表紙ニ
 痕ヲツケテシマツタ。結局アレヲ彼女ニ悟ラレル。「#コト、1-2-24」
 ナシニ剥ガス。「#コト、1-2-24」ハ不可能デアル。「#コト、1-2-24」
 ガ分ツタ。テープノ寸法モ測ツテアツタニ違イナイト思ウガ、ウツカリ
 丸メテシマツタノデ調べル。「#コト、1-2-24」ガデキナイ。目分量デ
 同ジクライノ寸法ノテープデマタ封ヲシテオイタ。彼女ガ心付カズニイ
 ルハズハナイ。シカシクレグレモ断ツテオクガ、僕ハ封ハ切ツタケレド
 モ、中ヲ開イテハ見タケレドモ、文字ハ一字モ読ミハシナイ。ア
 ンナ細字デ書イテアルモノヲ近眼ノ僕ガ読ムノハツライ。ソレハ信ジテ
 貰イタイ。モットモ、僕ガ読マナイト云エバ云ウホド反対ニ「読ンダ」
 ト思ウノガ彼女ナノダ。読マナイデモ読ンダト思ワレルクライナラ読ン
 ダ方ガヨイヨウナモノダガ、ソレデモ僕ハ断ジテ読マナイ。僕ハ実ハ、
 彼女ガ日記ニ、木村ニ対スル心持ヲドンナ風ニ告白シテイルカ、ソレヲ
 知ルノガ恐ロシイノダ。郁子ヨ、願ワクバ日記ニソレヲ書カナイデクレ。
 僕ハ盗ミ読ミハシナイケレドモ、ソレニシテモ本当ノ「#コト、1-2-
 24」ハ書カナイデオイテクレ。「#「言+墟のつくり」、第⁴水準²⁻
⁸⁸⁻⁷⁴」デモ、木村ハ刺戟劑トシテ利用シテイルニ過ギズ、ソレ以上ノ
 何者デモナイトシテオイテクレ。……

今朝木村ガ郁子ヲ映画ニ誘イ出シニ来タノハ、カネテ僕ガ頼ンデオイ
 タカラダ。僕ハ、「コノゴロ僕ノ在宅ノ時ニ妻ガ外出シテイル」「#コ
 ト、1-2-24」ガ少ナイ。用事ハスベテ婆ヤニ云イツケテイル。ドウモ変
 ダト思ウ。「#コト、1-2-24」ガアルカラ彼女ヲ連れ出シテ二三時間過
 シテ来テクレ」ト云ツタカラダ。敏子モ一緒ニツイテ行ツタノハ、今マ
 デノ慣例ニヨツタノダロウガ、ソレニシテモ彼女ノ氣持ヲ解スルニ苦シ

ム。敏子ハ母親ニ似テ母親以上ニ複雑ナトコロガアル。思ウニ彼女ハ、世間ノ多クノ父親ト違イ、僕ガ彼女ヨリモ彼女ノ母ヲ熱狂的ニ愛シテイルラシイノニ憤懣ふんまんヲ感ジテイルノデハナイカ。モシソウナラバソレハ誤リデ、僕ハ彼女ヲ同等ニ愛シテイルノデアル。タダ愛シカタガ全然違ウダケナノデアル。イカナル父親モ、自分ノ娘ヲフアナチックニ愛スル奴やつハイナイ。イツカコノ「#コト、1-2-24」ハ敏子ニ説明シテヤラネバナラナイ。……今夜ハ敏子ノ別居後始メテ、四人デ夕食ノ卓ヲ囲ンダ。敏子ハ先ニ去リ、妻ハブランデーノ後例ノゴトクニナツタ。夜オソク木村ガ去ル。「#トキ、75-11」僕ハポーラロイドヲ返シタ。「現像ノ面倒ガナイトイウ長所ハアルケレドモ、フラッシュヲ用イルノガ手数デアルシ、ヤハリ普通ノ機械ノ方ガ撮リヨイネ。家ニアルツワイス・イコンヲ使ツテ写シテミヨウカト思ウ」ト云ツタラ、「現像ハ外ヘオ出シニナルノデスカ」ト彼ガ聞イタ。僕ハソノ「#コト、1-2-24」ヲ種々考エテイタノダガ、「君ガ自宅デ現像シテクレルワケニハ行カナイダロウカ」ト云ツタラ、木村ハチヨット困ツタ顔ヲシテ、「オ宅デ現像ナスツタライカガデス」ト云ウ。「君ハ僕ガ何ノ写真ヲ撮ルノデアルカ分ツテイルダロウネ」ト云ツタラ、「ヨクハ存ジマセンケレドモ」ト云ウ。「人ニ見ラレテハ困ル写真ダガ、僕ガ自宅デ現像スルノハ工合ガ悪イ。引キ伸バシモシタイト思ウノダガ、家ニハ暗室ヲ作ルニ適當ナ場所モナイ。君ノ今イル宿ニ作ル「#コト、1-2-24」ハデキナイダロウカ。君ニダケハ見ラレテモ仕方ガナイ」ト云ツタラ、「場所ハナイ」「#コト、1-2-24」モアリマセン、宿ノ主人ニ話シテ見マシヨウ」ト云ウ。……

二月二十八日。……朝八時、妻ガマダ昏睡中ニ木村ガ来タ。登校ノ途中ニ寄ツタノダト云ウ。僕モマダ寢床ニイタガ、彼ノ声ガスルノデ起

キテ茶ノ間ニハイルト、「先生、オーケーデス」ト云ウ。何ノ「#コト、1-2-24」カト思ツタラ、暗室ノ「#コト、1-2-24」デアッタ。彼ノ宿デハ近頃風呂ヲ立テナイノデ、風呂場ガ空イテイルカラ、アスコヲ使ツテモ構ワナイ、アスコナラ水道モジャンジャン使エルト云ウ。早速ソノ手配ヲシテ貰ウ「#コト、1-2-24」ニシタ。……………

三月三日。……………木村ハ試験デ忙シイトイウノニ、僕以上ニ熱心デア
ル。……………昨夜僕ハ長イコト使ツタ「#コト、1-2-24」ノナカッタイ
コンヲ取り出シテ、三十六枚ノフィルムヲ一夜ニ全部写シテシマッタ。
木村ハ今日マタ何気ナイ様子デヤツテ来タ。ソシテ「ヨロシユウゴザイ
マスカ」ト書齋ニハイツテ来テ僕ノ顔色ヲ見ルノデアッタ。正直ヲ云ウ
ト、僕ハコノ現像ヲ木村ニ委嘱スベキデアルカ否カニツイテ、ソノ時マ
デナオ決シカネルトコロガアツタ。彼ハ郁子ノ裸ノ姿態ヲスデニタビタ
ビ見テイルノデアルカラ、他人ニ委嘱スルトスレバ彼ヲ措おイテ他ニナイ。
ガ、彼トイエドモ瞬間的ニ部分々々ヲチラリチラリト見テイルニ過ギズ、
様々ナ角度カラ蠱惑的ナ姿勢ノトコロヲシミジミト眺メタ「#コト、
1-2-24」ハナイノデアル。ソウイウ彼ニ委嘱スル「#コト、1-2-24」
ハ、彼ヲアマリニ刺戟スル「#コト、1-2-24」ニナリハシナイカ。彼
ガソコマデテ踏ふミトドマツテクレレバヨイガ、ソレ以上ノ「#コト、
1-2-24」ガ起ル懸念けねんガアリハシナイカ。ソウナツタ時ニ、ソレヲ挑発ちやうはつシ
タ者ハ誰デモナイ僕デアツタトスルト、責メラレテヨイノハ僕ノミデア
ル。彼ニ責任ハナイ「#コト、1-2-24」ニナル。トコロデマタ、妻ガ
ソノ写真ヲ見セラレタ場合ノ「#コト、1-2-24」モ考エテミル必要ガ
アル。マズ何ヨリモ、彼女ハ夫ガ自分ノ知ラ又間ニソソナ写真ヲ撮リ、
シカモソレヲ他人ニ現像サセタ「#コト、1-2-24」ヲ憤ルアル

イハ憤ル真似ヲスル

「#コト、1-2-24」ハ確カデアル。次ニ、

彼女八自分ノ恥カシイ姿ヲ木村ニ見ラレテシマツタ以上、シカモ

夫ガソレヲサセタノデアル以上、自分八木村ト不義ヲスル「#コト、

1-2-24」ヲ夫ニ許サレタモ同然デアルト考エルニ至ルカモ知レナイ。因

果ナ「#コト、1-2-24」ニ、僕八ソコマデ想像スルトイヨイヨタマラ

ナイ嫉妬ヲ感ジ、ソノ嫉妬ノ快感ノユエニアエテソノ危険ヲ冒シテミタ

クナルノデアツタ。僕八意ヲ決シテ木村ニ云ツタ、「デハコレノ現像ヲ

頼ム、絶対ニ誰ニモ見セナイデスベテヲ君自身デシテクレタマエ。現像

シタノヲ一往見セテ貰ツタ上デ、中カラ面白イモノヲ選ンデ手札型ニ引

キ伸バシテ貰ウ」ト。木村八内心ハナハダシク興奮シテイタニ違イナイ

ガ、「ハア」ト云ツテ努メテ無表情ヲ装ツテ、諒承シテ去ツタ。……

三月七日。……今日また書齋の書棚の前に鍵が落ちていた。今年に

なつて二度目である。この前は正月四日の朝であつた。夫の留守に掃除

にはいったら、水仙の活けてある一輪「#「挿」でつくりの縦棒が下

に突き抜けている、第4水準2-13-28」しの前に落ちていた。今朝は臘

梅の花が萎んでいるのに心づいて、侘助槽わびすけつぼに活けかえようと思つて行つ

たら、あの時と同じ所にあの鍵が落ちていた。これはわけがあるなと思つ

て抽出を開け、夫の日記帳を取り出してみたら、何と、私がしたのと同

じようにテープで封がしてあつた。これは夫が、「ぜひ開けてみる」と

いうことをわざと反対に云っているのだ。夫の日記帳は普通に学生が使

うノートブックで、表紙はツルツルの厚い西洋紙であるから、私のより

は剥がしやすいように見えた。私はこのテープを、巧く痕跡を留めない

ように剥がすことができるかどうかを試してみたい好奇心だけに駆られ

て、全くただその好奇心のみで、剥がしてみた。ところが、

いくら上手に剥がしてもやはり微かながら痕跡が残る。あんなツルツルの硬い紙でも、どうしても多少の疵がつく。テープの貼られた所だけに型が残るのならよいが、剥がす拍子に周囲に疵がひろがるので、誰かが開けたことは蔽い隠しようもない。私は新しいテープをまた貼っておいたけれども、夫は当然それに心づいて、私が中を盗み読みしたと思うことは疑いない。しかし私は幾度も云う通り、内容は一字も読んでいないことを神かけて誓う。夫は私が猥談を聴くのを嫌がるので、ああいう形で私に話しかけたいのが本意なのかも知れないと思うが、それゆえにこそなおさら私は読むのを厭わしく、汚らわしくさえ思う。私は夫の日記帳を急いでさっと開けてみて、厚みがどのくらいに達したかを測る。それももちろん好奇心からである。私は眼をもつて、夫のあの非常に線の細い、神経質なペン字が性急に走っているページ面を、蟻が這うのを見るように見るだけですぐページを伏せる。が、今日はページ面に何か猥褻な写真らしいものが何枚も貼つてあるのに気がついた。私は慌てて眼を閉じ、いつもより一層急いでページを伏せた。一体あれは何だったのだろう。あんな写真をどこから持って来、何の目的で貼つたのだろう。……私に見せるのが目的なのではあるまいか。あの写真に写されている人物は誰なのだろう。突然私に、或るはなはだ厭わしい想像が浮かんだ。この間じゅう、夜中私は夢の中で、時々室内がにわかパツと明るくなつたような感じを抱いたことが一二度あつた。当時私は、誰かがフラッシュを用いて私を撮影しつつあるような幻影を見ているのだと思っていた。その「誰か」は、夫であるような気もしたし、木村さんであるような気もしたこともあつた。しかし今考えると、あれは夢や幻影ではなかつたのかも知れない。事實は夫がまさか木村さんであるはずはない、私を写していたのかも知れない。そういえばいつぞや、「お前はお前

自身の体がどんなに立派で美しいかということを知らずにいる。一度写真に撮って見せてやりたいね」と云っていたことがあったのを思い出す。そうだ、きっとあの写真は私を撮ったものなのだ。……

……私はときどき昏睡中に、自分が裸体にされることをボンヤリ感じていた。今まではそれも自分の妄想ではないかと思っていたけれども、もしあの写真が私のものであるとすれば、やはり事実だったのである。しかし私は、自分が眼覚めている時には許すわけに行かないけれども、知らないうちに写されるのなら許しても差支えないと思う。浅ましい趣味ではあるけれども、夫は私の裸体を見ることが好きなのであるから、せめて夫に忠実な妻の勤めとして、知らないうちにハダカにされることぐらいは忍耐しなければいけないと思う。これが封建時代の貞淑な女房であつたら、妻が夫の命に服するのである以上、どんなに忌まわしいイヤらしいことであつても、進んで云いつけに従つたであろうし、従わなければならなかつたであろう。まして私の夫は、そういう^{きちが}気狂いじみた遊戯によつて刺戟を受けるのでなければ、私を満足させるような行為をなし得ないのであるとすればなおさらである。私は義務を果たしているのみではない。一面私は、貞淑で柔順なる妻であることの代償として、私の限りなく旺盛^{おうせい}なる淫慾を^み充たさして貰つていたのである。それにしても夫は、何故私を裸体にするだけで足りいとせず、それを写真に撮つた上、恐らくは私に示すのが目的で、その写真を引き伸ばして帳面に貼つたりするのであるうか。極度の淫乱と極度のハニカミとが一つ心に同居している私であることを、最もよく承知している夫ではないか。そうしてまた、夫はあの引き伸ばしを誰に依頼したのであるか。ああいうものを他人の眼に触れさせてまで、そんなことをする必要がどこにあつたのであるか。それは私に対する単なるイタズラか、それとも何か意味のあ

ることなのか。いつも私の「お上品趣味」を冷やかしている夫として、私のつまらないハニカミ癖を矯正してやろうという意図なのか。……

三月十日。……コンナ 「#コト、1-2-24」ヲココニ書イテヨイカ悪イカ、妻ガコレヲ読ンダ場合ニドンナ結果ニナルカ疑問ダガ、僕ハ白状スルト、コノ間カラ心身ニ或ル種ノ異状ヲ来タシツツアル ヨウ

ナ氣ガシテイル。「氣ガシテイル」トイウノハ、ソレガソンナニ大シタ
「#コト、1-2-24」デモナイノイローゼニ過ギナイヨウニモ思エルカラダ。本来僕ハ必ズシモアノ方ノ精力ガ常人ニ劣ツテイタワケデハナイ。ダガ中年以後、妻ノ度ハズレテ旺盛ナ請求ニ応ズル必要ガアツタタメニ、早期ニ精力ヲ消耗シ尽シ、今日デハアノ方面ノ慾望ガハナハダ微弱ニナツテシマツタ。イヤ、慾望ハ大イニアルノダガ、ソレヲ裏付ケル体力ガ缺ケテシマツタトイッタ方ガヨイ。ソコデイロイロ不自然ナ、無理ナ方法デ強イテ感情ニ刺戟ヲ与エ、辛ウジテアノ病的ニ絶倫ナ妻ニ對抗シテイル次第ダガ、コンナ 「#コト、1-2-24」ガ果シテイツマデ続クデアロウカト、僕ハトキドキ恐ロシクナル。以前、コノ十年間グライハ、僕ハ常ニ妻ノ攻撃ニ壓倒サレツツケテイタ意氣地ナシノ夫デアツタノニ、最近ノ僕ハソウデモナイ。今年ニナツテニワカニ木村トイウ刺戟劑ヲ利用スル 「#コト、1-2-24」ヲ覚エ、ブランドトイウ妙薬ヲ見ツケ出シタオ蔭デ、目下ノトコロ、僕ハ自分ニモ不思議ナクライ旺盛ナ慾望ニ駆ラレテイル。ソノ上僕ハ精力ノ補給ヲスルタメニ相馬博士ニ相談シ、大體月ニ一回男性ホルモンノデポヲ用イテイルノダガ、ソレダケデハマダ不足ナ氣ガシ、脳下垂体前葉ホルモンノ五百単位ヲ三日カ四日オキニ注射シテイル。(コレハ相馬氏ニハ内証デ、自分デ施シテイルノデアル)シカシ自分ガ珍シクモカヨウニ旺盛ナ状態ヲ維持シ得テイルノハ、恐ラ

ク薬剤ノ利キメヨリモ主トシテ精神的興奮ノシカラシメルトコロデアル
 ニ違イナイ。嫉妬ガ醸^{かも}ス激シイ情熱、妻ノ全裸体ヲ思ウ存分見ル。「#
 コト、1-2-24」ニヨツテ加速度的ニ促進サレル性ノ衝動、ソウイウモノ
 ガトドマルトコロヲ知ラヌマデニ僕ヲ狂氣ニ導イテイルノデアル。サシ
 アタリハ妻ヨリモ僕ノ方ガハルカニ淫蕩ナ男ニナツタ。僕ハ夜ナ夜ナ、
 自分ガカツテ夢ニダモ想像シタ。「#コト、1-2-24」ノナカツタ法悦境
 ニ浸リツツアルノヲ思ツテ、自分ノ幸福ヲ感謝シナイデハイラレナイガ、
 同時ニマタ、コンナ幸福ガイツマデツツクハズハナイ、イツカハ報復ガ
 来ルノデアル、自分ハ刻々ニ命ヲ削^{けず}リツツアルノデアル、トイウ豫感モ
 シテイル。イヤ、現ニソノ報復ノ前触レデハアルマイカト思ワレル現象
 ガ、精神ト肉体トノ両方面ニ、スデニ二三ニトドマラス発生シツツアル
 ノヲ感ジル。コノ間、先週ノ月曜日ノ朝、木村ガ登校ノ途中ダトイッテ
 立ち寄ツタ日ノ朝デアツタ、僕ハ木村ガ来タノデベッドカラ起キ上ツテ
 茶ノ間へ行コウトシタノデアツタガ、ソノ時奇怪ナ。「#コト、1-2-24」
 ガ起ツタ。起キタトタンニソノ辺ニアルスベテノ物象ガ、ストーブノ煙
 突、障子、襖^{ふすま}、欄間^{らんま}、柱等々ノ線ガ、カスカニ二重ニナツテ見エタ。ソ
 ロソロ年ノセイデ眼ガ霞^{かす}ムヨウニナツタノカト思ツテ、一生懸命眼ヲ擦^{こす}ッ
 テミタガ、ソウデハナイラシイ。何カ視覚ニ異状ナ変化ガ起ツタノデア
 ルラシイ。今マデニモ、夏ニナルト脳貧血ヲ起シテ軽イ眩暈^{めまい}ヲ感ズル
 「#コト、1-2-24」ハ時々アツタガ、ソウイウモノトハ明ラカニ違ウ。
 眩暈ナラ大概ニ三分間デ平常ニ復スルノダガ、イツマデタツテモ物ガ二
 重ニ見エルノデアル。障子ノ棧^{さん}、便所ヤ風呂場ノタイルノ目地^{めじ}、ソレラ
 ガスベテ二重ニ見エ、カツ少シズツ歪^{ゆが}ンデ見エル。ソノ重ナリ工合ヤ歪
 ミ工合ハゴク僅カデ、動作ニ不便ヲ感ズルホドノコトハナク、人ニ氣付
 カレルコトモナイノデ、今日マデソノママニシテイルガ、アノ日カラズッ

ト、今モソノ状態ガツツイテイル。不便ヤ苦痛ハナイトイウモノノ、何トナク気味ガ悪イ。「#コト、1-2-24」ハ否定デキナイ。眼科へ行ツテ診テ貰オウトハ思ツテイルガ、単ニ眼ダケノ故障デナク、モット致命的ナトコロニ病源ガアルヨウナ氣ガシテ、行クノガ恐クモアル。ソレニ、コレハ多分半分以上神経ノ所業ダト思ウケレドモ、トキドキ体ガ急ニフアラフラトシテ平衡ヲ失イ、右力左力、ドチラカヘ倒レソウニナル。「#コト、1-2-24」ガアル。平衡感覺ヲツカサドル神経ハドコロ通ツテイルノ力知レナイガ、イツモ後頭部ノトコロ、チヨウド脊髄ノ真上ノトコロニ空洞ガ生ジタヨウナ感ジガシ、ソコロ中心ニ体ガ一方ヘ傾クノデアル。コンナ「#コト、1-2-24」ハノイローゼ的現象ダト思エバ思エルノデアルガ、昨日モウ一ツ不思議ナ「#コト、1-2-24」ガ起ツタ。午後三時頃、木村ニ電話ヲカケヨウトシタラ、毎日ノヨウニカケテイル彼ノ学校ノ電話番号ガドウシテモ浮カンデ来ナイ。度忘レトイウ「#コト、1-2-24」ハアルガ、ソレハソウイウ忘レカタデハナク、完全ニ記憶喪失ニ似タ忘レカタデアッタ。局番モ、局名モ、スベテガ思イ出セナイノデアッタ。僕ハ驚キカツ慌テタ。試ミニソノ学校ノ校名ヲ思イ出ソウトシテミタガ、ソレモ駄目デアッタ。最モ驚イタノハ、木村ハ木村何トイウ姓名デアッタカト考エテミタガ、ソレモ思イ出セナカッタ。家ニ使ツテイル婆ヤノ名前モ駄目デアッタ。僕ノ妻ノ名前ガ郁子デ、娘ノ名前ガ敏子デアアル。「#コト、1-2-24」ハサスガニ忘レテイナカッタガ、亡クナッタ妻ノ父ノ名前、母ノ名前ハ浮カンデ来ナカッタ。敏子ガ部屋借リヲシテイル家ノ名前モ、ソレガ日本人ヲ夫ニ持ツ佛蘭西婦人ノ家デ、ソノ人ハ同志社大学ノ佛語教師デアアル。「#コト、1-2-24」ハ分ツテイタガ、名前ハドウシテモ出テ来ナカッタ。ハナハダシキハコノ家ノ所在地ノ町名ガ、左京区トイウ「#コト、1-2-24」マデハ分ルガ、吉田牛

ノ宮町みやトイウ名ガ出テ来ナカッタ。僕ハ内心非常ナ不安ニ襲ワレタ。モシコノ状態ガ持続シ、カツソノ程度ガ漸次ニ昂進こうしんスレバ、ヤガテ僕ハ大学教授ノ職ニ堪エナクナリハシナイカ。ソレドコロカ単独デ外出スル。「#コト、1-2-24」モ、人ト対応スル。「#コト、1-2-24」モ不可能ニナリ、結局癡人はいじんニナツテシマウノデハナイカ。タダシ現在ノトコロデハ、記憶喪失トイッテモ思イ出セナイノハ主トシテ人名ヤ地名デアツテ、事柄ヲ忘レテイルノデハナイ。ソノ佛蘭西人ノ名前ハ思イ出セナイケレドモ、ソウイウ佛蘭西人ガイル。「#コト、1-2-24」、ソノ家ニ敏子ガ間借りシテイル。「#コト、1-2-24」八分ツテイル。ツマリ頭ノ中ノ、人物ヤ物ノ名称ヲ伝達スル神経ガ麻痺まひシタノミデ、知覚ヤ伝達ヲツカサドル組織全部ガ麻痺シテシマツタワケデハナイ。幸イニシテソノ麻痺状態ニ置カレテイタ期間ハモノノ二三十分ニ過ギズ、間モナク遮断しゃたんサレテイタ神経ノ通路ガ復舊シ、失ワレタ記憶ガ戻ツテ来テスベテガ平生ノ通りニナツタ。ソノ間僕ハ、果シテイツマデ続クカ分ラナイ不安ヲ密カニ怵こらエツツ、誰ニモ何モ語ラズ、氣ツカレモセズニ過シテシマツタガ、ソシテソレ以後ハ何ゴトモナク無事ニ過ギテイルノデアルガ、イツ何時、再ピアアイウ状態ガ襲ツテ来ルカモ知レナイトイウ不安、ソノ状態ガ二三十分デナク、一日モ二日モ、一年モ二年モ、事ニヨレバ一生ツツク。「#コト、1-2-24」ガアルカモ知レナイトイウ不安ハ、今モナオ消エ去ツテハイナイ。妻ハコレヲ読ンダトシテ、ドウイウ処置ニ出ルデアロウカ。僕ノ将来ヲ慮おもツテ、今後ハ行動ニ幾分ノ制御ヲ加工ルデアロウカ。僕ノ推測スル限りデハ、恐ラクソソナ。「#コト、1-2-24」ハアルマイ。彼女ノ理性ハ制御ヲ命ジタトシテモ、彼女ノ飽クナキ肉体ハ理性ノ言ニ耳ヲ貸サズ、僕ヲ破滅ニ追イ込ムマデモ満足ヲ求メテ已やマナイデアロウ。「何ヲ云ウノダ、夫ハコノトコロ大分好調ガツツクト思ッ

タラ、トウトウタマリカネテ降参スルノダナ。攻撃ノ手ヲ少シ緩メテ貰
ウタメニソソナ嚇カシヲ云ウノダナ」　　グライニ彼女八思ウカモ知
レナイ。イヤ、ソレヨリモ何ヨリモ、今ノトコロ僕自身ガ自分ヲ制御デ
キナクナツテイル。僕八モトモト病氣ニ対シテ大胆ナ方デハナク、スコ
ブル臆病ナノデアルガ、今度ノ「#コト、1-2-24」ニ関シテハ、五十
六歳ノ今日ニ至ツテ始メテ生キ甲斐ヲ見出シタ心地デ、或ル点デハ彼女
以上ニ積極的、猪突的ニナツテイル。……

三月十四日。……午前中、夫の留守に敏子が来て「ママに話がある」と云った。何か真剣な顔をしている。何の話かと聞くと、「昨日木村さんの所で写真を見たわよ」と、私の眼の中をじつと視つめた。そう云われてもまだ私には分らなかつたので問い返すと、「ママ、私はどんな場合にもママの味方よ、ほんとうのことを云つてよ」と云う。昨日、木村さんにフランス語の本を借りる約束をしていたので、通りかかりに寄つた。木村さんは留守だつたけれどもはいつて行って、書棚からその本を抜き取つたら、中に数葉の手札型の写真が挟んであつた。「ママ、あれは一体どういう意味」と云うのだった。「何のことか分らない」と云うと、「なぜ私に隠すのよ」と云う。私はおおよそ、その写真というのは先日夫の日記帳に貼つてあつたあれと同じものなのであろう、そしてそれは、やはり想像した通り私の浅ましい姿を撮つたものなのであろう、ということまでは察しがついた。が、何と云つて敏子に説明したのか急には返答ができなかつた。敏子は実際の事実よりももっとずっと悪質な、よほど深刻な事件が伏在しているように思っていることは推量できた。恐らく敏子は、その写真は私と木村さんとの間に不倫な関係が存在することを示す以外の何ものでもない、解しているであらう。私

は夫と木村さんのため、また私自身のために、直ちに釈明の労を取るべきであつたが、事実をありのままに述べたとしても、敏子がそれを素直に受け取ってくれるかどうか疑問であつた。私はしばらく考えてから云つた。

あり得べからざることのようだけれども、私は実は、世の中に私のそういう恥ずべき姿を撮つた写真があるということ、今あなたから聞かされるまでは確かには知らなかつたのだ。もしそういうものがあるとすれば、それは私が昏睡している間にパパが撮影したもので、木村さんはただその現像をパパから依頼されたに過ぎない。木村さんと私との間には断じてそれ以上の関係はない。パパがなぜ私を昏睡させ、なぜそんな写真を撮り、なぜその現像を自分でしないで木村さんにやらせたか、等の理由は想像に任せる。現在の娘の前で、これだけのことを口にするさえ私には忍びがたい。もうこれ以上は聞かないでほしい。ただ、すべてはパパの命令に従つてしたことであり、私はどこまでもパパに忠実に仕えることを妻の任務と心得ているので、いやいやながら云われる通りにしたのであることを信じてほしい。あなたには理解しがたいことかも知れないが、舊式な道徳で育つて来たママは、こうするよりほかはないのである。ママの裸体写真がそんなにパパを喜ばすのなら、ママはあえて恥を忍んでカメラの前に立つてあろう、まして別人ならぬパパ自身は操作しているカメラであるなら。

「ママ、ママは本気で云つてるの？」と敏子は呆れた。「本気よ」と云うと、「私はママを軽蔑する」と憤然たる語調で云つた。私は敏子を怒らせるのが少し面白くなつて来たので、幾分感情を誇張した気味もあつた。「ママは貞女の龜鑑きかんというわけね」と敏子はくやしそうな顔に冷笑を浮かべた。敏子には、パパが現像を木村さんに託した心理状態がどうにも不思議でたまらないらしく、理由なくママを辱はづかしめ、木村さんを苦しめたと云つてパパを非

難して已まないので、「そういうことに娘が立ち入って貰いたくない」と私は云った。「パパがママを辱かしたとあなたは云うけれども、果して辱かしたであろうか。ママはそうは感じていない」と、私は云つてやった。「パパはママを今も熱愛しているのである。パパはママの肉体が年齢のわりに若くて美しいことを、誰か自分以外の男性に見せて確かめたい気持があつたのだと思う。その気持は少し病的かも知れないけれども、私には分る」私は夫を擁護する必要を感じたので、云いにくいことをかなり上手に、巧く云つたつもりである。私の日記を盗み読みするに違いない夫は、ここを読んで私がどんなに夫を庇うために苦心したかを察してくれてもよいと思う。「でもそれだけの気持かしら。パパは木村さんがママをどう思っているか知っていないながら、随分意地が悪いのね」と敏子は云った。私はそれには答えなかつた。敏子は木村さんがあの写真をあの本の間に挟んでおいたのは、「木村さんのすることだから」ただの不注意とは思えない、何か訳があるような気がする、敏子に何かの役目を負わせるつもりかも知れないと云い、木村さんに対する彼女の観察をいろいろ述べるところがあつたが、それはここに書かない方が夫のためによいと思う。……………

三月十八日。……………佐々木ノ帰朝祝賀宴ガアツタノデ十時過ギ二帰宅シタ。妻ハ夕刻カラ外出中トノ「#コト、1-2-24」デアツタ。多分映画ニ出カケタノデアロウト察シ、書齋デ日記ヲツケテイタガ、十一時過ギテモ戻ラナイ。十一時半ニ敏子カラ電話デ、「パパチヨット来テヨ」ト云ウ。「ドコダ」ト云ウト「関田町ヨ」ト云ウ。「ママハ」ト云ウト「ココニイル」ト云ウ。「モウ遅イカラ帰ルヨウニ云イナサイ、コチラ八婆ヤガ今帰ツタノデ僕一人ダ」ト云ウト、急ニ電話口デ声ヲヒソメテ、

「ママが関田町ノ風呂場デ倒レタノヨ、児玉先生ヲ呼ンデモヨクツテ」ト云ウ。「ソコニ誰ト誰ガイルノダ」ト云ウト。「三人ヨ」ト云ウ。「説明八後デスルワ。トニカク注射ヲ急イダ方ガイイト思ウワ。パパが来ラレナイナラ児玉先生ニ来テ貰イマス」ト云ウ。「児玉サンハ呼バナイデモイイ。僕が注射シテヤル。オ前ガコツチへ留守番ニ来イ」僕八
 昨今ヴィタカンフルノ注射液ヲ絶ヤシタ「#コト、1-2-24」ガナイノデ、家ヲ空ケタママ、敏子ノ来ルノヲ待タズニ出カケタ。(コンナ時ニ先日ノ記憶喪失ガ襲ツテ来ハシナイカトイウ恐怖ガ、チラト脳裡ヲカスメタ)僕八関田町ノ家ノ所在八分ツテイタガ、中へハイルノ八始メテダ。敏子ガ門ノ前ニ立ツテイテ、庭カラスグニ離レ座敷へ案内シ、「デハ私ハ留守番ニ行ツテイマス」ト云ツテ出テ行ツタ。「ドウモ御心配ヲカケマシテ」ト木村ガ挨拶シタ。僕八木村ニ八何ノ説明モ求メナカツタ。木村ノ方カラモソノ「#コト、1-2-24」ニツイテハ一言モ言イ出サナカツタ。ドツチモバツガ悪イノデ、急イデ注射ノ用意ニ力カツタ。ピアノ前ノ畳ノ上ニ寢床ガ取ツテアツテ妻ガ静カニ寝カサレテイタ。ソノ傍ノチャブ台ガ杯盤狼藉ト取り散ラカサレテイタ。枕元ノ壁ニ妻ノ外出用ノ衣服ガ、敏子ガ洋服ヲ吊ルノニ用イル造花ヤリボンノ飾リノ付イタハンガーニ懸ケテ吊ツテアツテ、妻八長襦袢一ツデ寝テイタ。妻八年ヨリモ派手好ミナノダガ、ソノ長襦袢ハコトニケバケバシイ感ジガシタ。異常ナ時ト場所ノセイデ特ニソウ感ジタノカモ知レナイ。脈搏ハイツモコウイウ場合ノ脈搏ト同ジデアツタ。「オ嬢サント二人デココマデオ連レシマシタ」トダケ木村ガ云ツタ。体ハ一通リ拭イテアツタガマダ体ジユウニ湿リ気ガアリ長襦袢ガベツトリシテイタ。長襦袢ノ紐ガ結ンデナカツタ。一ツ変ツタ「#コト、1-2-24」ハ、髪ガ解ケテ乱レテイテ襦袢ノ襟ガヒドク濡レテイタ。今マデ自宅ノ浴室デ倒レタ「#トキ、97-2」

八、髪八常二束^{たば}ネテアツテ、コンナニ解ケテイタ。「#コト、1-2-24」
 ハナイ。コレハ木村ノ趣味ナノカモ知レナイト思ツタ。木村ハコノ家ノ
 勝手ヲ心得テイルラシク、浴室カラ洗面器ソノ他ヲ運ンダリ湯ヲ沸カシ
 タリ注射器ノ消毒ヲ手伝ツタ。……………「ココニ寝カシテオクワケニモ行
 クマイ」ト、約一時間後ニ僕ガ云ツタ。「母屋^{おもや}ハ早寝デ、マダムハ何モ
 知ラナイヨウデス」ト木村ガ云ツタ。脈八大分ヨクナツテイルノデ連レ
 テ帰ル。「#コト、1-2-24」ニシ、木村ニ自動車ヲ呼ンデ来サセタ。「
 ソコマデ僕ガ負ブツテ行キマス」ト木村ガ云ツテ背中ヲ出シタ。僕ガ妻
 ヲ抱キ起シテ、長襦袢ノママデ木村ノ背ニ乗セ、ハンガーノ着物^{はおり}ト羽織
 ヲ外^{ほか}シテ上カラ着セタ。庭ヲ横切ツテ門前ノ自動車ノ所マデ行キ、二人
 ガカリデ車ニ入レタ。小型ノ六十圓ノ事ダツタノデ木村ガ前ニ掛ケタ。
 ブランデーノ匂^{にお}イガ襦袢ヤ衣裳^{いしやう}ニ浸ミ通ツテイテ車ノ中ガ嚏^むせ返ルヨウ
 ダツタ。僕ハ妻ヲ横抱キニシテ腰カケ、冷工冷工シタ彼女ノ髪ノ中ニ自
 分ノ顔ヲ埋^{うず}メ、ソノ足ヲ握リ締メカツ接吻シタ。(木村ニハ見えナイハ
 スデアツタガ気取^{けど}ツタカモ知レナイ)木村ハ寢室マデ手伝ツテ運ンデカ
 ラ「先生、今夜ノ」「#コト、1-2-24」ハ私ヲ才信ジニナツテ下サイ、
 才嬢サンガスベテ御存ジデス」ト云ツタ。「モウ帰ツテモヨロシユウゴ
 ザイマスカ」ト云ウカラ「アア」トダケ答エタ。木村ガ去ツテカラ、敏
 子ガ留守番ヲシテイテクレタノヲ思イ出シテ、茶ノ間ヤ敏子ノ部屋へ行ッ
 テミタガモウイナカッタ。先刻僕ラガ郁子ヲ自動車カラ抱キオロシタ時
 ハ玄関ニウロウロシテイタヨウデアツタガ、僕ヲト入レ違イニ黙ツテ関
 田町へ帰ツテシマツタラシイ。僕ハイツタン書齋ニ上リ、取リアエズ今
 夜ノ今マデノ出来事ヲ急イデ日記ニ書キ留メタ。書キナガラ僕ハ、コノ
 数時間後ニ経験スル。「#コト、1-2-24」ガデキルデアロウ悦楽ノ種々
 相ヲ豫想シタ。……………

三月十九日。……… 払暁マデ僕八一睡モシナカッタ。昨夜ノ突然ノ事件八何ヲ意味スルカ、ソレヲ考エル 「#コト、1-2-24」八恐怖ニ似タ楽シサデアッタ。僕八マダ木村カラモ、敏子カラモ、妻カラモ、何ノ説明モ聞イテイナイ。聞ク機会ガナカッタカラデモアルガ、アマリ早く聞キタクナカッタカラデモアッタ。聞カシテ貰ウ前ニ、自分一人デ考エルノガ楽シミデモアッタ。自分デ勝手ニ、コレハコウイウワケナノカ、イヤソウデハナクテコウナノカト、サマザマナ場合ヲ想像シテ嫉妬ヤ憤怒^{ふんぬ}ニ駆ラレテイルト、際限モナク旺盛ナ淫慾ガ発酵シテ来ル。事実ヲハツキリ突キ止メテシマウトカエツテソウイウ快感ガ消エル。妻八明ケ方カラ例ノ論語ヲ始メタ。「木村サン」トイウ語ガ今暁八頻繁ニ、或ル時ハ強ク或ル時ハ弱ク、トギレトギレニ繰リ返サレタ。ソノ声ノ絶エテハ続キツツアル間ニ僕八始メタ。……… 瞬時ニシテ嫉妬モ憤怒モナクナツテシマツタ。妻ガ昏睡シテイルカ、眼覚メテイルカ、眠ツタフリヲシテイルカモ問題デナクナリ、僕ガ僕デアルカ木村デアルカサエモ分ラナクナッタ。……… ソノ時僕八第四次元ノ世界ニ突入シタトイウ氣ガシタ。タチマチ高イ高イ所、「#「りっしんべん+刀」、第3水準1-84-38」利^{とら}天ノ頂^{てん}辺^{へん}ニ登ツタノカモ知レナイト思ツタ。過去ハスベテ幻影デココニ真実ノ存在ガアリ、僕ト妻トガタダ二人ココニ立ツテ相擁シテイル。……… 自分ハ今死ヌカモ知レナイガ刹那^{せつな}ガ永遠デアルノヲ感ジタ。………

三月十九日。……… 昨夜のことを念のために委^くしく書き留めておこうと思う。昨夜は夫の帰りが夜になることが分っていたので、「私たちも映画に出かけるかも知れない」と、私は前もって夫に断っておいた。四時半頃に木村さんが誘いに来たが、敏子は五時頃おくれて来た。「遅い

じゃないか」と云うと、「時間が半端だから食事を済ましてからの方がよくはなくて。ママ、今日は私がサーヴィスするから関田町で御飯を上つてよ。まだ一遍も私の所で落ち着いたことはないじゃないの」と敏子が云った。「かしわを百目買って来たわ」と、彼女は鶏肉や野菜や豆腐を両手に持って木村さんと私を連れ出したが、「これはここのを寄附して貰うわ」と、まだ半分以上残っていたクルボアジエの罐も提げて出て来た。「それは止した方がいいわ、今日はパパが留守だから」と私は云ったが、「でもせっかくの御馳走にこれがないのは淋しいから」と云うのだった。「御馳走なんかいらさないわよ、これから映画を見に行くのもっと簡単なものがいいわ」と云ったけれども、「すき焼の方がかえって簡単よ」と敏子は云った。ピアノの前に二月堂の卓を二つつないで、瓦斯のカンテキ（鍋やカンテキは母屋から借りて来たのである）ですぐに始めたが、具がいつもより分量が多く、種類もたくさん揃えてあるのに驚いた。葱、糸蒟蒻、豆腐はよいとして、生麩、生湯葉、百合根、白菜等々、敏子はそれらをわざと一度に運んで来ないで、ときどき、少しずつ、なくなると後から後からと付け足した。かしわも百目ではなかつたような気がした。自然、なかなか御飯にならないでブランデーが進行した。「お嬢さんがブランデーのお酌をなさるなんて珍しいことですな」と云いながら、木村さんも平生よりは過した。「もう映画には遅いわね」と、頃あいを見て敏子が云った。私にしても映画を見るには酔いが廻り過ぎていた。が、そう云っても、そんなに量を過したようには感じていなかつた。これはいつでもそうなのだけれども、私は酔いを殺して飲むせいで、或る程度まではシツカリしていて、一定の量を超過すると俄然怪しくなるのである。最初私は、今夜は敏子に酔わされるかも知れないなど、内々警戒していないではなかつた。しかし、警戒する半

面に、多少期待する　あるいは希望する　気持もなかったとは

云えない。私は木村さんと敏子との間に、あらかじめ手筈が定めてあつたのかどうかは知らない。聞いたところでそんなことを云うはずもないから、聞きもしない。ただ木村さんも、「先生の留守にこんなに飲んでいいですかなあ」とは云っていたが、近頃大分手が上つているので、私と差したり差されたりした。木村さんもそうだと思うが、私には、夫の留守に木村さんと献酬することは、夫の意志に背くことにはならない、という気があつた。夫に嫉妬を感じさせることは、夫を幸福にする所以であることも分つていた。だからといって、私は夫を刺戟するのが唯一の目的であつたとは決して云わない、が、心にそういう安心があつたので、ついグラスの数を重ねたとは云える。それから、今日はこのことをここにはつきり云っておくが、私は木村さんを、恋するということでは行っていないが、好いていることは事実である。恋することも、しようと思えばすぐできそうなところまで来ている。夫に嫉妬を起させるためには、ここまで来ることが必要であつたからではあるが、もともと木村さんが好きでなかったら、ここまで来なかつたでもあろう。そして今までは、ここで嚴重な一線を劃して、これ以上の道には踏み込まぬように努めて来たけれども、これからはひよつとすると、踏み外すこともありそうな気がしている。私は夫があまり私の貞操を信じ過ぎないようにしてくれることを望む。私は夫の註文に應ずるためにギリギリの瀬戸際まで試煉に堪えて来たけれども、これからは自信が持てなくなっている。……一方私は、いつも夢とも現ともつかない状態で睡っている時に見ることのある、あの裸体の木村さんを、……木村さんかと思うと夫であつたり、夫かと思うと木村さんであつたりするあの裸体を、……一度夫に邪魔されない時に、この眼で見届けてみたいという好奇心もな

いことはなかった。私はいつの間にか急激に酔いが廻って来たのを覚えて便所へ隠れたが、「ママ、今日はお風呂が沸いているのよ、マダムは上りはったからママはいらしたらどう」と、便所の外から敏子が云った。私は、風呂へはいれば倒れるであろうこと、その場合に抱き起しに来てくれる者は、恐らくは敏子でなくて木村さんであろうことを、すでに朦朧もろろとなっていた意識の隅すみで感じていた。「ママ、そうなさいよ」と、敏子がもう一度か二度云いに来たのも、ぼんやり分っていた。そして間もなく、ひとりで風呂場を捜しあててガラス戸を開け、着物を脱いたことまでは思い出せるが、それからあとは完全に意識を失ってしまった。……

三月二十四日。……昨夜マタ妻ガ関田町ノ家デ倒レタ。昨夕食後、二人ガ妻ヲ映画ニ誘ウト称シテ連れ出シ二来、十一時過ギテモ戻ラナイノデ、アルイハソソナ「#コト、1.2.24」デハナイカト僕ハ早クモ合点シテイタ。アマリ遅イノデ電話ヲカケテミヨウカトモ思ツタガ、ソレモ馬鹿々々シイノデ向ウカラカカルノヲ待ツテイルト、(待ツテイル間ノ待チ遠シサ、イラダタシサ、ソシテマタイツモノ期待ニ胸ヲワクワクサセテイタ気持トイツタラナカッタ)十二時過ギニ敏子ガ一人デコチラニ現ワレ、タキシ―ヲ待タシテハイッテ来テ、「ママガマタナノヨ」ト云ツタ。映画ノ後デ(ト云ウケレドモ、果タシテシカルヤ否ヤハ怪シイ)母子ガ木村ヲ宿マデ送ツテ行ツタトコロ、木村ガ僕ガ送りマシヨウト云ツテ、関田町マデ三人デ来テ、ツイ上リ込ンダ。敏子ガ紅茶ヲ入レテ出シタガ、コノ間ノクルボアジエガマダ四分ノ一残ツテイルノガ床ノ間ニ置イテアツタノデ、茶匙ちやさじニ一杯ズツ滴たラシテススメタ。ソレガキツカケテ間モナク二人ガシエリーグラスノ遣やり取りヲ始め、結局から罎からヲ空ニシタ。

昨夜モタマタマ風呂ガ沸イテイタノデ、先夜ノ通りノ順序ニ事ガ発展シタ。ト、コレハ敏子ノ釈明トモツカナイ説明デアツタ。「才前、二人ヲ置イテ出テ来タノカ」ト、僕ハ尋ネタ。「エ、電話ヲ切りカエテオカナカッタノデ、母屋ヘカケニ行クノガ工合ガ悪カッタモノダカラ」ト敏子ハ云ツタ。「ソレニ、ドウセ自動車ガ要ルト思ツタノデ、ヤツトノ」
 「#コト、1-2-24」デ掴^{つか}マエテ来マシタ」彼女ハ独得ノ意地ノ悪イ眼デ僕ノ眼ヲ覗イタ。「コノ間ハ運ヨクスグニ掴マツタノニ今日ハナカナカ掴マラナイヨ。電車通りニシバラク立ツテイタケレド、何シロ時刻ガ時刻ダカラ一台モ通ラナイ。アスコノ鴨川^{かもがわ}タキシーマデ歩イテ行ツテ、寝テイルノヲ叩^{たた}キ起シテ乗ツテ来タノデス」ト云ツテ、コチラガ聞キモシナイノニ、「家ヲ出タノハモウ二十分以上モ前ナンダケレド」ト独語^{ひとりごと}ノヨウニ附ケ加工タ。僕ハ敏子ガドウイウ底意デソウイウ「#コト、1-2-24」ヲ云ツテイルノカ察シタケレドモ、ワザト空トボケテ「御苦労サマ。デハ留守番ヲ頼ム」ト云ツテ、注射ノ用意ヲトトノエテ、ソノ車デ出カケタ。僕ニハ依然トシテ、彼ラ三人ガドコマデ合意ノ上^{たぐら}デ企ンダ仕事デアルノカ八分ラナカッタ。タダ恐ラクハ敏子ガ主謀者デアル
 「#コト、1-2-24」、彼女ガ故意ニ二人ヲ置き去リニシテ、二十分以上モ途中で時間ヲ費シテ（二十分ヤ三十分デハナイノカモ知レナイ。一時間モウロウロシテ来タノニ違イアルマイ）来タノデアル「#コト、1-2-24」ハ想像デキタ。僕ハ関田町ヘ駆ケ着ケルマデノ間、ソノ二十分乃至一時間中ニアソコノ一室デイカナル「#コト、1-2-24」ガ起リ得タカヲ、努メテ考エナイヨウニシタ。妻ハ先夜ト同ジ長襦袢ヲ着テ寝テイタ。壁ノハンガーニハアノ衣裳ガマタダラリト垂レテイタ。木村ガ湯ヤ洗面器ヲ運ンデ来タ。妻ハ人事不省デ先夜以上ニ泥酔^{でいすい}シテイルヨウニ見エタガ、ソノ見セカケニモカカワラズ、昨夜ハ特ニ明瞭ニ、ソレガ彼

女ノ芝居デアル。「#コト、1-2-24」、實際ニハ意識ヲ持ツテイルノデアル。「#コト、1-2-24」ガ、僕ニハ分リ過ギルホド分ツタ。脈モ割合ニシツカリシテイタ。コンナ時、僕ハ本氣デ注射ヲスルノガ馬鹿氣テイルノデ、カンフルヲ射ス真似ヲシテ、ヴィタミンヲ射シテヤル。「#コト、1-2-24」ニシテイルノダガ、木村ガ氣ガ付イテ、「先生、コレデインデスカ」ト小声デ聞イタ。「ウン、イインダヨ、今夜ハソレホドデモナサソウダヨ」ト、僕ハ構ワズヴィタミンヲ射シタ。……

……妻ハ盛ンニ「木村サン木村サン」ト呼びツツケタ。ソノ呼び方ハ今マデノ呼び方ト声ノ調子ガ違ツテイタ。今マデノヨウナ論語ジミタ云イ方デハナクテ、底力ノアル、訴エルヨウナ、叫ブヨウナ声デ呼ンダ。エクスタシーニ入ル前後ニオイテ一層ソノ声ガハナハダシカッタ。突然僕ハ舌ノ尖端ニ「#「齒+乞」、第4水準2-94-76」嚙くちやヲ感ジタ。……

次イデ耳朵ニモソレヲ感ジタ。……コンナ「#コト、1-2-24」ハ今マデニナイ。「#コト、1-2-24」デアツタ。……一夜ニシテ妻ヲカヨウニ大胆ナ、積極的ナ女性ニ変エタノハ木村デアルト思ウト、僕ハ一面激シク嫉妬シ、一面彼ニ感謝シタ。イヤ敏子ニモ感謝スベキデアルカモ知レナカッタ。皮肉ニモ敏子ハ、僕ヲ苦シメヨウトシテカエツテ僕ヲ喜バス結果ニナツテイル。「#コト、1-2-24」ヲ、……僕ノコウイウ不思議ナ心理ヲ、マサカソコマデハ氣ガツカズニイルノデアロウガ。……

……行為ノ後デ今晝物凄イ眩暈めまいヲ感ジタ。彼女ノ顔、頸、肩、腕、スベテノ輪廓ガ二重ニナツテ見エ、彼女ノ胴体ノ上ニモウ一人ノ彼女ガ折り重ナツテイルヨウニ見エタ。間モナク僕ハ眠ツタラシカッタガ、夢ノ中デモナ才妻ガ二重ニ見エタ。最初ハ全体トシテ二重ニ見エ、ヤガテ部分々々ガバラバラニ空中ニ散ラバツテ見エタ。眼ガ四ツ、ソノ眼ト並ンデ鼻ガ二ツ、少シ飛ビ離レタ一二尺高い空間ニ唇ガ二ツ、トイウ風ニ、

シカモ極メテ鮮^{あざや}カナ色彩ヲ帯ビテ。……空間ガ空色、頭髮ガ黒、唇ガ真紅、鼻ガ純白、……ソシテソノ黒サモ、紅^{あか}サモ、白サモ、実物ノ彼女ヨリハハルカニケバケバシク、映画館ノ絵看板ノペンキノヨウニ毒々シカッタ。夢ガコンナニ生々シイ色ヲ帯ビテ見エルノ八神経衰弱ガヨホドヒドイ証拠ダナト、夢ノ中デハツキリトソウ思イナガラ、僕ハジーツトソノ夢ヲ視ツメテイタ。右ノ足ガ二ツ、左ノ足ガ二ツ、水中ニアルヨウニ浮遊シテイルノガ、ソノ肌ノ白カッタ。「#コト、1-2-24」トイッタラナカッタ。シカシ形ハ紛レモナク彼女ノ足デアッタ。足ト並ンデ、足ノ蹠^{つら}ガマタ別ニ浮カンデイタ。眼ノ前イツパイニ、白イ大キイ塊^{かたまり}ガ雲ノ峰ノヨウニ現ワレタト思ツタラ、イツカ写真ニ撮ツタ。「#コト、1-2-24」ノアル、アノ通りノ形状ヲシテ真正面ニコチラヲ向イテイル臀^はガアッタ。……ソレカラ何時間後デアツタカ、マタ違ツタ夢ヲ見テイタ。最初八木村ガ裸体ノママデ立ツテイルヨウニ思エタガ、胴カラ生^はエテイル首ガ、木村ニナツタリ僕ニナツタリ、木村ノ首ト僕ノ首トガ一ツ胴カラ生エタリシテ、ソノ全体ガマタ二重ニ見エタ。……

三月二十六日。……これで夫のいない所で木村さんに逢^あうことが三回に及んだ。昨夜はあの床の間に、まだ栓^{せん}を開けてない新しいクルボアジエの罫^はが置いてあった。「あなたが買^かうて来たの」と云うと、「私知らない」と、敏子が否定した。「昨日外から帰^かって来たならこの罫^はが置いてあったのよ。木村さんがお届けになったのかと思っていたわ」と敏子は云ったが、「僕は知りません」と木村さんも云った。「先生ですよ、きつと。僕はそうだと思いますね。意味深重なはずですな」「パパだとしたら随分皮肉ね」二人はそんな風に云い合っていた。夫がこっそり投げ込んで行ったと考えるのが、一番ありそうなことのように

思えるけれども、ほんとうのところは私には分らない。敏子が木村さんか、どちらかが買って来たと考えることも、決してなさそうなことではない。水曜日と金曜日はマダムが大阪へ教えに行く日で、帰りが十一時になるのである。この間の晩も、敏子はブランデーが始まると、ほどよい所で消えてなくなつて、マダムの部屋にはいり込んでいたのだが、（このことを書くのは始めてである。夫に誤解されることを恐れて差控えていたのであるが、もうその必要もなさそうに思う）昨夜もかなり早くから見えなくなつていて、マダムが帰宅してからもまだしばらく母屋で話し込んでいた。私は意識を失つてから後のことはよく分らない。しかしどんなに酔つていたとしても、最後の最後の一線だけは昨夜も強固に守り通したと思つてゐる。自分にはいまだにそれを踏み越える勇氣はないし、木村さんだつて同様であると信じる。木村さんはそう云つた、ポーラロイドという写真器を、先生に貸して上げたのは僕です。それは先生が、奥さんを酔わして裸になさりたがる癖があることを知つたからです。しかるに先生はポーラロイドでは満足できないで、アイコンを使つて写すようになりました。それは奥さんの肉体を細部に互つて見極めたという目的からでもあつたでしょうが、それよりも、真の狙い（ねら）は僕を苦しめることにあつたのだと思ひます。僕に現像の役を負わせて、僕をできるだけ興奮させ、誘惑に堪えられただけ堪えさせて、そこに快感を見出しているのだと思ひます。のみならず僕のこの気持が奥さんに反映し、奥さんも僕と同様に苦しむことを知つて、そこにも愉悅（ゆえつ）を感じつつあるのです。僕は奥さんや僕をこんなにまで苦しめる先生を、憎いとは思ひますけれども、それでも先生を裏切る気にはなりません。僕は奥さんの苦しむのを見て、自分も奥さんとともに苦しみ、もつともつとこの苦しみを深めて行きたいのです。私は木村さんに云つた、

敏子はあなたから借りたフランス語の本の中に、あの写真が挟まっていたのを見つけて、これは偶然にここに挟んであったものとは思えない、何か意味があるのだらうと云っていましたが、あれはどういうつもりでしたか。

木村さんが云った、あれをお嬢さんに見せたら、お嬢さんが何かしら積極的に動いてくれるであろうことを豫期したのです。僕はこれといって、何もお嬢さんに示唆しさしたことはありません。僕はお嬢さんのイヤゴ一的な性格を知っているので、ああすれば十八日の晩のようなことになるのを期待していただけです。二十三日の晩のことも、今夜のことも、いつもお嬢さんがイニシアチブを取り、僕は黙ってそれに喰くつ着いて行つたまでです。

私が云った、私はあなたと二人きりでこんな話をするのは今が始めてです。いや誰とでも、夫とでも、こんな話を一度もしたことはありません。あなたと私との関係について、夫はあまり聞こうとはしません。聞くのが恐ろしくもあるのでしょうか、今もなお私の貞操を信じていたからなのでしょう。私も自分の貞操を信じたいのですけれども、信じても差支えないのでしょうか、それに答えることができるのは木村さんだけです。お信じ下さい、と、木村さんが云った、僕は奥さんの肉体のあらゆる部分に触れています、ただ一箇所だけ大切な部分を除いては。先生は紙一重のところまで僕を奥さんに接着させようとするのですから、僕はその意を体して、それを犯さない範囲で奥さんに近づいたのです。あゝ、それで安心しましたと、私は云った、それまでにして私の貞節を完まうさせて下さるのを有難く思います。木村さんは、私が夫を憎んでいると云われましたが、憎む一面に愛していることも事実です。憎めば憎むほど愛情も募つて来ます。あの人は、あなたというものを間に入れ、ああいう風にあなただを苦しませなければ情慾が燃え上らない、それも結

局は私を歡喜させるためだと思えば、私はいよいよあの人に背くことができなくなります。でも木村さんはこういう風に考えることはできないでしょうか、私の夫と木村さんとは一身同体で、あの人の中にあなたもある、二人は二にして一であると。……………

三月二十八日。…………… 大学ノ眼科デ眼底ノ検査ヲシテ貰ウ。氣ハ進マナカッタノデアルガ、相馬博士ガ切ニススメルノデイヤイヤ行ツテ見タ。眩暈ハ脳動脈硬化ノ結果デアルト云ワレル。ソノタメニ腦ガ充血シ、眩暈ヤ複視現象ガ起ツタリ意識ノ昏濁ガ生ジタリスル。ヒドクナレバ失心スル。「#コト、1-2-24」モアル。夜中小便ニ起キタ時、急激ナ動作ヲ起シタ時、体ノ向キヲ突然変エタ時等ニ特ニ眩暈ヲ感ジマセンカト云ワレテ、ソノ通りデアルト答エル。平衡感覺ガ失ワレテ、体ガ倒レソウニナツタリ、地下へ滅入り込ムヨウニ感ジタリスルノモ、内耳ノ血管ノ血行ガ悪クナツテイルカラダト云ワレル。内科デ相馬博士ニモ診テ貰ウ。今マデ血壓ヲ測ツタ。「#コト、1-2-24」ハナカッタノダガ、今日始めテ測ラセラレ、心電図ヲ取り、腎臟ノ検査モサセラレル。コンナニ血壓ガ高イトハ思ワナカッタ、相当注意ヲ要シマスネト、相馬氏ハ云ツタ。ドノクライアルノカト云ツテモナカナカ教エテクレナカッタ。トニカク上ハ二百以上、下モ百五六十アル、上ト下トノ差ガ少イノガ最モヨロシクナイ傾向デアル、君ハヤタラニホルモン剤ヲ飲ンダリ射シタリシテイルガ、補腎ノ薬ヨリハ血壓降下剤ヲ飲ム。「#コト、1-2-24」デスナ、ソシテ、失礼デスガコイトスヲ慎シム。「#コト、1-2-24」デスナ、アルコールモ止メナケレバイケマセンナ、刺戟物ヤ塩辛イモノモイケマセンナ、ソウ云ツテ相馬氏ハ、ルチンCヤ、セルパシールヤ、カリクレインヤ、イロイロトソノ方ノ薬ノ連用ヲススメ、今後モ絶エズ氣ヲ付ケテ

血壓ヲ測ルヨウニト云ツタ。

僕八ワザトコノ「#コト、1-2-24」ヲ隠サズ日記ニ書キ、妻ガイカナル反応ヲ示スカヲ見ル。「#コト、1-2-24」ニスル。サシアタリ僕八医師ノ忠告ニハ耳ヲ藉^かサナイ。妻ノ方カラ何カノ示唆ガアルマデハ、事件ハ従来ノ方向ヲ取ツテ進ムデアロウ。僕ノ豫想スルトコロデハ、妻ハコノ記事ヲ読ンデモ読マナイフリヲシテ、マスマス淫蕩ニナルデアロウ。ソレガ彼女ノ肉体ノイカントモシガタイ宿命ナノデアル。同時ニ僕モ、ココマデ来テハ後戻リハデキナイ。先夜以来、アノ場合ノ妻ノ態度ガニワカニ積極的ニナリ、種々ナル技術ヲ進ンデ弄ブヨウニナツタ。「#コト、1-2-24」モ、一層僕ヲソノ方へ押シヤル動力ニナリツツアル。

彼女ハ依然トシテ事ニ当ツテ一言モモノヲ云ワナイ。黙々トシテ、動作ヲモツテサマザマナ愛情ノ表現ヲスル。常ニ半睡半醒ノ状態ヲ装ツテイルノデ、燈火ヲ暗クスル必要ハナイ。酔エルガゴトク眠レルガゴトクニシテ嬌羞^{きょうしゆう}ヲ含^こンデイルサマガ何トモイエナイ。僕八最初ハ、相当

ノ間隔ヲ置イテ木村ヲ妻ニ接触サセタ。トコロガ次第ニ刺戟ニ馴^なレルニ從ツテソレデハ満足ガ得ラレナクナリ、木村ト妻トノ間隔ヲダンダンニ縮メテ行ツタ。縮メレバ縮メルホド嫉妬ガ増シ、増セバ増スホド快感ガ得ラレ、最後ノ目的ガ達セラレル。妻モソレヲ希望シ、僕自身モソレヲ希望シテトドマル所ヲ知ラナイ。正月以来三箇月ニナルガ、病的ナ妻ト競争シテヨクモココマデ對抗シテ来タモノカナト、ワレナガラ感心サセラレル。僕ガドンナニ妻ヲ愛シテイルカトイウ。「#コト、1-2-24」ガ、今コソ彼女ニモ分ツタト思ウ。サテコレカラハドウナルカ。ドウシタラコレ以上情慾ヲ駆リ立テル。「#コト、1-2-24」ガデキルカ。コノママデハマタスグ刺戟ニ馴レテシマウ。ステニ僕ハ、普通ナラバ姦通^{かんつう}シテイルト認メラレテモ仕方ノナイ状態ニ二人ヲ置イタ。僕八今モナ才妻ヲ信

ジテ疑ワナイ。彼女ノ貞操ヲ傷ツケル。「#コト、1-2-24」ナシニ、彼
 ラヲコレ以上接触サセルニハドウイウ方法ガ残ツテイルカ。ソレハ僕モ
 考エルガ、ソレヨリ先ニ彼ラガ考エ出サズニハ措カナイデアロウ。彼ラ
 トイウ中ニハ敏子モ含メテ。……………

僕ハ妻ノ「#コト、1-2-24」ヲ陰険ナ女ダト云ツタガ、ソウイウ僕
 モ彼女ニ劣ラヌ陰険ナ男デアル。陰賢ナ男ト女ノ間ニデキタノデアルカ
 ラ、敏子モ陰険ナ娘デアル。「#コト、1-2-24」ニ不思議ハナイ。ダガ
 ソレ以上ニ陰険ナノガ木村デアル。揃イモ揃ツテ陰険ナノガ四人マデモ
 集ツタトハ呆レルホカハナイ。ソシテ世ニモ珍シイ廻リ合せト云ウベキ
 ハ、陰険ナ四人ガ互イニ欺キ合イナガラモカヲ協セテ一ツノ目的ニ向ッ
 テ進ンデイル。「#コト、1-2-24」デアル。ツマリ、ソレソレ違ツタ思
 ワクガアルラシイガ、妻ガデキルダケ墮落スルヨウニ意図シ、ソレニ向ッ
 テ一生懸命ニナツテイル点デハ四人トモ一致シテイル。……………

三月三十日。……………午後敏子が誘いに来、嵐山電車の大宮終点で木村
 さんと落ち合い、三人で嵐山に行く。これは敏子の発議によるのだそう
 であるが、まことによいことを思いついてくれた。学校が休暇中なので
 木村さんは体が空いているのである。川の縁を散歩し、ボートを出して
 嵐峡館の辺まで行き、渡月橋のほとりで休憩し、天竜寺の庭を見る。久
 しぶりに健康な外気を呼吸する。これから時々こういう遊びもしたいと
 思う。夫は若い時から読書にばかり耽つていて、こういう所へ連れて来
 てくれたことはめつたにない。夕方帰路につき、三人が百万遍で電車を
 下りるとバラバラにめいめいの家に帰る。今日はあまりに爽快な時を過
 したので、夜もブランデーの卓を囲む気分にはなれなかった。……………

三月三十一日。……昨夜夫婦は酒の気なしに寝に就いた。夜中、私は蛍光灯の煌々とかがやく下で夜具の裾の方から左の足の爪先を、わざとちよっぴり外に出してみせた。夫はすぐに気がついて私のベッドへはいつて来た。アルコールの力を借りないで、眩い燭光を強く浴びつつ事を行つて成功したのは珍しいことであつた。この奇蹟的な出来事に夫は明らかに異常な興奮の色を示した。……

……関田町のマダムも私の夫も目下休暇中なので大体朝から家にいる。もっとも夫は毎日必ず一二時間は外出し、その辺をうるついて帰つて来る。それは散歩が目的なのではあるが、もう一つの目的は、私に彼の日記帳を盗み読ませる餘裕を与えるためだと思う。夫が「ちよつと出て来る」と云つて出かけるたびに、「この際に僕の日記を読んでおけ」と云われているように私は感じる。そうされればされるほど、なおさら私は読みはしないが、しかしそれなら私の方も、夫にこの日記帳を盗み読ませる機会を作つてやらなければなるまい。……

三月三十一日。……妻八昨夜僕ヲ驚喜セシメタ。彼女八酔ツタフリモシナカッタ。光ヲ消ス。「#コト、1-2-24」モ要求シナカッタ。ソシテ進ンデサマザマナ方法デ僕ヲ挑発シ、性慾点ヲ露出シテ行動ヲ促シタ。彼女ガコンナ二種々ナ技巧ヲ心得テイルト八意外デアッタ。……コノ突然ノ変化ガ何ヲ意味スルカ八追イ追イ分ツテ来ルデアロウ。……

眩暈ガアマリ激シイノデ、ヤハリ氣ニナツテ、児玉氏ノ所ニ行ツテ血壓ノ検査ヲシテ貰ウ。氏ノ顔ニ驚愕ノ色ガ浮カブ。血壓計ガ破レテシマウホド血壓ガ高イト云ウ。至急スベテノ仕事ヲ廃シ、絶対安静ノ必要ガアルト云ワレル。……

四月一日。……敏子が洋裁の河合女史を連れて来た。この人は洋裁を教える傍らアルバイトに婦人服の注文に応じている。税金がかからないので市価より二三割安くできる。敏子はいつもこの人に拵えて貰っている。私は女学生時代に制服を着たことがある以外、洋服を身につけたことがない。私は趣味が古風であるし、体つきが和服に向いているので、今さら洋服でもないのだけれども、敏子がしきりに勧めるので、試しに一つだけ拵えてみる気になった。どうせ知れることだけれども、きまりが悪いので今日の午後、夫の外出中に来て貰う。生地や型は敏子と女史に考えて貰う。脚が少々曲っているので、なるべくスカートを長くして、膝の下二インチぐらいにしてくるるように頼む。曲っているというほどでもない、西洋人にもこの程度のはざらにありますと女史は云う。生地の見本をいろいろ見せて貰う。ツイードの鼠と小豆色のグレンチェックのアンサンブル、モード・エ・トラヴォーに出ている型を示して、これになさいと二人が云うのでそうする。一万圓以下でできそうだけれども、靴も買わなければならないし、アクセサリーも多少は揃えなければならぬ。……

四月二日。午後より外出。夕刻帰宅。

四月三日。朝十時外出。河原町丁・H靴店で靴を買う。夕刻帰宅。

四月四日。午後より外出。夕刻帰宅。

四月五日。午後より外出。夕刻帰宅。

四月五日。……妻ノ様子ガ日々変ツテ来テイル。コノトコロホトンド毎日午後二ナルト（朝カラノ「#コト、1-2-24」モアル）一人デ出カケテ行キ、四五時間ヲ費シテタ飯前二戻ルノデアル。夕飯ハ僕ト二人デシタタメル。ブランデーハ飲ミタガラナイ。大概シラフデアル。今ハ木村ガ暇ナノデ、ソレトかんれん關聯ガアル。「#コト、1-2-24」ハ察セラレル。ドコヘ行クノカ分ラナイ。今日午後二時過ギ敏子ガヒヨツコリ顔ヲ出シテ、「ママハ」ト尋ネタ。「今時分ハイツモ留守ダ。オ前ノ所デハナイノカネ」ト云ウト、「ママモ木村サンモサツパリ見エナイ。ドコヘ行クノカシラ」ト首ヲヒネツタ。ソノ実彼女モグルデアル。「#コト、1-2-24」ハ察スルニカタクナイ。……

四月六日。……午後より外出。夕刻帰宅。……このところ私は連日外出している。私が出かける時、夫は大概在宅している。いつも書斎に引き籠こもつて机に向っているらしいけれども、机の上には何かの書物がページを開けて置いてあり、それに眼を曝さらしているような姿勢を取っているけれども、実際には何も読んでいるのではあるまい。多分夫の頭の中は、私が出かけてから帰って来るまでの数時間の間、私の行動を知ろうと思う好奇心でいっぱい、他事を考える餘裕なんかないであろうと想像される。もつともその間に、夫は必ず茶の間へ下りて用筆筒ようだんすの抽出ひきだしから私の日記帳を取り出して盗み読みすることは間違いなさし、だがあいにくと、夫は私の日記帳がそのことに関して何も語るところがないのを発見するであろう。私はわざとここ数日間の行動を曖昧あいまいにし、「午後より外出、夕刻帰宅」とのみ記している。私は出かける時、二階の書齋に上って行って障子を細目に開け、「ちょっと出かけて来ます」と挨拶あいさつしてココソコと逃げるように階段を下りる。どうかすれば階

段の途中から声をかけてそのまま出て行く。夫も決して私の方を振り返らない。「うん」と微かに頷くこともあり、その返辞も聞えないこともある。しかし私は、夫に私の日記帳を盗み読む時間を与えるのが目的で外出するのでは、もちろんない。私は或る会合の場所で木村さんと逢っているのである。どうしてそういう方法を取るようになったかというところ、私は白昼健康な太陽光線の照っているところで、いささかもブランデーの酒気を帯びない時に、木村さんの裸体に触れてみたかったからである。私は関田町の家で、夫や敏子のいない所であの人に会ってはいるけれども、いつも最も肝要な瞬間、肌と肌とを擦り着けて相抱き合う時になると、たわいなく泥酔してしまふのである。かつて一月三十日の日記に書いたこと、「私が幻覚で見たものは、果して実際の木村さんなのであろうか」という疑問、また三月十九日の条に書いたこと、「木村さんかと思うと夫であったり、夫かと思うと木村さんであったりするあの裸体を、一度夫に邪魔されない時に、この眼で見届けてみたい」という好奇心が、いまだに満たされないままに胸にわだかまっていたのである。私はぜひとも夫というミディアムを中に入れないところの、これこそ正しく生身の木村さんに違いないという人を、半意識状態でない時に、青白い蛍光燈の下ではなく、真つ昼間のあかりの下でしみじみと眺めてみたかったのである。……

……嬉しくもまたはなはだ奇異なことなのであるが、現実に確かめ得た木村さんその人は、今年の正月以来幾度となく幻覚で出遇ったことのある、あの姿が正しくそれであることが分った。いつぞや私は夢の中で「木村さんの若々しい腕の肉を掴み、その弾力のある胸板に押しつけられた」と書き、「何よりも木村さんの皮膚は非常に色白で、日本人の皮膚ではないような気がした」と書いたが、今度始めて現実に見た木村

さんは、やはりその通りの人であった。私は今度こそ疑いもなくこの手を持ってあの若々しい腕をムズと掴み、あの弾力のある胸板にこの胸を強く押し着け、あの日本人離れのした色白の皮膚に私の皮膚を吸い着けさせた。だがそれにしても、私のかつての幻覚がかくまで現実と一致していたとは何という不思議であろう。私が夢で空想していた木村さんの影像が、ぴったり実物に当て嵌まったということは、何だか単なる偶然の出来事のように感じられない。何か前の世からの約束事で、生れぬ先から私の脳裡のうりにあの人が住んでいたのではないか、あるいは木村さんという人に何か怪しい神通力があつて、自分の姿を思うがままに私の夢に通わせることができたのではないか、というような気がする。……

木村さんの影像が今や紛れもない現実として感じられるに従つて、夫と木村さんとは全然別なものとして切り放されるようになった。「夫と木村さんとは一身同体で、あの人の中にあなたもある、二人は二にして一である」と云つた言葉を、私はハッキリとここで取り消す。私の夫という人は優形やさがたで瘦せぎすな外見だけがやや木村さんに似ているけれども、その他の点では何も似ていない。木村さんは見たところ瘦せぎすのようだけれども、裸体にしてみるとその胸板には思いのほかの厚みがあつて体じゅうに澁刺はっらつとした健康感が溢あふれているのに、夫はいかにも骨組せいじが脆やくで、血色が悪く、皮膚に少しも弾力がない。白い下から紅あかみがさしている木村さんの皮膚にはつやつやとした潤うるおいと膩味じみがあるのに、青黴あおくろい夫の皮膚は金属性に乾かわき切つている。アルミニウムのようにツルツルなのが今もつて気味が悪い。私には夫を嫌悪けんおする気持と愛する気持とが相半ばしていたのであつたが、この頃は日々嫌悪一方に傾いて行きつつある。……あゝ、私はおよそ自分とは性の合わない、何という嫌いやな人を夫に持ったのであろう、もしこの人の代りに木村さんが夫であつたら

と、日に何度となく溜息ためいきが出る。……

……ここまで来てもまだ私は最後の「一線を越えずにいる、と云ったなら、夫はそれを信じるであろうか。が、信じようと信じまいとそれが事実なのである。もつとも「最後の「一線」というのは、非常に狭義に解釈しての、ほんとうの最後の線であつて、それを犯さない限りにおいてなさざるところなしと云つてもよいかも知れない。それというのが、封建的な両親に育てられて来た私の頭には、因襲的な形式主義がいつまでもコビリ着いていて、精神的にはどうあるうとも、肉体的に、夫が常に口癖にするオーソドックスの方法で性交をさえ行わなければ、貞操を汚したことはないという考えが、どこかに潜ひそんでいるからである。そこで私は、貞操の形式だけは守りながらそれ以外の方法でならどんなことでもしているというわけである。具体的にどうということかと問われれば困るけれども。……

四月八日。……午後ノ散歩ニ出テ四条通ノ南側ヲ河原町方面カラ西へ向ツテ歩イテ行ツタラ、藤井大丸ふじいだいまるノ前ヲ数丁進ムト妻ニ出遭ツタ。妻ハ或ル商店デ買イ物ヲシテ、歩道へ出テ来タトコロデアツタガ、僕ノ五六間前ヲ僕ノ方ニ背ヲ向ケテ、ヤハリ西向キニ歩イテ行ク。時計ヲ見タラ四時半デアル。時刻カラ考エテ、妻ハ帰宅ノ途中デアツタラシイノデアルガ、西向キニ歩イテイルノハ、恐ラク僕ヨリ先ニ僕ヲ見付ケテ自分ノ方カラ避ケタノニ違イナイ。僕ノ平素ノ散歩道ハ大体東山方面デ、四条方面へ来ル。「#コト、1-2-24」ハメツタニナイノデ、コンナ所デ僕ヲ見付ケタ彼女ハ不意ヲ食くらツタ。「#コト、1-2-24」ト思ワレル。僕ハ足ヲ速メテ距離ヲ縮メ、一間手前マデ追イ着イタ。僕モ声ヲ掛ケナケレバ彼女モ後ヲ振り返ラナイ。ソシテソレダケノ間隔ヲ保チナガラ二人ハ

進ンダ。何ヲ買イ物シテイタノカト、彼女ノ出テ来タ商店ノ前ヲ通りカカリニ覗のぞイテミル。婦人服ノアクセサリーヲ売ル店デ、レースヤナイ口ン製ノ手袋、各種ノイヤリング、ペンダント等々ガウインドウニ飾ツテアル。洋服ヲ着タ 「#コト、1-2-24」ノナイ妻ガコンナ店ニ用ハナイハズダガト、思ツタトタンニハツト驚イテ眼ヲ見張ツタ。氣ガ付イテミルト、僕ノスグ前ヲ行ク彼女ノ左右ノ耳朶カラ、真珠ノイヤリングガ垂レテイル。和服ニコウイウモノヲ着ケル趣味ヲイツカラ彼女ハ覺エタノデアルカ。今始メテコレヲ買ツテ早速着ケテ出テ来タノデアルカ、ソレトモ僕ノ見テイナイトコロデ時々コンナ 「#コト、1-2-24」ヲシテイ
ルノデアルカ。ソウイエバ彼女ハ先月アタリカラアノ茶羽織ちゃほおじトイウ丈たけノ短イ羽織ヲ着テイイルノヲシバシバ見カケタ。今日モアレヲ着テ歩イテイ
ル。本来古風ナ身ナリガ好キデ、当世風ノ流行ヲ追ウ 「#コト、1-2-
24」ハ嫌きらイダツタノデアルガ、コウシテ見ルト、コウイウ身ナリモ似合
ワナクハナイ。コトニ意外ナノハ耳環みみわガ似合ツテイイル 「#コト、1-2-
24」デアル。僕ハフト、芥川龍之介ノ書イタモノノ中ニ、中国ノ婦人ハ
耳ノ肉ノ裏側ガ異様ニ色ガ白クテ美シイト云ツテイイルノヲ読ンダ 「#
コト、1-2-24」ガアルノヲ思イ出シタ。妻ノ耳ノ肉モ裏側カラ見ルト訝さ
エ訝さエト白クテ美シイ。アタリノ空気がマデガ清冽せいれつニ透すキ徹とおツテイイルヨウ
ニ見エル。ソシテ、真珠ノ玉ト耳朶トガ互イニ効果ヲ助ケ合ツテイイルノ
デアルガ、アノ耳ニアノ真珠ヲ下ゲル 「#コト、1-2-24」ヲ考エツイ
タノハ彼女自身ノ知慧ちえデハアルマイ。ソウ思ウト僕ハ例ニヨリ嫉妬しつとト感
謝トノ相半バスル氣持ヲ味ワサレタ。妻ニコウイウエキゾチックノ美
ガアル 「#コト、1-2-24」ヲ、彼女ノ夫タル者ガ発見スル 「#コト、
1-2-24」ガデキナイデ、他人ニ見ツケ出サレタノハ口惜シイケレドモ、
夫トイウモノハ見馴みなレタ妻ノ見馴レタ姿ヲノミ見タガルモノデ、カエツ

テ他人ヨリモ迂濶うかつナノカモ知レナイ。……妻八鳥丸からすま通ヲ越エテナオマツ
スグニ歩イテ行ク。左ノ手ニハンドバッグト一緒ニ、今ノ商店ノ包ミ紙
ラシイモノニ包ンダ、細長イ平ベツタイ包ミヲ持ツテイルガ、中身八何
デアルカ分ラナイ。西洞院にしのおういんヲ超エタトコロデ、僕八彼女ニモウ尾行シテ
イナイ。「#コト、1-2-24」ヲ知ラセルタメニ電車通りヲ北側へ渡ツテ、
ワザト彼女ニ見エルヨウニ彼女ヲ追イ越シテ進ンダ。ソシテ四条堀川ほりかわカ
ラ東行スル電車ニ乗ツタ。……僕ガ帰宅シタ約一時間後ニ妻モ帰宅シ
タ。妻ノ耳ニハモウアノ真珠ガ下ツテイナカッタ。多分アノハンドバッ
グノ中ニ入レテアルノデアロウ。サツキノ買イ物包ミハ提さゲテイタガ、
僕ノ見テイル前デハソレヲ解カナカッタ。……

四月十日。……夫は彼の日記の中に彼自身の憂慮すべき状態につい
て何ごとかを洩もらしているであろうか。自分では自分の頭のことや体の
ことをどの程度に考えているのであろうか。彼の日記を読まない私には
それは想像できないけれども、実は私はもう一二月前から、彼の様子
が変調を来たしていることに気がついていて。彼はもともと血色のすぐ
れない顔つきをしているのだが、最近は特に色つやが悪くて土気色つちけいろをし
ている。階段を上り下りする時にしばしばよろけることがある。元來記
憶力のよい人であったのが、近頃は顯著に度忘れをする。人と電話で話
しているのを聞いてみると、当然知っていべきはずの名前が浮かんで来
ないで、マゴマゴしていることがある。室内を歩きながら、突然立ち止
まって眼をつぶったり柱につかまったりする。少し慇懃いんぎんな手紙を書くに
は巻紙へ毛筆でしたためののだが、字体がひどく拙劣せつれつになりつつある。
（書道というものは老年になるほど熟達するのが普通である）誤字や脱
漏が目立って多くなっている。私が見るのは封筒の上書きだけであるが、

日附や番地を間違えるのは始終である。その間違え方もはなはだ不思議で、三月とすべきを十月としたり、自宅の所番地にとんでもないでたらめを書いたりする。叔父おじに宛てた封書の上書きに、「之介」の字を「の助」と書いていたのには、少からず驚かされた。「四月」とすべきを「六月」と書いて、「六」の字を消して御丁寧にも「八」の字に直しているのもあった。日附や番地の場合だと、あまり見苦しいものは私がそつと訂正してから出すのであるが、「の助」の時は計らいかねて、「之介」が「の助」になっていきますよと、何気ないように注意を与えた。夫は明らかに狼狽ろうばいしながら、「そうだったかね」とわざと平気を装って云い、すぐには書き直そうともしないで、それを机の上に置いた。が、封筒は私が気を付けて眼を通すようにしているからよいが、本文にはどんな間違いがあるか知れたものではない。夫の頭が変であることは、すでに友人や知己ちぎの間には相当知れ渡っているのかもしれない。ほかに相談相手もないので、先日児玉先生にそれとなく夫を診察して貰うように頼んだところ、「そのことで僕も奥さんにお話したいと思っていました」と云う。児玉先生の話だと、夫は自分でも不安になったとみえて、相馬博士に診みて貰っているらしいのであるが、博士があまり嚇おどかすので、博士を敬遠して児玉先生の所へ相談に来たのだそうである。児玉さんは専門でないからはずきりしたことは云えないけれども、「血けつ圧あつの高いにはびっくりしましたよ」と云う。「どのくらいあるのです」と云うと、「奥さんに申し上げてよいか悪いか分かりませんが」と躊躇ちゅうちゆしてから、「御主人の血圧を血圧計で測ろうとしたら、度盛りの最上部を突破してまだいくらでも上って行くのです。機械が破れそうになったので、慌あわてて止めてしまいました。あの工合くあいだどどのくらいあるか知れませんか」と云う。「主人は知っているのでしょうか」と云うと、「相馬博士から再三の警

告があつたにもかかわらず、それを守っておられないようですから、寒心すべき状態であるということ隠さず申し上げておきました」と云う。（児玉先生からそういう注意があつた以上は、夫に読まれても差支えな

いと思うので、始めてこのことを書くのである）夫をさような状態に陥れたのには、私に大半の責任がないとは云えない。私の飽くなき要求がなかつたならば、夫もあまで淫蕩生活いんとうに没り込むことはなかつたであろう。（児玉先生とこの話をした時、私は恥かしさで真まつ報かになつたが、よいあんばいに児玉さんは私たちの夫婦関係の真相を知らない。私は徹頭徹尾受け身で、働きかけるのはいつも夫の方であり、ひとえに夫自身の不摂生が今日の結果を招いたのであると、児玉さんは思い込んでいたのである）夫にしてみれば、すべては妻を喜ばすのが目的でこういう風になつたのであると云うでもある。それを私も否定するつもりはないが、私は私で、どこまでも夫に忠実な妻として仕えて来、夫を喜ばすためには随分忍びがたいことをも忍んで来たのである。敏子に云わせれば「ママは貞女の龜鑑」なのだそうで、取りようによつてはそうも云えなくはないと思う。……が、まあ、どつちがよいの悪いのと今さら責任のなすり合いをしたところでしょうがない。要するに夫も私も、互いが互いを嗾けしかけ合い、唆そかし合い、鑄しんを削けずり合い、どうにもならない勢いに駆られて夢中でここまで来てしまつたのである。……

ここで私はこんなことを書いてよいか悪いか、夫がこれを読んだ場合にどんな結果になるか分らないが、体の工合が寒心すべき状態にあるのは夫ばかりでなく、実は私もほぼ同様であることを書きとめておこうと思う。私がそれを感じたのは今年の正月末頃からであつた。もつとも前に、敏子が十ぐらいの時に二三度嗜血かっけつした経験があり、肺結核の症状が二期に及んでいると云われ、医師に注意を促がされたことがあつたが、

案ずるほどのこともなく自然に治癒してしまったので、今度もそんなに気にしてはいない。　　そうだ、あの時も私は医師の忠告を無視して不養生の限りを尽したのであった。私は死を恐れないわけではなかったが、私の淫蕩の血はそんなことを顧慮する隙を与えなかつたのであった。私は死の恐怖に眼を閉じて一途に性の衝動の赴くままに身を委せた。夫も私の大胆さと無鉄砲さに呆れ、今にどうなるであろうかと案じながらも結局私に引き擦られて行つた。運が悪ければもうあの時に私は死んでいたのかも知れないのだが、どういうわけかあんな乱暴をしながら直つてしまった。　　今度も私は、正月の末に豫感があり、時々胸がむず痒いような生温いような感じを覚えたことがあるので、変だと思つていたのであつたが、二月の或る日、この前の時と全く同じ泡を交えた鮮紅色の血液が痰とともに出た。分量は多くないのだけれども、そういうことが二三回つづいた。今は一時的に治まっているようだけれども、いつまたあれが始まるかも知れない。体がだるくて手のひらや顔が妙に火照るところを見ると、熱があるに違いないと思うけれども、私は測つてみようとはしない。(一度測つたら七度六分あつたので、それきり測らないのである) 医者にも診て貰わないことにしている。盗汗を掻くことも始終である。この前の経験に徴して今度も大したことはあるまいと思つているものの、タカを括つて安心していうわけでもない。ただ幸いにも私は胃が丈夫なのが取柄であると、この前の時に医者に云われた。こういう病気は痩せて来るのが普通であるが、奥さんは食慾が衰えないのが不思議ですねと、よくそう云われた。でもこの前の時と違ふのは、おりおり胸が気味悪く疼くことと、午後になると毎日のように疲労感が襲つて来ることである。(その疲労感に抵抗しようとして私は一層木村さんに接触する。午後の倦怠を忘れるためにはぜひとも木村さんが必要

である。前にはこんなに胸が疼いたことはなかった。またこんなに疲れることもなかった。事によつたら今度は次第に悪化して救いがたいことになるのかも知れない。どうもこの胸の痛むのはただごとでないという気もする。それに、不養生の程度もこの前どころの段ではない。この病気には過度の飲酒が最も有害であると聞いているのに、正月以来飲み続けて来たブランデーの量を考えると、これで病勢が昂進こうしんしなければ奇蹟きせきであるというほかはない。今から思うと、この間中あんなに酒に酔いしれて前後不覚に陥つたのは、いずれは長くない命であるというやけ半分の心持が、潜在的に手伝っていたのかも知れない。……

四月十三日。……妻ノ外出時間ガ昨日アタリカラ変更サレルノデハナイカト、カネテ僕ハ豫期シテイタガ、果シテソノ通りデアッタ。トイウノハ、木村ノ学校ガ始マツテ、ソロソロ昼間ノ逢引ガ不可能ニナルカラデアアル。コノ間ジユウ八午後早くカラ出カケル「#コト、1-2-24」ニナツテイタノニ、コノ一兩日落チツイテイルナト思ツタラ、昨日ノ夕刻、五時頃ニマズ敏子ガ現ワレタ。スルト申シ合ワセタヨウニ妻ガ立ツテ身支度ヲ始メタ様子デアルノガ、二階ニイテモスグ二分ツタ。妻ハ上ツテ来テ障子ノ外カラ「出カケテ来マス、ジキニ戻リマス」ト云ツタ。例ニヨツテ僕ハタダ「ウン」ト云ツタ。「敏子ガ来テイマスカラ夕飯ハ敏子ト上ツテ下スツテモイイワ」ト、階段ノ途中ニ立ち止リナガラ妻ガ云ツタ。「才前ハドウスル」ト僕ハ意地悪ク尋ネタ。「私ハ帰ツテカラ食ベマス、待ツテイテ下サレバ一緒ニイタダキマスケレドモ」ト云ツタガ、「僕ハ先ニ食ベル。才前モ食ベテ来タライイ。ユツクリシテ来テ構ワナイヨ」ト僕ハ答エタ。フト僕ハ、彼女ガドンナ身ナリヲシテイルカ見タクナツテ、不意ニ廊下へ出テ階段ヲ覗イタ。彼女ハステニ階段ヲ降り切ッ

テイタガ、アノ真珠ノイヤリングヲ昨日ハモウ家ノ中デ着ケテイタ。(
 僕ガ廊下へ出て来ルトハ豫期シテイナカッタノデアル)ソシテ、左ノ手
 ニ白イレースノ手袋ヲ箆メ、右ノ手ニソレヲ箆メヨウトシテイルトコロ
 デアッタ。先日彼女ガ提ゲテイタ買物包ミノ中身ハコレダッタノダナト
 思ツタ。意外ナトコロヲ僕ニ見ラレテ彼女ハバツガ悪ソウデアッタ。「
 ママ、ヨク似合ウワヨ」ト敏子ガ云ツタ。……六時半過ギニ食事ノ用
 意ガデキタ。「#コト、1-2-24」ヲ婆ヤガ知ラセテ来タノデ、茶ノ間へ
 下リテ行クト敏子ガ待ツテイタ。「マダイタノカ、飯ナラ一人デ食ツテ
 モイイゼ」ト云ウト、「タマニパパノ才相手グライスルモノヨト、ママ
 ガ云ウノヨ」ト云ウ。何カ云イタイ。「#コト、1-2-24」ガアルンダナ
 ト察シタ。全ク、敏子ト二人デタ餉ノ膳ニ就クナドトイウ。「#コト、
 1-2-24」ハ珍シイ。ソウイエバ夕食時ニ妻ガ留守ノ「#コト、1-2-24」
 モ珍シイ。妻ハコノトコロ外出ガチデアルガ、イツモ晩ノ食事ノ時ニハ
 家ニイル。家ヲ空ケルノハ大概夕食ノ前カ後デアル。ソノセイカ僕ハ何
 カ空白ガデキタヨウナ淋シサヲ覺エタ。コンナ氣持ニナツタ。「#コト、
 1-2-24」ハメツタニナイ。敏子ガイテクレル。「#コト、1-2-24」ガカ
 エツテヨケイ空白感ヲモタラスノデ、実ハ有難迷惑デアツタガ、敏子ノ
 「#コト、1-2-24」ダカラソレモ計算済ミダツタカモ知レナイ。「パ
 パ、ママハドコへ行カハルノカ分ツテハルノ」ト、膳ニ向ウト敏子ガ始
 メタ。「ソナナ」「#コト、1-2-24」ハ分ラナイサ、ソコマデハ知リタ
 クナイカラネ」ト云ウト、「大阪ヨ」ト、ズバリト云ツテ反響ヲ見テイ
 ル。「大阪?」ト、ツイ乗り出シテ云イカケタ言葉ヲ僕ハ怵エテ、「へ
 エ、ソウカネ」ト、ツトメテ無表情ニ答エタ。三条カラ舊京阪ノ特急デ
 四十分デ京橋ニ着ク、ソコカラ歩イテ五六分ノ所ニソノ家ハアル。
 「モット委シク教エマシヨウカ」ト云ウノデアツタガ、黙ツテイルト続

ケテアトヲ云イソウナノデ、「ソソナ」「#コト、1-2-24」八聞カナイ
 デモイイ。オ前ガソレヲ知ツテイルノハドウイウワケダ」ト、僕八話ノ
 方向ヲ外ラシタ。「適當ナ場所ガアル」「#コト、1-2-24」ヲ私ガ教工
 テ上ゲタノヨ。京都デ八人目ニツキヤスイカラ、京都カラ遠クナイ所デ、
 ドコカナイデシヨウカト木村サンガ云ウカラ、オ友達ノ或ルアブレノ人
 デソウイウ。「#コト、1-2-24」ニ委シイ人ニ聞イテ上ゲタノヨ」ソウ
 云ツテ敏子ハ、「パパ、少シイカガ」ト、クルボアジエヲ注^つイデ出シタ。
 近頃ブランデーハ用イナイ。「#コト、1-2-24」ニシテイタノダガ、昨
 日ハ敏子ガ膳ノ上ニ持チ出シテイタ。僕八照レカクシニ一口飲ンダ。「
 立チ入ツタ」「#コト、1-2-24」ヲ聞クヨウダケレド、パパハドウ思ウ
 テハルノ」ト敏子ガ云ツタ。「ドウ思ウツテ、ドウイウ」「#コト、1-
 2-24」サ、「ママガ今デモパパニ背^{そむ}イテイナイト云ツタラ、ソレヲ信用
 シヤハルツモリ」「ママハオ前トソソナ話ヲシタ」「#コト、1-2-24」
 ガアルノカ」「ママハシャハリマセン、木村サンカラ聞イタノデス。奥
 サンハ先生ニ対シテイマダニ貞節ヲ保ツテオイデデスト、アノ人ガ云ウ
 ノヨ。ソソナ阿呆^{おぼ}ラシイ」「#コト、1-2-24」ヲ私ハ真^まニ受ケハシナイ
 ケレドモ」 敏子ガマタシエリーグラスヘイッパイニ注ギ足シタノ
 デ、僕八躊躇^{ちゅうちゆ}ナク受ケテ乾^ほシタ。マダイクラデモ飲ム氣ニナツタ。「オ
 前ガ真ニ受ケヨウト受ケマイトオ前ノ勝手ダ」「パパハドウナノ」「僕
 ハ云ワレルマデモナク郁子ヲ信ジル。タトイ木村ガ郁子ヲ汚シタト云ツ
 タトシテモ、ソソナ」「#コト、1-2-24」ハ信ジナイ。郁子ハ僕ヲ欺^{あだ}ク
 「#コト、1-2-24」ガデキルヨウナ女デハナイ」「フフ」ト敏子ガ口
 ノ内デ微力^{かす}ニ笑ツタ声ガシタ。「デモ、カリニ汚サレテハイナイトシテ
 モ、汚サレルヨリハ一層不潔ナ方法デ或ル満足ヲ」「止メナイカ
 敏子」ト、僕八叱リツケタ、「生意氣^{なまいき}ナ」「#コト、1-2-24」ヲ云ウノ

八止セ。親ニ対シテ云ツテヨイ 「#コト、1-2-24」ト悪イ 「#コト、1-2-24」トアル。ソナ 「#コト、1-2-24」ヲ云ウ貴様コソアプレダ。貴様コソ汚レタ奴ダ。用ハナイカラサツサト帰レ」 「帰ルワ」ト云ウト、茶碗ちやわんニ飯ヲ盛りカケテイタノガ、ソノ飯ヲパツト飯櫃めしびつヘ投ゲ込ンデ出テ行ツテシマツタ。……………

…………… 敏子ニ虚ヲ突カレタアトノ心ノ動揺ガ、長イ間静マラナカッタ。

敏子ガ「大阪ヨ」ト素ツ破抜イタ時、僕ハ鳩尾みぞおちノ辺ガピクント凹へこンダヨウナ氣ガシタガ、イツマデモソノ感ジガ続イテイタ。トイッテ、僕ハ全然ソウイウ 「#コト、1-2-24」ヲ想像シテモイナカッタワケデハナイ。

想像シナガラ努メテソノ 「#コト、1-2-24」ヲ考エナイヨウニシテイタノニ、イキナリハツキリト聞カサレタノデギクリトシタ、トイウノガ偽ラザル氣持カモ知レナイ。ソレニシテモ、場所ガ大阪デアルノハ初耳デアッタ。ソレハドウイウ家ナノカ、普通ノ品ノヨイ旅館カ、アルイハ待合力、モット柄ノ悪イ温泉マークノヨウナ家カ。…………… 考エマイトシテモソノ家ノ様子、室内ノ空氣、二人ノ寝テイルかっこう恰好マデガ浮カンデ来テ仕方ガナカッタ。…………… 「アブレノオ友達ノ人ニ聞イタ」？ 僕

八何トナク四角ナ壁デ仕切ラレタ安アパート風ノ一室ヲ聯想れんそうシ、畳デナクベッドニ寝テイル姿ヲ描イタ。オカシナ 「#コト、1-2-24」ダガ、

畳ノ部屋ニ布団ふとんヲ敷イテ寝テイラレルヨリ寝台ニ寝テイテクレル方ガ望マシイ氣ガシタ。「何カ非常ニ不自然ナ方法」 「汚サレルヨリハ

一層不潔ナ方法」 イロイロナ姿勢、イロイロナ手足ノ位置ガ考エラレタ。…………… 敏子ガ突然アンナ素ツ破抜キヲシタノハナゼカ、アレハ

彼女自身ノ意志デ云ツタノデハナク、郁子ガ云ワセタノデハナイカ、トイウ疑問ガ湧わイタ。郁子ハソノ 「#コト、1-2-24」ヲ自分ノ日記ニ書イテイルカドウカ知ラナイガ、書イテイタトシテモ僕ガソレヲ読マナイ

デ（アルイハ読マナイフリヲシテ）イル 「#コト、1-2-24」ヲ恐レテ、
 否^{いやおう}応^{おう}ナシニ僕ニソノ 「#コト、1-2-24」ヲ認メサセルタメニ敏子ヲ使ッ
 タ？ 一番^{かんじん}肝腎ナ 「#コト、1-2-24」ハ、 ソシテ一番氣ニナル

「#コト、1-2-24」ハ、 今度コソ郁子ハスベテノモノヲ木村ニ
 捧^{たか}ゲ尽シテシマッタノデハナイカ、ソシテ敏子ノ口ヲ介シテソノ諒^{しょうかい}解^{かい}ヲ
 僕ニ求メテイルノデハナイカ。 「ソソナ阿呆^{あほう}ラシイ 「#コト、1-2-24」

八真ニ受ケナイ」ト敏子ガ云ウノハ、郁子ガ云ワセテイルノデハナイカ。
 ……

今考エルト僕ハ、「彼女ガ多クノ女性ノ中デモ極メテ稀^{まれ}ニシカナイ
 器具ノ所有者デアル 「#コト、1-2-24」」ヲ日記ニ書イタノハ誤リデ

アッタ。ヤハリアレハ書カナイ方ガヨカッタ。彼女ハソノ器具ヲ、夫以
 外ノ男性ニ試ミテミタイトイウ好奇心ニ、果シテイツマデ抗シ得タデア
 口ウカ。 …… 従来僕ガ妻ノ貞節ヲ信ジテ疑ワナカッターツノ理由ハ、

彼女ガドンナ場合ニモ僕トノ情交ヲ拒^{こは}マナイ 「#コト、1-2-24」ニアッ
 タ。彼女ガドコカデ彼ト逢ッテ来タ 「#コト、1-2-24」ガ明ラカデア
 ル時ニモ、ソノ夜夫カラ挑^{いど}マレテ怯^{ひる}ム色ヲ見セタ 「#コト、1-2-24」

ハ一度モナイ、バカリカ挑ンデ来ルノデアル。コレハ彼女ガ彼トハ実事
 ヲ行ッテイナイ証拠デアルヨウニ思ッテイタケレドモ、他ノ女性ナラト
 ニカク、僕ノ妻ハ午後ニソウイウ 「#コト、1-2-24」ガアツテ夜ニ及

ンデマタアツタトシテモ、 ソウイウ日ガ数日続イタトシテモ平氣
 ナ体質ナノデアル。愛スル相手ト逢ッタアトデ嫌イナ相手ト行ウ 「#
 コト、1-2-24」ハ、堪エラレナイ苛^{かじやく}責^{せき}デアルベキハズダガ、彼女ハ例外

ナノデアル。彼女ガ僕ヲ拒ンデモ、彼女ノ肉体ハ拒ム 「#コト、1-2-
 24」ヲ知ラナイ。拒モウトシテモ誘惑ニ打^かチ克^かチ得ズ、カエツテソレヲ

喜ビ迎エル。ソコガ淫婦ノ淫婦タル所以^{ゆえん}デアル 「#コト、1-2-24」ヲ、
 僕ハ見落シテイタノデアッタ。 ……

昨夜妻ガ帰宅シタノ八九時デアッタ。十一時僕ガ寢室ニ入ッタ。「#トキ、146-15」八彼女ハステニベッドニイタ。……僕ハ豫期以上ニ積極的デアル彼女ヲ見出シテ驚クホカハナカッタ。僕ハ完全ニ受ケ身ニ立タサレタ。房中ニオケル彼女ノ態度、取り扱イブリ、アシライ方、等々ニ間然スベキトコロハナカッタ。媚^こビノ呈シ方、陶醉ヘノ導キ方、漸^{ぜんぜん}々ニエクスタシーヘ引キ上げテ行ク技巧ノ段階、スベテハ彼女ガソノ行為ニ渾身^{こんしん}ヲ打チ込^こンデイル証拠デアッタ。……

四月十五日。……自分ノ頭脳ガ日ニ日ニ駄目^{だめ}ニナリツツアル。「#コト、1-2-24」ガ自分ニモ分ル。正月以来、他ノ一切ヲ放擲^{ほうてき}シテ妻ヲ喜バス。「#コト、1-2-24」ニノミ熱中シテイタラ、イツノマニ力淫慾以外ノスベテノ「#コト、1-2-24」ニ興味ヲ感ジナイヨウニナッタ。モノヲ思考スル能力ガ全ク衰エテ一ツ「#コト、1-2-24」ヲ五分ト考エツツケル根氣ガナイ。頭ニ浮かブノハ妻ト寝ル。「#コト、1-2-24」ニ関シテノ妄想^{もうそう}ノ数々バカリデアル。昔カラドンナ場合デモ讀書ヲ廃シタ。「#コト、1-2-24」ハナカッタノニ、終日何モ読マズニイル。ソノ癖長イ間ノ習慣デ机ニ向ツテダケハイル。眼ハ書物ノ上ニ注ガレテイルガ、何モ読ンデイルノデハナイ。第一眼ガチラチラシテモノガ非常ニ読ミニクイ。文字ガ二重ニ見エルノデ同ジ行ヲ何度モ読ム。今ヤ自分ハ夜ダケ生キテイル動物、妻ト抱擁スル以外ニハ能ノナイ動物と「#「動物と」ハママ」化シ終ツタ。昼間書齋^{こも}ニ籠^{こも}ツテイル時ハタマラナイ倦怠ヲ覺エル一面、云イヨウノナイ不安ニ襲ワレル。外ヲ散歩シテイルトイクラカ不安ガ紛レルケレドモ、ソノ散歩ガダンダン不自由ニナリツツアル。トイウノハ、眩暈^{めまい}ガヒドクテ歩行ニ困難ヲ伴ウ。「#コト、1-2-24」ガシバシバナノデアル。路上デ仰向ケニ倒レソウニナル。「#コト、1-2-24」

モ始終デアル。散歩ニ出テモアマリ多クヲ歩カヌヨウニシ、ナルベク人
 通りノ少イ所、百万遍、黒谷、永観堂辺ニ杖ヲ曳イテ、主ニベンチデ休
 憩シテ時間ヲツプス。「#コト、1-2-24」ニシテイル。(脚ノカモ弱ツ
 テイテ歩キ過ギルトジキニ疲レル)……………

……………今日散歩カラ戻ツテ来ルト妻ガ洋服ノ河合女史ト茶ノ間デ話シ
 テイル。僕ガ茶ヲ飲ミニハイロウトスルト、「今オハイリニナラナイデ。
 二階へ行ツテイテ下サイ」ト云ウ。覗イテミルト妻ガ洋服ヲ着セテ貰ッ
 テイルノデアル。シキリニ二階へ行ケト云ウノデ書齋ニ上ル。「チヨツ
 ト出カケテ来マス」ト、階下デ妻ノ声ガシテ、彼女ト河合女史トガ出テ
 行ク様子デアル。二階ノ窓カラ路ヲ歩イテ行ク二人ヲ見オロス。妻ノ洋
 装ヲ見ルノハ始メテデアル。コノ間カラ和服デアクセサリーヲ着ケテイ
 タノハ、コノタメノ用意ダツタノデアル。ガ、正直ノトコロ、妻ノ洋装
 ハ似合ツテイルトハ云イニクイ。不恰好デ背ノ低イ河合女史ニ比ベルト、
 優雅ナ体ツキノ妻ノ方ガ似合イソウナモノダケレドモ、身ニツイテイナ
 イ感ジデアル。女史ハ馴レテイイルノデ着コナシガ巧イ。妻ハ、アノイヤ
 リングヤレースノ手袋ガ、和服デ着ケテイタ時ノヨウニハ似合ツテイナ
 イ。和服ダトアレガエキゾチックニ感ジラレタノニ、洋服ダト取ツテ付
 ケタヨウデ、シツクリシナイ。服ト、体ト、アクセサリトガバラバラ
 ノ感ジデアル。近頃ハ和服ヲ洋服ノヨウニ着コナス。「#コト、1-2-24」
 ガ流行ルヨウダガ、妻ハ反対ニ、洋服ヲ和服ノヨウニ着テイイル。洋服ノ
 下カラ、和服向キニデキテイイル体ツキガ透イテ見エル。肩ガアマリニモ
 撫デ肩デ、コトニガニ股ノ脚ガイケナイ。細クテスツキリシテイイルノダ
 ケレドモ、膝ノ下カラ踝ニ至ル線ガ外側へ曲ツテイテ、靴ヲ穿イタ足首
 ト脛トノ接合点ガ妙ニ脹レポツタク膨ランデイル。ソレニ体ノコナシガ、
 手ノ持ツテ行キヨウ、足ノ運びヨウ、頸ノ振りヨウ、肩ヤ胴ノ動カシヨ

ウ等々ガ、スベテ和服流ニシナシナシテイテ締マリガナイ。シカシ僕二ハマタ、ソノナヨナヨトシテ締マリノナイ体ツキ、不細工ニ歪ンデイル脚ノ曲線ガ変ニナメカシク感ジラレタ。「#コト、1-2-24」モ事実デアル。コウイウ不思議ナナメカシサハ、彼女ガ和服ヲ着テイタノデハ現ワレナイ。僕八向ウヲ歩イテ行ク妻ノ後姿ヲ見送りナガラ、分ケテモスカートノ下カラ踝ノ辺ノ歪曲美ニ見惚レナガラ、今夜ノ「#コト、1-2-24」ヲ考エテイタ。……………

四月十六日。……………午前中錦へ買い出しに行く。私が自分で食料品を買い漁りに行く習慣も、もう長いこと怠りつづけていたのであったが、近頃は万事婆や任せにしていたのだが、それでは何だか夫に対して済まないような、主婦の勤めをおろそかにしているような気がしていたので、久しぶりに出かける。(でも私には買い出しなんぞよりもっと大切な勤めがあり、夫を喜ばせるための忙しい仕事控えているので、なかなか錦へ行く暇などはなかったのだ)行きつけの八百屋の店で筍と蚕豆ときぬさやを少々買う。筍を見たので思い出したが、今年はどうとう花の咲いたのも知らないうちに過ぎてしまった。去年はたしか敏子と二人で、疏水のふちを銀閣寺から法然院の方へ花見をして歩いたことがあった。もうあの辺の花も残らず散ったことであろう。それにつけても今年は何という慌しい落ち着きのない春を送ったことか、あツという間にこの二た月三月が夢のように過ぎてしまった。……………十一時に帰って来て書斎の花を活けかえる。今日はマダムが庭にあるのを届けてくれたミモザの花にする。夫はつい今しがた起き出したらしく、私が花を活けている時によやく二階へ上って来た。朝は早起きの夫なのであるが、近頃はよくこんな風に寝坊をする。「今お起きになったの」と云うと、「今

日は土曜だったのか」と云つてから、「明日は朝から出かけるんだろかね」と、まだ睡気ねむけの残っているような薄寝惚ねむけけ声で云つた。(その実寝惚ねむけけているのではない。大いに気に懸かけているのである)私は肯定とも否定とも付かない返辞を、口の内でもぐもぐと云つただけであつた。……

二時頃、玄関に「御免下さい」という声がして見知らぬ男がはいつて来た。石塚治療院いしづかから参りましたと云う。指壓しゆあつの治療師だそうである。誰もそんな者を頼んだ覚えはないはずだがと思つていると、婆だれやが出て来て「旦那様だんなが呼んでくれとおっしゃいましたので、私が頼みました」と云う。おかしなこともあるものである。夫は昔から見知らぬ人間に足腰こしを揉もませたりすることが嫌いなたちで、今まで按摩あんまやマッサージの類に体を触さわらせたことはないのである。婆だれやに聞くと、この間から旦那様だんなが肩が凝こつてたまらない、首が廻まわらないくらいだとおっしゃつていらつしゃいましたので、非常に上手な指壓しゆあつの先生がいるのですが、「#」言+墟うのつくり」、「第4水準2-88-74」だと思つて試してごらんになりませんか、それはそれは不思議なくらい、一度か二度で忘れたように直りますと云つて、熱心にお勧めしておいた、そうしたらよほどおつらいのだとみえて、ではその人を頼んでほしいとおっしゃいましたので、と云う。五十恰好ごじゅうごの、あまり人相まへのよくない、瘦くろめがねせた、黒眼鏡くろめがねを掛けた男である。盲人かと思つたがそうでもないらしい。私がうつかり「按摩さん」と呼んだら、婆だれやが慌おどてて「按摩さんと云うと怒おこるのです、先生と分もベッドに上り込んで治療する。白い清潔な上つ張あはを着ているけれども、何だか薄汚うすぎたない感じ。こんな男に神聖なベッドに乗つて貰もらいたくない。夫が按摩嫌あないなのももつともだと思つた。「えらく凝こつてますな、じきに

楽にして上げます」などと云う。変に見識ぶっているのが滑稽こっけいである。

二時から始めて四時頃まで、約二時間も揉む。「もう一回か二回で楽になります、明日も来て上げます」と云って帰って行く。夫に「どんな具合で」と聞くと、「いくらか楽になったようだが、体じゅうをミリミリと強くおさえるので、痛くて、好い気持ではない」と云う。「明日も来て上げると云ってましたね」と云うと、「まあもう一二回やらせてみよう」と云う。よほど凝るのだとみえる。……

「明日は朝から出かけるんだろうね」と云われてみると、「今日もこれから出かけるんです」とは云いにくかったけれども、そうも行かないわけがあるので、四時半頃に洋服に着換え、イヤリングを着けた耳朵をわざと寝室へさし出して、「出かけて来ます」という顔つきをして見せる。

「あなた散歩は」と、照れ隠しに聞いてみる。「うん、僕も出かける」と云いながら、夫は指壓のあとでぐったりとして、まだ寝台に横になっていた。……

四月十七日。夫にとって重大な事件の起つた日、私にとつても重大な日であつたことに変りはない。事によると今日の日記は生涯せいがい忘れることのできない思い出になるのではないかと思う。従つて今日一日の出来事は細大隠すところなく刻明に書いておきたいのだけれども、しかしそういつても早まつたことはしない方がよい。やはり今のところ、今日の朝から夕刻まで私がどこでどういう風に時間を消費したかについては、あまり委しくは書かない方が賢明である。とにかく私は、今日の日曜日をいかにして過すかは前からきめておいたのであるから、その通りにして過した。私は大阪のいつもの家に行って木村氏に逢い、いつものようにして楽しい日曜日の半日を暮らした。あるいはその楽しさは、過去の日

曜日のうちでは今日が最たるものであったかも知れない。私と木村氏とはありとあらゆる秘戯の限りを尽して遊んだ。私は木村氏がこうしてほしいと云うことは何でもした。何でも彼の注文通りに身を捻じ曲げた。

夫が相手ではとても考えつかないような破天荒な姿勢、奇抜な位置に体を持って行って、アクロバットのような真似もした。(いったい私は、

いつの間にこんなに自由自在に四肢を扱う技術に練達したのであるうか、自分でも呆れるほかはないが、これも皆木村氏が仕込んでくれたのである)とところで、いつもは彼とあの家で落ち合うと、合ってから別れるギリギリの時間まで、一秒の暇も惜しんで全力的にそのことに熱中し、何一つ無駄話などはしないのであるが、今日はふつと、「郁子さん、何を考えているんですか」と、木村が眼敏く気がついて私に尋ねた瞬間があった。(木村はとうから私のことを「郁子さん」と呼んでいるのである)

「いゝえ別に」と、私は云ったが、その時、ついぞないことに、夫の顔がチラリと私の目の前を掠めた。どうしてこんな時に夫の顔が浮かんで来たのか不思議であったが、私が一生懸命にその幻影を打ち消すように努めていると、「分っていますよ、先生のことを考えているんですね」

と、木村が凶星を指して云った。「どういうわけか、僕も先生のこと気がなっていたところなんです」そう云って木村は、あれきり闘

が高くなって御無沙汰をしているので、近々お伺いしなければならぬと思っていた、実は国元へ手紙を出して、「#「魚+鐵のつくり」、

第4水準2-93-92」子をお届けするように云いつけてやったのだが、まだ届いていないでしょうか、などと云った。その話はそれで途絶えて、二人は再び享樂の世界に没り込んだのであったが、今から思うとあれは何かしら虫が知らせたのかも知れない。……五時に私が帰って来た時、夫は外出中であつた。婆やに聞くと、今日も指壓の先生が来て二時から

四時半ぐらいまで、昨日より三十分以上も長く治療していた。肩がこんなにひどく凝るのは血圧の高い証拠であるが、医者薬なんぞ利きはない、どんなに偉い大学の先生にかかってもそう簡単に直るはずはない、それより私にお任せなさい、請け合せて直して上げる、私は指圧ばかりでなく、鍼や灸も施術する、まず指圧をして利かなかつたら鍼をする、眩暈は一日で効験が現われる、などとあの男は云ったという。血圧が高いといつても、神経に病んで頻繁に測るのはよろしくない、気にすれば血圧はいくらでも上る、二百や二百四五あつても不養生をして平気で生きている人が何人もいる、むやみに気にしない方がよい、酒や煙草も少しぐらいは差支えない、あなたの高血圧は決して悪性のものではないから、大丈夫良くなりますと云つたとやらで、夫はすっかりあの男が気に入ってしまった、これから当分毎日来てくれ、もう医者は止める、と云つていたという。六時半に夫は散歩から帰つて来、七時に二人で食事をした。若筍の吸い物、蚕豆の塩うで、きぬさやと高野豆腐の焚き合せ、昨日錦で買って来た材料を婆やが料理したのである。ほかに六十目ほどのヒレ肉のピフテキ。(野菜を主にして脂肪分の濃厚なものは控えるように云われているのだが、夫は私との対抗上毎日缺かさず牛肉の何勺かを摂取している。スキヤキ、ヘット焼、ロースト等々いろいろであるが、半生の血のたれるステーキを最も好んで食べる。嗜好よりは必要のために食べるので、缺かすと不安を覚えるらしい) ステーキは焼き加減がむずかしいので、私がいる時は大概私が焼くのである。「# 魚+ 鱧のつくり」、第4水準2-93-92「子がようよう届いたとみえて、それも膳の上に乗っていた。「これがあるからちよつと飲もうか」ということになって、クルボアジエを運んで来たが、たくさんは飲まなかった。先日私の留守中に敏子と喧嘩をした時に、夫があらかた罎を空にしてし

まっつて、底の方にほんのちよつぱり残っていたのを二人で一杯ずつ乾したのであった。夫はそれからまた二階に上った。十時半に風呂が沸いたことを二階へ知らせた。夫が入浴したあとで私も浴びた。(私は今日は二度目である。さつき大阪で浴びたので、浴びる必要はなかったのであるが、夫に対する体裁上浴びた。今までにもそんなことは何回かあった) 私が寝室にはいった時、夫はすでにベッドにいた。そして私の姿を見るとすぐにフロアスタンドを点じた。(夫は昨今、あの時以外はあまり寝室を明るくすることを好まなくなっていた。それは動脈硬化の結果が眼にも来ていて、周囲の物象がキラキラと二重にも三重にも瞳ひとみに映り、視覚を強く刺戟しげきして眼を開けていられないらしいのである。で、用のない時は薄暗くしておいて、あの時だけ蛍光灯をいっぱいにともす。蛍光灯の数は前より殖ふえているので、その時の明るさはかなりである) 夫は急に明るくなった光の下に私を見出して、驚きの眼をしばだいたいた。なぜかというのに、私は風呂から出ると、ふと思いついて、イヤリングを着けてベッドに上り、わざと夫の方へ背中を向けて、耳朵の裏側を見せるようにして寝たからである。そういうほんのちよつとした行為で、今までしてみせなかったことをしてみせると、夫はすぐに、簡単に興奮するのである。(夫は私を世にも稀なる淫婦であるように云うけれども、私に云わせれば、夫ぐらい絶えず慾望に渴え切っている男はいない。朝から晩まで、どんな時でも夫はいつもあのことばかり考えていて、私の極めて僅わずかばかりの暗示にもたちまち反応を呈すせずにはいない。隙すきを見れば即座に切り返して来るのである) 間もなく私は夫が私のベッドの方へ上つて来、うしろから私を抱きすくめて耳の裏側へ激しい接吻をつづけざまに注ぐのを、眼をつぶったまま許していた。……私はそんな工合にして、今ではどんな意味でも愛しているとは云い得ないこの「

夫」という人に、自分の耳朵をいじくらせることを、決して不愉快には感じなかった。木村に比べると、何という不器用な接吻の仕方であろうと思ひながら、この「夫」の変にくすぐったい舌の感触を、そう一概に気味悪くは感ぜずに、まあ云つてみれば、その気味の悪いところにもおのずから一種の甘みがあるという風に思ひながら、味わうことができたのであった。私は「夫」を心から嫌っているには違ひないが、でもこの男が私のためにこんなにも夢中になっているのを知ると、彼を氣が狂うほど喜きえつ悦させてやることにも興味が持てた。つまり私は、愛情と淫慾とを全く別箇に処理することができるたちなので、一方では夫を疎とつんじながら、何というイヤな男だろうと、彼に嘔吐おうとを催しながら、そういう彼を歓喜の世界へ連れて行つてやることで、自分自身もまたいつの間にかその世界へはいり込んでしまう。最初私は、自分自身は恐ろしく冷静であつて、ただいかにすれば彼をこれ以上悩乱せしめることができようかと、一途いちずにその面白さに惹ひかれ、彼が今にも発狂しそうに喘あえぐさまを意地悪く観察しつつ、自分の技術の巧みさに自分で酔つているのであるが、そうしているうちに、次第に自分も彼と同じように喘ぎ出し、同じように悩乱してしまう。今日も私は、昼間木村と演じた痴戯ちぎの一つ一つを、そのままもう一度夫を相手に演じてみせ、彼と木村とがどういう点でどういふ風に違ちがうかを味わい分けることに興味を感じていたのであつたが、そして昼間の相手と比べて、この男の技わざの拙劣ちやくりやくなのに憐愍れいびんをさえ催していたのであつたが、どういふわけか、そうしているうちに結局私は昼間の場合と同じように興奮してしまつた。そして木村を抱き締めたと同じ力でこの男を強く抱き締め、この男の頸くびに一生懸命しがみ着いた。(ここらが淫婦の淫婦たる所以ゆゑんであると、この男は云うのであろう)私はおよそ何回ぐらい、彼を抱き締め抱き締めしたかは

覚えていない、が、私が何分間かの持続の後に一つの行為を成し遂げた
とたんに、夫の体がにわかにくらくらと弛緩し出して、私の体の上へ崩
れ落ちて来た。私はすぐに異常なことが起つたのを悟った。「あなた」
と私は呼んでみたが、彼はロレツの廻らない無意味な声を出すのみで、
生ぬるい液体がたらたらと私の頬を濡らした。彼が口を開けて涎を滴ら
しているのであった。……

四月十八日。……こういうことが起つた際の心得として、かねて児
玉さんから聞かされていた事柄を、私は即座に思い出した。私は彼の下
に壓し潰されていた私の体を、静かに外へ引きずり出した。(彼の体は
弛緩してから急に体重が増したように、重くどっしりとのしかかってい
た。私は彼の頭の部分をできるだけ動揺させないようにしながら、彼の
顔の下にある私の顔を、骨を折ってゆっくりと引き退けた。いや、その
前に、彼の眼鏡が邪魔になるので、それを第一に取り外した。その時の、
眼を半眼に見開いた、顔面筋肉がすっかり弛んだ「眼鏡のない顔」の気
味悪さといったらなかつた)私は自分だけ寝台を下りて、俯向きに倒れ
ている彼を、注意深く、極めて徐々に仰向きの位置に直した。心持頭部
を高く支えておくために、枕やクシヨンを上半身の下に入れてやった。
眼鏡のほかには体じゅうに一絲をも纏っていないが、(私もその時
までイヤリングのほかには何も身に着けていなかった)安静が絶対条件
であることを慮つて、やはり裸のままにして、その上から寝間着をそつ
と被せておいた。全身の左半分に麻痺が来ていることが分つた。
時間を知つておこうと思つて、棚の上の置時計に眼を遣つた。午前一
時三分であつた。気が付いて螢光燈を消し、ナイトテーブルの小さいス
タンドだけを点して、シェードの上に布を被せた。関田町と児玉先生と

にすぐ来てくれるように電話し、敏子には途中氷屋を起して氷を二貫目買って来ることを命じた。(私はかなり落ち着いているつもりであったが、受話器を持つ手がふるえていた)約四十分後に敏子が来た。私が台所で氷嚢や氷枕を捜していると、彼女は氷を提げてはいつて来て、それを走りの板の上に置き、私がどんな表情をしているかを、光る眼で素早く見て取ってから、そ知らぬ風をして氷を割り出した。私は彼女にパパの様子を手短かに話した。彼女は顔色一つ変えず、今さら驚くには当らないと云わぬばかりに「ふん、ふん」と頷いて、氷を割る作業をつづけた。それから二人で寝室へ行き、麻痺の側と反対の側を特に冷やすように氷嚢と氷枕を当てた。二人とも必要以外の言葉は一言も交えなかった。互いに顔を見ようともしなかった。見るのを避けるようにしていた。

二時に児玉さんが来た。私は敏子だけを枕元にいさせて、病室の外で児玉さんを迎え、夫がいかなる状態において発病したかを、敏子には云わずにおいた事柄を、ざつと話した。またも私は顔を赧くした。児玉さんの診察はなかなか入念で慎重であった。「懐中電燈を貸して下さい」と云って、瞳孔を照らして対光反射の検査をし、「何か箸の棒のようなものはありませんか」と云った。敏子が台所から割箸を持って来た。「ちよつとの間部屋を明るくして下さい」と、螢光燈を点じさせた。児玉さんは、病人の右の足の蹠と左の足の蹠の表面を、その棒の先で踵から爪先へソロソロと数回擦り上げた。(バビンスキー反射というのだと、あとで児玉さんが教えてくれた。棒で擦り上げてみて、どちらかの側の足の趾が反射的に反りかえる場合には、その反対の側に脳溢血があったものと認められる。御主人はどこか右側の脳の一部が切れたものと思わなければなりませんなど、いうことであつた)次に児玉さんは、病人

が着ていた掛布団を剥ぎ、病人の上に被せてあつた寝間着を、下腹の辺まで捲り上げた。(夫が素裸で臥ていたことに、その時始めて兎玉さんと敏子が心付いた。螢光燈の明るさの下で夫の下半身が露出されたので、二人はハツとしたらしいが、私の方が一層きまりが悪かつた。私は自分がつい一時間前まで、この人のこの体を自分の体の上に乗せていたということが、何だか信じられない気がした。私はしばしば自分の素裸の体をこの人に見られ、何十回となく写真にまで撮られていたのであるが、自分は彼の素裸の体を、こういう角度で全身像の形においてしげしげと観察したことはない。しようと思えばできたのであるが、今まで努めてそうすることを避けていた。彼が裸でいる時はできるだけぴったり寄り添つて抱き着くようにし、全身像が見えないようにした。彼は私の各部分々々について、恐らくは毛孔の数まで調べ尽していたらしいが、私は彼の体の恰好については、木村のそれを知り尽しているようには知っていなかつたし、知りたくなかつた。知れば一層嫌いになることが豫想されていたからであつた。私はこんな貧弱な体の人と寝ていたのかと、不思議に感じられた。私のことをガニ股だと云うが、彼のガニ股は私どころの段ではないことが、こういう姿勢で臥かしてみると、改めて合点された)それから兎玉さんは、病人の左右の脚を一尺五六寸ほどの間隔に開いて、擧丸がよく見えるようにした。そして件の箸の棒をもつて、擧丸の根元の両側の皮膚の上を、またさっきのように擦つた。(擧丸を吊つている筋肉の反射を見るのだということ、あとで説明して貰つた)二度も三度も、代る代る両側を擦つた。右の擧丸はゆっくりと鮑が蠢めくように上り下りの運動をするが、左の擧丸はあまり運動する様子がなかつた。(私も敏子も眼の持つて行き場に困つた。敏子はとうとう出て行つてしまった)次に体温、血圧の検査をした。体温は普通。血圧は百九十

餘。これは出血の結果幾分低下したものと思われるとのことであった。

児玉さんは一時間半以上もベッドの側の椅子いすに掛けて、経過を見守っていてくれた。その間に腕の静脈から血を一〇〇グラム抜き取った。濃厚ぶとつとつ葡萄糖五〇プロにネオフィリン、ビタミンB1、ビタミンK等を注射した。「午後にもた伺いますが、相馬先生に一度お出でを願った方がよござんすな」ということであつたが、云われないでも私はそうするつもりでいた。「親戚しんせきに知らせる必要があるでしょうか」と云うと、「もう少し様子を見てからでよいでしょう」と云う。児玉さんが去つたのはかれこれ午前四時。送り出す時、至急看護婦を寄越よこしてくれるように頼んだ。

午前七時、婆やが来たので、敏子が午後にもた来ると云つて、いったん関田町に帰った。

敏子の出て行くのを待つて木村の宿へ電話する。詳細に容態を知らせる。今のところ見舞に来ることは差控えた方がよい旨を告げる。気が済まないからちよつとでも行かしてほしいと云う。が、病人は半身不随で言語は自由を缺いているけれども、意識は全然昏濁しているといふのでもないらしい、だから木村の顔を見て興奮する恐れがないとは云えない由を語る。では病室へは通らない、玄関まででも行かしてくれと云う。九時頃から夫がいびき鼾を掻き始める。夫は常に鼾を掻く癖があるのだが、今日のは特別に物凄ものすごい鼾で、いつもものと違うように思う。それまでは朦もろ朧たる意識が働いていたように見えたが、いつの間にか昏睡状態に入つたらしいのである。また木村に電話して、この工合なら病室へ通つても差支えないと云つてやる。

十一時頃児玉氏より電話。相馬博士と連絡が取れた、午後二時そちらへ往診に見えられる由であるから、私も立ち合いますと云う。

午後零時半過ぎに木村が来る。月曜日の授業の合間に抜けて来たのである。病室に通り、三十分ほど枕元に侍坐する。私も傍に付き添う。木村は椅子に掛け、私は夫の寝台（私の寝台には病人が寝ているので）に腰掛けて、二三のことを話し合う。病人の軀がこの時目立って雷のごくになる。（ほんとうの軀かしら？ と、ふとそんな気がする。私の顔に危惧の色が浮かんだのを見て、木村も同じことを考えたらしかったが、もちろん二人とも口に出しては云わなかった）午後一時木村辞去。看護婦が来る。小池という可愛らしい二十四五歳の婦人。敏子も来る。私はようやく手が空いたので、この間に食事する。昨夜以来何も食べていなかったのである。

二時相馬博士来診。児玉さんも見える。今朝と容態の変ったところは、昏睡状態に陥ったことと、八度二分ほど発熱したことである。博士の所見も大体児玉さんと違わないらしい。博士もバビンスキー反射を検べたが、睾丸の両側を擦る検査（提睾筋反射という由）はしなかった。瀉血もあまりしない方がよいというのが、博士の意見らしかった。その他こまごまと専門語で児玉さんに注意が与えられる。

博士と児玉さんが去ったあとで、今日も指壓師が治療に見えた。敏子が出て、「あなたの治療のお蔭で父はこういう結果になりました」と皮肉交りに云い、玄関から追り返す。さっき児玉さんが、「二時間以上もそんな過激な指壓をしたのは良くなかったですな、あるいはそれが直接原因になったかも知れませんか」と云ったのを、敏子も聞いていたからである。（児玉さんは真の原因が他にあることを知っていて、いささか私を慰めるつもりで、責任を指壓に持って行ったのかも知れない）「私があの人を紹介したのが悪いのでございます、えらいことをいたしました」と婆やがしきりに詫びを云う。

三時過ぎに、「ママ、少し横にならばったらどう」と敏子が云うので、しばらく睡眠を取らして貰うことにする。ただし、寝室には病人が寝ているし、敏子や看護婦が詰めているし、茶の間もこの際は出入りが多い。敏子の部屋が空いているけれども、彼女は自分が使わない時でも他人に使われることを嫌い、襖ふすまや本箱やデスクの抽出等ひきだしに悉く鍵かぎを掛けているので、私もめつたにはいつたことがないのである。で、二階の書齋を貸して貰うことにして、板敷の床に夜具布団を敷いて寝る。これから当分、看護婦と私がときどき交代でここに寝ることになりそうである。しかし床にははいつてみたが、とうてい寝られそうもないので諦あきらめる。それよりも昨日以来の出来事を書き留めておきたかったので、この間に寝ながら日記をしたためる。(先刻二階へ上る時、そのつもりで矢立と日記帳とを敏子に感づかれないうちに持って上って来たのである) 一時間半を費して十七日の朝から今までの出来事を記し終る。そして日記帳を書棚の蔭に隠し、今眼が覚めたようにして階下に下りる。五時少し前である。病室に行ってみると、病人が昏睡から覚めた様子である。折々うつすらと眼を開けて周囲を見ている。もう二十分ほど前からのことであるという。今朝の九時からおおよそ七時間餘ねむ睡りつづけたわけである。二十四時間以上昏睡がつづく危険なように聞いておりますが、よいあんばいでしたございましたと小池看護婦が云う。だが左半身の動作は依然として自由を缺いているようである。

五時半頃、病人が口をもぐもぐさせる。何かものを云いたげである。

(発音不明瞭ふめいりょうではあるが、今晝発病の直後よりはやや聴きき取れるようになった気がする) 右の手を少し動かして、腹の下の方を指し示す。小便がしたいのであろうと察し、澗瓶しびんを当ててみるが排尿しない。しきりに懊じれているように見える。「おしっこですか」と云うと頷くので、また

当ててみるが出ない。長時間尿が溜っているの、下腹部が張って苦しいはずなのであるが、膀胱ぼうこうが麻痺して、出て来ないのであるらしいことが分る。児玉さんに電話で指図を仰ぎ、カテーテルを取り寄せて小池さんが導尿してくれる。多量の排尿を見る。

七時、牛乳と果汁少量を吸い口をもつて病人に与える。

十時半頃婆やが自分の家に帰る。家庭の事情でどうしても泊るわけには行かないのだそうで、その時刻まで働いてくれたのである。敏子が私はどうしましょうと云う。泊っても差支えないのだが、私が泊ってはかえって都合の悪いこともありはしないでしょうか、という意味が含まれているものと察せられる。泊ってくれてもどちらでもよい、病人は小康を保っているようだから、別に心配はないようである、急変があれば知らせて上げててもよい、と私は答える。「そうね」と云って、彼女も十一時に関田町に去る。

病人はウトウトしているが、あまり熟睡はしていないらしい。

四月十九日。……午前零時、小池さんと二人で無言のまま病室にいる。病人に明りが射さないようにして、ランプの蔭で新聞雑誌等を読んで時間を消す。小池さんに二階で少しお休みなさいと勧めても寝ようとしめない。五時頃夜が明けかかってからようやくやく寝に行く。

雨戸の隙間から日が射して来たので、病人はなおさら安眠が得られないらしい。いつの間にか眼をぼんやり開けて、顔を私の方に向けている。眼で私を捜しているようでもある。私が側の椅子に掛けているのが見えないのか、見えるのに見えないふりをしているのか、よく分らない。口を動かして何か云っている。ほかの言葉は不明瞭で聴き分けられないが、一箇所だけ聴き分けられる。ような気がする。気のせいかも知れな

いが、き　　む　　ら、と云っているように思える。そのあとは口をあぶあぶ云わせるだけであるが、き　　む　　ら、のところは、どうもそうに違いないように聞える。（ほかの部分も、もつと明瞭に云おうと思えば云えるのかも知れない。照れ隠しにあぶあぶとごまかしているのかも知れない）二三度それを繰り返して云ってから、また黙って眼を潰つぶってしまった。………

七時頃婆やが、少し後おくれて敏子が来る。八時頃小池さんが起きて来る。八時半病人に朝食を取らせる。ゆるい粥かゆを一碗、卵黄、林檎汁等。私さしが匙すくで掬すくって食べさせる。病人は小池さんよりも、なるべく私に身まわの周りの世話をして貰もらいたがっている風が見える。

十時過ぎに尿意を催す。搜瓶を当ててみるがやはり出ない。小池さんが導尿しようとする、それを嫌うらしく、カテーテルをあっちへ持つて行けという風な手つきをする。仕方なくまた搜瓶を当ててみる。十数分経過しても依然として出て来ない。ひどく苛いら々いらする様子である。「気が持がお悪いでしょうけれども、これで出しておしまいになった方がようございます。ね、そうなさいませ、一遍にお楽になりますよ」と、小池さんが子供を諭さとすように云って、またカテーテルを持ち出す。病人は何か分からないことを繰り返して云い、手で何ごとをか示そうとすることくである。小池さん、敏子、私、三人でしきりに聞いてみる。結局、「カテーテルを使うならお前が使ってくれ、敏子と看護婦はあっちへ行っている」ということを、私に向って話すのであるらしい。カテーテルは看護婦でなければ扱あうことができないのであるから、小池さんに導尿して貰もらわなければならぬことを、敏子と二人で辛かろうじて納得させる。

正午病人が昼食を取る。大体朝と同じような食事であるが、食慾はかなりあるように思える。

午後零時半木村が来る。昏睡から覚めたこと、意識が少しずつ回復しつつあるらしいこと、木村という名を口にしていたように思えたこと、等々を告げ、今日は玄関で帰って貰う。

午後一時児玉さん来診。経過良好、まだ油断はならないがこの分なら順調であると云う。血圧最高が一六五、最低一一〇。体温三七度二分に低下。今日もバピンスキー反射と提舉筋反射の検査をする。(提舉筋検査の時、病人がどんな顔をするかと思つて懸念^{けねん}していたが、どんよりとした、無感覚な瞳を虚空に向けて、されるがままにされていた)葡萄糖、ネオフィリン、ビタミン等を静注する。

発病のことは努めて人に知らせないようにしていたのだが、追い追いつ学校方面に知れてしまい、見舞客、電話の問い合せ等が午後からときどきある。果物籠^{くだものかご}、花束等を方々から貰う。関田町のマダムが見え、自分の夫と同病であることを知つて大いに同情してくれる。そして、これも家の庭に咲いたのですと云つてライラックの花を置いて行く。敏子がそれを瓶^{びん}に「#「挿」でつくりの縦棒が下に突き抜けている、第^ト水準2-13-28」して病室に運び、「パパ、マダムが庭のライラックを切つて来て下すつたのよ」と云つて、病人によく見えるような位置に台を持って来て据^すえる。貰い物の果物の中に病人の好きな伊豫柑^{いよかん}があつたので、ミクサーで絞^{しぼ}つて与える。

三時、敏子と小池さんに頼んでおいて二階に上り、日記をつけてから睡眠を取る。今日はさすがに睡気が溜っていたので、約三時間ぐっすりと眠る。……敏子今夜は夕飯後間もなく、午後八時に引き上げる。婆や九時半頃に去る。……

四月二十日。……午前一時、小池さんが二階へ寝に行く。そのあと

私一人病室に付き添う。病人は宵からうつらうつらしていたようであったが、小池さんが去ってから十数分後、どうも眼を覚ましているらしい。けはいを何となく感じる。薄暗い蔭の方に臥ているので、はっきり分らないのであるが、微かな身じろぎとともに口をムニヤムニヤさせたような気がしたからである。そうつと覗き込んでみると、推察の通り、いつの間にか眼を開けている。その眼は私の顔を越えて、もつと向うの方を見ている。あの、敏子が活けたライラックの花、病人の眼はそこに注がれているらしい。スタンドの光線を遮蔽して、室内のほんの一部だけを、辛うじて新聞が読める程度に明るくしてあるのだが、その明るい光の圏の端の方に、ライラックが仄白く匂っている、その白い影を、見るともなく視詰めて何か考えているような眼つきである。私は何がなしにハツとした。昨日、敏子があの花を持って来て、「マダムが庭に咲いていたのを切つて来て下さったのよ」と云った時、今そんなことを聞かせないでもよいのにと、敏子はどんなつもりで云ったのか知れないが、私は思ったのであった。あの時多分病人はあの言葉を聴き取ったであろう。聴き取らなかつたとしても、あの花を見ればあの木が植わっている関田町の庭を思い出したであろう。そしてあの家の離れ座敷を思い出し、あそこで起つた過去の夜の出来事の数々を思い出したであろう。そう思うのは思い過しかも知れないが、私は病人の眼を見ると、何かそのことと關聯のある妄想が、あの空虚な瞳の奥に浮かんでいるのではあるまいか、という気がした。私は慌ててスタンドの明りをその花から外らした。……

……午前七時ライラックの花瓶を病室から運び出し、ガラスの花器に「#「挿」でつくりの縦棒が下に突き抜けている、第4水準2-13-2
∞」した薔薇に置き換える。……

……午後一時児玉さん来診。体温六度八分に低下。血圧は再び上る傾向を示す、最高一八五、最低一四〇。そのためネオヒポトニン注射。今日も鞏丸の検査がある。玄関まで送って出て児玉さんと話す。膀胱の麻痺がつづいていて、今朝も小池さんが導尿したこと、導尿のたびごとに病人が慄れること、ちよつとしたことが神経に触って興奮する様子が見えること、口と手足が思うように利かないために一層イライラするらしいこと、等々について相談する。鎮静と安眠のためルミナルを用いることにする。……

……敏子今日は午前中は見えず、夕刻五時頃から来る。……十時頃より病人の鼾が聞え始める。これは一昨日の異様な鼾と違い、いつもの安眠の鼾らしい。先刻夕食後注射したルミナルが利いて来たのだとみえる。敏子寝顔を覗いてみて、「よいあんばいにすやすや休んではらしいわ」と云い、間もなく去る。相前後して婆やも去る。小池さんを二階へ寝に行かせる。十一時近く電話が鳴る。出てみると木村である。

「こんな時刻に失礼ですが」と云う。(今なら私が一人でいることを、敏子が教えたのではあるまいか)その後の御容態を聞かして下さいと云う。経過を話して、今夜は睡眠剤の注射が利き、鼾を掻いて熟睡している由を告げる。「ちよつと今から伺ってお顔を見るわけに行きませんか」と云う。「お顔」とは誰のお顔の意味なのかと思う。「来たら私が裏口から外へ出るまで、庭で待っていてほしい。玄関のベルを押してはいけない。出て行かなかつたら、都合が悪いのだと察して帰ってほしい」と、電話口でできるだけ小声で答える。十五分後、微かな足音が庭に聞える。病人は依然安らかに鼾ごえを立てている。彼を裏口から上げて女中部屋で三十分ほど話す。……病室へ戻って来ても、まだ鼾ごえが続いていた。……

四月二十一日。……午後一時児玉さん来診。血圧最高一八〇、最低一三六。昨日よりまた少し下ったけれどもなお安心とは云えない。せめて最高が一七〇台に下り、最低との開きが五十以上にならなければと云われる。体温は六度五分でようやく平熱になる。尿も今朝来澆瓶を用い辛うじて排尿するようになる。食慾は相当、持って行けば何でも受け付けるけれども、今のところやや固い目の流動物のみを与える。……

二時、病人を小池さんに頼んで二階に上る。日記をつけてから五時まで眠る。病室へ下りて来てみると、敏子が来ている。五時半、夕食前三十分に今日もルミナールを射す。薬が利いて来るのは四五時間後であるから、当分毎日この時刻に睡眠剤を射して夜間の安眠を謀^{はか}った方がよいであろうという、児玉さんの意見があつたからである。ただし、小池さんに云い含めて、病人には睡眠剤であることを知らせず、血圧降下剤だということにしておく。……

……六時、夕食の膳がナイトテーブルに運ばれて来たのを見、病人が何か云いたいことがあるらしく口を動かす。二度も三度も繰り返して一つことを云う。何のことが聞き取れない。私がスプーンで粥を掬って持って行くと、その手を抑^{おさ}えるようにしてなおも云う。私の給仕が気に入らないのかと思つて、敏子が代つてみ、小池さんが代つてみるが、給仕のことではないらしい。そのうちに、病人の云っていることがだんだん私に分つて来る。病人はさつきから、びーふーてーき、びーふーてーき、と云っているのである。突飛のようであるが、どうもそう云っているに違いない。ピフテキ、ピフテキ、そう云つて、訴えるがごとき眼つきでチラと私を見、すぐまた眼を潰る。……私には病人が何を訴えつつあるのかほぼ想像することができたが、他の二人には分

らなかったことであろう。(敏子には分ったかも知れない)私は二人に気づかれないように、病人に向つて微かに首を振つて見せ、「今そんなことを思つてはいけない、当分の間我慢なさい」という意味を匂わせたつもりであるが、病人にそれが読めたかどうか。でも病人は、それきりもうそのことを云わず、おとなしく口を開けて私がさし出す粥をすすつた。……

八時、敏子が去り、九時、婆やが去る。十時、病人が軒を掻いて熟睡し始める。小池さんを二階へ行かせる。十一時、庭に足音が聞える。裏口から女中部屋へ通す。十二時、彼去る。軒ごえがなお続いている。

四月二十二日。……病状には格別の変化もない。血圧昨日よりまた少し高い。睡眠剤で夜間は安眠するらしいけれども、昼間はとかくもやもやしたものが頭に浮かんで来るらしく、ややもすればイライラする様子が見える。一日十二時間以上睡眠を取らせることが必要であると、児玉さんは云うのであるが、正味熟睡しているのは六七時間に過ぎないであろう、その他の時間は、ウトウトしているようにはみえるが、ほんとうに寝ているのかどうかアテにならない。(大体において、軒を掻いていない時は眠りの浅い時、せいぜい半睡半醒の状態にいる時であると、私は長年の経験によつて判断している。いや、その軒さえも、今のは二世の軒ではないかと凝い得る場合がないではない)児玉さんの許可を得て、明日からルミナールを日に二回、午前中に一回と、午後一回と用いることにする。……

……いつもの時刻に敏子が去り、婆やが去る。十時に病人の軒が始まる。十一時に庭に足音が聞える。……

四月二十三日。……発病以来今日で一週間である。午前九時、朝食後、小池さんが膳を台所へ下げに行き、私と二人きりになった隙を見て病人が唇を動かす。にーき、にーき、と云っている。昨日の、びーふーてーき、に比べて今日はよほど発音がしっかりしている。にーき、にーき、日記のことが気にかかるのであるらしい。「日記をお附けに
なりたいの？ でもまだ無理よ」と云うと、「ちがう」と云って首を振る。「違うの？ 日記のことと違うの？」と云うと、「お前の日記
と云う。「私の日記？」と云うと、頷いて、「お前は お前は日記
を どうしている？」と云う。「私は昔から日記なんか付けて
いません、そんなこと、あなた知ってはるやありませんか」と、私はわざと意地悪く空とぼけてやる。すると口辺に力のない薄笑いを浮かべて、「あゝ、そうだったか、分ったよ」という風に頷いている。病人が微かながらも笑顔を見せたのは始めてであるが、ちよつと意味の分らない、謎のような笑いである。小池さんは病人の膳を台所へ運んだついでに茶の間で自分の食事を済ませ、十時頃病室に戻る。そして、黙って病人の腕ヘルミナルを射そうとする。「何の注射？」と、病人が尋ねる。午前中のこの時刻に注射されたことがないので、不審を抱いたらしいのである。「まだ血圧が少しお高いようですから、下げる注射をするのでございます」と、小池さんが答える。

午後一時児玉さん来診。二時半頃から病人が軀を掻き出したのを見て、私は二階へ上る。が、五時に下りて来てみると、もう軀ごえが止んでい
る。小池さんに聞くと、ほんとうに熟睡したのは一時間足らずで、それから夢うつつの境を彷徨しつつかあるように見えたと云う。やはり睡眠剤を飲んでも夜間のように寝られないらしい。夕食後二回目の注射をする。……

きつちり十一時、庭に足音を聞く。……………

四月二十四日。…………… 発病以来今日が二度目の日曜である。朝から見舞客が二三人見える。いずれも上らずに帰って貰う。…………… 児玉さん本日は来診せず。病人は格別の変化なし。二時頃から敏子が来る。彼女はこのところ毎日夕刻から来て、二三時間病室に詰めるようにしていたのに、今日は珍しく昼間から出て来た。父が軒ごえを立てている傍で、「今日はお客様が多くはないかと思って」と、そう云って私の顔色を見ている。私が何とも云わないでいると、「ママ、買い物溜っていはしないの。…………… たまの日曜に外の空気を吸うて来やはたらどう？」などと云ったりしている。いったい彼女は自分一人だけの考えで云っているのか、彼から頼まれているのであるか。…………… 彼にそんな気があったのなら、昨夜私に匂わしそうなものだけでも、何もそんな話は出なかつた。…………… 直接私には云い出しにくいので、敏子に云わせたのであろうか。それとも敏子が勝手に気を廻しているのであろうか。…………… ふつと私は、ちょうど今、この時刻に、あの大阪の宿で私の来るのを心待ちにしている彼の様子を思い描いた。…………… ひよつとしたら、ほんとうにそんなことになっているのかも知れない、そんな妄想まで浮かんで来たが、でもそんなことがあるはずはないと思って打ち消す。打ち消しても打ち消しても、もし待っていたらどうしよう、と、また妄想が湧いて来る。が、どう考えても今日の私はあそこまで出かける時間はない、そんなに長く家を空けるわけには行かない、せめてこの次の日曜ぐらいにならなければ、などと思う。…………… しかし私は、ほかにいささか気にかかっていたことがあるので、「ではちよつと、錦辺まで買い物に行つて来る。一時間以内に帰るわ」と、敏子に断って、三時過ぎに家を出た。

そして大急ぎでタキシードを拾って御幸町錦小路まで飛ばした。私はまず、食料品の買い出しに来たという証拠に、錦の市場で麩だの湯葉だの野菜物だのを買った。それから三条寺町まで歩いて、いつもの紙屋で大判の雁皮を十枚と表紙用の厚紙を一枚買い、それを私の日記帳の大きさに裁つて貰い、皺にならないように巧く包装して貰って、買い物袋の野菜物の下に入れた。それから河原町通りでタキシードを拾って、いや、八百屋の店で彼を電話口へ呼び出したことも書き洩らしてはならない。「いゝえ、今日はどこにも出かけず、家にいました」と彼は云った。事によれば誘いがかりはしないかと思っていたらしい口ぶりでもあったが、一二分話しただけであつた。四時少し過ぎに帰宅した。(一時間より多少過ぎていたかも知れない)私は玄関の傘立ての蔭に雁皮の包みを隠し、買い物袋は台所の婆やに渡した。……病人はまだ寝ているようにには見えただけども、躰は止んでいた。……

……私が気にかかつていたことというのは、昨日病人が「お前は日記をどうしている」と云つた、あの言葉なのである。私が日記をつけていることを、表向きは知らない体を装っていたはずの夫が、どうして突然あんなことを云い出したのか。頭が混乱していたために知らないはずになつていたことをウツカリ忘れたのであろうか。それとも、「もう僕は知らないふりをする必要を認めなくなつた」と云うのであろうか。私が咄嗟の返辞に困つて、「日記なんか付けていない」と答えると、「分つたよ」と云つて変な笑い方をしたのは、「空惚けるのは止せ」という意味だつたのであろうか。何にしても、夫は彼の発病以後も私が日記を付けることを継続しつつあるかどうか、それを知りたいのに違ひなく、継続しているのなら、何とかしてそれを読ませて貰いたいのに違ひあるまい。盗み読みができなくなつた彼としては、おおびらに私の許可

を求めたい下心があったためにあんな言葉を洩らしたのだと、私は推測せざるを得ない。とすると、彼から公然とそういう申し出があった場合のことを、早速考えておかねばならない。この正月から四月十六日に至るまでの私の日記は、もし求められれば、私はいつでも彼の前に取り出して見せるであろう。しかし十七日以後の日記があることは、決して彼に知らせてはならない。私は彼に云うであろう、「この帳面は始終あなたが盗み読みしていたのですから、隠しても仕方ありませんが、今さら見せるまでもありますまい。それでも見たいと云うのならいくらでも見て貰いますが、見れば分る通り、十六日で日記は終わっているのです。あなたが病気になってからは、私は看護に忙しくて日記どころではなかつたし、書くような材料もありませんでした」と。で、私は彼に十七日以後空白になっている日記帳を開けて見せ、彼を安心させなければならぬ。私が雁皮を買って来たのは、十六日までの分と、十七日以後の分と、日記帳を二冊に分けて製本し直すためなのである。……

…… 昼寝の時間に外出したので、帰宅後五時から一時間半ほど二階に上る。六時半に下りて来る時に、日記帳を持って下り、茶の間の用筆筒の抽出に入れておく。敏子、夕食後八時に去る。十時小池さんを二階へ行かせる。十一時、庭に音が聞える。……

四月二十五日。…… 午前零時、送り出して勝手口の戸締りをする。それから約一時間、病室にいて軒ごえに耳を澄ます。熟睡しているのを見届けて茶の間に入り、日記帳の製本に取りかかる。二冊に分けて、十六日までの分は用筆筒の抽出に収め、十七日以後の分は二階へ持って行って書棚に隠す。この仕事に一時間を費す。二時過ぎ頃から病室に戻る。病人はずっと眠りつづけている。……

午後一時、児玉さん来診。格別の変化なし。このところ血圧も一八〇より一九〇内外を上下している。もう少し下ってくれないものかと、児玉さんは首をかしげる。昼間は依然十分な安眠が得られないらしい。……

……十一時、庭に音が聞える。……

四月二十八日。……十一時、庭に……

四月二十九日。……十一時、庭に……

四月三十日。……午後一時、児玉さん来診。……来週早々、今一

度相馬先生に見てお貰いになった方がよござんすなと云う。……

……十一時、庭に……

五月一日。……発病以来三度目の日曜である。……敏子、この前

の日曜と同じ時刻、午後二時過ぎに現われる。そうではないかと豫期していた通りである。父の寢息を確かめるような風をしてから、「買い物かたがた息抜きに散歩していらっしやい」と、小声ですすめる。「どうしようかしら」と、私が躊躇ちゅうちゆしていると、「パパは大丈夫、今しがた寝やはったところよ。……行ってらっしやいよママ。今日は関田町で昼間から風呂が沸いているのよ、ついでに寄って風呂を貰っていらっしやい」と云う。何かわけがあることと察し、「ではちよつと一二時間」と云って、三時頃に買い物袋を提げて出かける。まっすぐ関田町へ行ってみる。マダムは留守で、木村が離れに一人でいる。先刻敏子から電話があつて、「今日はマダムが和歌山へ行って夜おそくまで不在であるが、

私もこれから病人の所へ出かけるので、済まないけれども二三時間留守番に来ていてほしい。夕刻までには帰って来る」ということで、呼び寄せられたのであるという。風呂は沸いていなかったが、風呂の代りに木村がいたというわけである。……ざっと半月ぶりに少しゆっくり話し合うことができたけれども、やはり何となくセカセカして落ち着いた気分にはなれなかった。……彼を残して五時に関田町を出て、時間がないので、病人が眼を覚ましはしないかと心配なので、大急ぎで近所の市場で買い物をして帰宅する。「お帰り。早かったわね」と、敏子が云う。「パパは」と云うと、「今日は珍しくよう寝たはる。もう三時間以上になるわ」と云う。なるほど凄^{すこ}い軒^{すこ}ごえである。「お嬢さんにお願^{ねが}いして、お風呂へ行^いって参^まりました」と、小池さんが云う。湯上の色つやのよい顔をてかてかさせている。あ、そうだったか、小池さんは銭湯へ行^いって来たのか、私は何がなしにハツとする。何かしら敏子が作為を施^{おこな}いたらしいことを感じる。もつとも、夫が臥床^{がしやう}してからは、家の風呂を沸かしたことは二三度しかない。私も、小池さんも、婆^{ばあ}やも、大概隔日か三日置きぐらいに、昼間のうちに銭湯へ浴びに行くことにしているのであるし、今日あたりは小池さんが行く番であるから、行^いって来るのに不思議はない。が、敏子はそれを計算に入れて、病人と自分と二人きりになるように、私を外へ出したのではあるまいか。ついウツカリして、そういう場合が生じ得ることに、私は考え及ばなかった。いつもなら当然気が付くのであるが、（小池さんの風呂は長湯で、五六十分はかかるということも、私は知っていたはずであるが）「関田町で風呂が沸いている」と云われて、さてはと胸をときめかせて思慮を失^うつたのである。私は「しまった」と思いながら、二人に病人を預^{あづか}けておいて、「いつもの午睡をするために」二階へ上^あった。

すぐに私は、書棚の蔭に隠してある日記帳を取り出して、念のために調べてみたが、セロファンテープで封をしておけばよかつたのであるが、まさかそこまで用心深くはしなかつたので、盗み読まれていたにしても、証拠を見付けようはなかつた。

いや、やっぱり自分の疑心暗鬼に過ぎないのだ、と、私はそうも思い直してみた。自分は少し気を廻し過ぎた、日記帳を二つに分けたこと、後の部分が二階の書棚に隠してあること、等々を、彼らがどうして知るはずがあるう。私はそう思つて一とまず安心し、その時はそれで済んだのであつたが、……午後八時、敏子が関田町へ去つてしまつたと、またそのことが気にかかつた。私は台所へ行つて婆やに聞いてみた。今日の午後、私が外出したあとで誰かが二階の書齋へ上りはしなかつたか。すると意外にも、「はあ、お嬢さんがお上りになりました」と云う。婆やの話だと、私が出かけてから十五分ほどたつて小池さんが銭湯へ出かけた、それから間もなく敏子が二階へ上つて行つたが、二三分で下りて来て病室に戻り、「何か旦那様とお話しになつていらつしやる御様子でした」と云う。でも病人は軒を掻いていたはずだが、と云うと、「その軒ごえがぱったり止んでいました」と云う。そして敏子は「旦那様としばらく話をなすつてからもう一度二階へ上り、またすぐ下りておいでになつた、そのあとで小池さんが銭湯から戻つて来られました」と云う。でも、夕刻私が帰つて来た時には病人の軒ごえが聞えていたのに、と云うと、「奥さんのお留守中は止んでいて、お帰りになる少し前からまた始まつていたのです」と云う。

どうやら私の疑心暗鬼が當つており、思い過しが思い過しでなかつたことが分りかけて来たのであるが、それでも私にはまだ腑ふに落ちかねることがあつた。ここで一往敏子の今日の行動を順に並べてみると、午後三時、口実を設けて私を外へ出してしまふ。次に小池さんを風呂へ

行かせる。次に病人が自ら眼を覚まして敏子に告げたか、敏子から病人に働きかけたか、そのところは不明であるが、彼女は私の日記帳が茶の間の用筆筒に入れてあることを知り、それを捜し出して病人の枕元へ持って来る。病人が、この帳面は四月十六日で終っているが、十七日以後の分も必ずどこかに秘してあるに違いない、己おれが読みたいのはその方であるから捜してくれと云う。そこで彼女は二階の書棚を探ってみつけ出す。次にそれを病室へ持参して病人に見せる。あるいは読んで聞かせる。次に二階へ持って上つて元の場所に収めて来る。小池さんが戻つて来る。病人が再び安眠を装う。五時過ぎ、私が帰つて来る。と、

こういう風になるのであるが、これだけのことが私の外出中の二三時間に、こうすらすらと運ぶということは、ちよつと普通には考えられない。そこで、思い出したのは、私はこの前の日曜（四月二十四日）にも、敏子にすすめられて午後に出したのであった。とすると、敏子のこの仕事は、多分あの日曜日から取りかかっていたのではないか。すでに病人は二十三日の土曜の朝、私と二人きりである時に、「にーき、にーき」と口走つて、私の日記を読みたがっている意を明らかにした。それなら、二十四日の午後、私がいなくなつた留守に、敏子と小池さんのいる前（その時も小池さんは銭湯へ行っていたのかも知れないが、婆やは確かな記憶がないと云う）でも、同じ言葉を口走らなかつたと誰が云えよう。

病人は、私に訴えても取り合つてくれないので、敏子に訴えた。

それは最も有り得ることだと云わなければならぬ。私は敏子には、私の日記の存在をかつて知らした覚えはない。しかし木村を通してでも、またそうでなくても、何かの折々に感じていたことであろうし、まして病人が口走つたとすれば、直ちにピンと来たであろう。「ヨウダンス、」と、病人が茶の間の方を指さす。敏子が茶の間へ行つて用筆筒の

抽出を捜してみる、が、もはや日記帳はそこに置いてないことが知れる。「分った、きつと二階だわ」と、敏子が云つて二階を捜す。そんな場面が私には想像される。とにかくそういう風にして、まずこの前の日曜に十七日以後も日記を付けていることが知れる。そして今日の日曜に、日記帳が用心深く二冊に製本し直されており、一冊は二階に、一冊は階下に置かれていたことが分る。それならできないことではない。

さしあたっての私の当惑は、もしこの推定が当たっているとすれば、これから以後の日記をどうしたらよいか、ということであつた。私はいつたん附け始めた日記を、障害に出遇つたからといって、中絶する気にはなれなかつた。そうかといつて、これ以上盗み読まれることは、避けられるだけは避けた方がよい。今日から私は、昼寝の時間に二階で書くことを止めにする。そして深夜、病人と小池さんの寝るのを待つてしたため、某所に隠しておくことにする。……

六月九日。……長い間、私は日記をつけることを怠つていた。去月一日、すなわち病人が第二回目の発作を起して斃れた日の前日をもつて私の日記は終つており、それ以後今日まで三十八日間というもの、私はあとを書き継ぐことを中止していた。それは、病人の突然の死去によつて当分の間いろいろな家事上の雑務が生じ、多忙であつたからでもあるが、彼の死の結果として、さしあたり先を書き継ぐ興味が、といつか、張り合いがなくなつた、といつか、なくなつたからでもある。その「張り合いがなくなつた」という事情は、今日といえども変わっていない。だから私は今後も日記をつけることをしないかも知れない。少くとも、再び日記を始めることにするかどうかは、今のところ未定であると云つ

てよい。が、今年の正月一日以来百二十一日の間毎日書きつづけて来た日記が、あんな風にポツリと切れてしまったままになっているので、あれに一往の結末をつけておく方がよいと思う。日記の体裁の上からいってもそれが必要であると思うし、亡くなつた人と私との性生活の闘争についても、ここらでもう一度振り返つてみて、そのいきさつを追想してみても徒爾ではない。故人が書き遺して行つた日記、分けてもこの正月以来の日記と、私のそれとを仔細に読み比べてみるならば、闘争の跡は歴々と分るのであるが、なお私としては、故人の生前には書き記すことを憚つていた事柄がかなりあるので、最後にその幾分を書き加えて、過去の日記帳に締めくくりをつけたいのである。

病人の死が突然であつたことは今も書いた通りである。後に記すような事情で、正確な時間は分らないのであるが、死んだのは五月二日の午前三時前後ではなかつたかと思う。当時看護婦の小池さんは二階で寝ており、敏子は関田町に去つており、病室には私だけが付き添つていた。しかし私も、午前二時頃病人がいつものように安らかに鼾を掻いているのを見て、密かに病室を抜け出して茶の間に行き、四月三十日の夕刻以後五月一日にかけての出来事を書き留めつつあつた。というのは、私はその前々日、つまり夫の発病以後四月三十日までは、毎日午後の午睡の時間を利用して、二階でそつと、その前日の午後からその日の午後に至る出来事を記すことにしていたのであるが、五月一日の日曜に、はからずも秘密にしていた第二冊目の日記帳が病人や敏子に盗み読まれていた事実を知り、当日はいつもの時間に二階で記すことを止め、以後は深夜の時刻を選んで筆を執り、日記帳の隠匿場所を変更することにきめたのであつた。(変更する場所をどこにしたらよいかについては、すぐには思い当らなかつたので、私は一とまず日記帳を以前の場所に収めて

おいて、その時は二階を下りた。そしてその夜、敏子や婆やが去るのを待って、小池さんが寝に行く少し前に取りに上り、それをふところに入れて下りて来た。そのすぐあとで小池さんが上って行った。私はまだその時も適当な隠し場所を考えつかないで困っていた。今夜じゅうに考えればよいのであるが、已むを得なければ茶の間の押入の天井板を一枚剥がして、その上に「#「挿」でつくりの縦棒が下に突き抜けている、第4水準2-13-28」し込むことにしようか、などと思案していた)で、五月二日の午前二時過ぎ、茶の間にはいつて懐中していた帳面を取り出し、四月三十日の夕刻以後の出来事を記していると、ふと、つい先刻まで聞えていた病人の軀ごえが、いつからか聞えなくなっているのに心づいた。病室と茶の間とは壁一と重しか隔たっていないのであるが、私は書く方に気を取られていたので、それまで知らずにいたのである。私は、「……………今日から私は、昼寝の時間に二階で書くことを止めにする。そして深夜、病人と小池さんの寝るのを待つてしたため、某所に隠しておくことにする。……………」と、ここまで書き終った時に気がついて筆を止め、しばらく隣室に耳を傾けていた。が、それきり声が聞えて来る様子がないので、書きさしの日記帳を卓の上に置き、立って病室に行ってみた。病人は静かに仰向いて、顔を真正面に天井に向けて寝ているようであった。(発病の日に私が眼鏡を外してやつてから、病人は一度も眼鏡を掛けたことがなかった。彼の寝ている時の姿勢は、大体において仰向けであったが、そのために一層、あの「眼鏡のない顔」を見せられる場合が多かった)「ようであつた」というのは、病室ではスタンドのシェードに布を被せて病人に光線が直射せぬようにしていたので、蔭のところに臥ている病人の顔が、急にはハッキリ見定めがたかつたからである。私は椅子に腰かけて一と息つき、薄暗いところにいる病人を見据えたの

であつたが、何か異常に静か過ぎる感じがしたので、シェードの布を上げて病人の顔に露骨な光線があたるようにした。と、病人の眼は半眼に見開かれて、斜めに、寝台の裾すその方の天井てんじょうに注がれたまま、凝然と動かなくなっていた。「死んだのだ」

私はそう思つて傍へ寄り、手に触れてみると、冷たくなつていた。枕元の時計は三時七分を指していた。であるから、五月二日の午前二時数分後から三時七分に至る間において死去した、ということだけが云える。そして恐らく寝ている間に、ほとんど何の苦痛もなく逝つたらしいことは想像できる。私は臆病おくびょうな人間が恐怖を恠こらえて深淵しんえんの底を覗き込むように、「眼鏡のない顔」を数分の間息を凝らして視詰めてから、新婚旅行の夜の記憶がとたんに鮮あざかに蘇生よみがえつた。再び急いでシェードの布を被せたのであつた。

相馬博士も児玉さんも、第二回目の脳溢血の発作がこの病人にこんな早く襲つて来るであろうとは、豫期していなかつたということ翌日云われた。昔、といつても今から十年ぐらい前までは、一度脳溢血かに罹ると、それから二三年、もしくは七八年を経て二度目の発作に襲われる例が多く、大概な人はその時に駄目になつたものであるが、近年は医術の進歩によつて、そうとも限らないようになった。一度罹つてもそれきり罹らない人もあり、二度罹つてもまた再起する人もあり、三度も四度も罹りながらなお天寿を保っている人も、しばしば見受けるようになった。お宅の御主人は学者の方に似合わず、撰生むとんちやくに関しては無頓着むとんちやくなところがあり、ややともすると医師の忠告をお用いにならない風があつたので、再発の恐れが全くないとは云えなかつたけれども、こんなに早くそれが来るとは思わなかつた。まだ六十歳には達しておられないことであるし、ここでいったん、徐々ながらも健康を回復され、今後数年、巧く行ければ十数年は活動をおつづけになるであろうと考えていたのに、か

ような結果になったのは意外である。と、博士も児玉さんもそう云ってくれた。博士や児玉さんがほんとうにそう思っておられたかどうかは、もちろん推測の限りではない、人の命数はいかなる名医にも豫断できないものであるから、二人がそう思っておられたとしても不思議はないが、正直に云って、私は大体豫期していたことが豫期した時に起つたと思ひ、あまり意外な感いだは抱かなかつたのであつた。豫期したことが豫期した通りに起らないこともあり得るし、むしろその方が普通であるが、私と夫の場合には、私の豫測が適確に當つたのである。そのことは娘の敏子にしても、同様に感じているだろうと思う。

そこで、もう一遍夫の日記と私の日記とを読み返し、照らし合ひしながら、夫と私とがこういう風な発展の後にこういう風な永別を遂げるに至つた事の次第を、今こそあけすけに跡づけてみたいのである。もっとも、夫はすでに何十年前も前、私と結婚する以前から日記をつけていたそのうであるから、彼と私との関係を根本的に究きわめるためには、そういう古い日記から読み直すのが順序であるかも知れない。が、私のようなものがそんな大仕事に手をつける資格はない。二階の書齋はしごの、梯子はしごを掛けたければ届かない高い所にある戸棚には、夫の日記帳が何十冊となく埃にまみれて積み重ねてあるのを知っているけれども、私はそんな歴ほっだい大な記録に眼を通すほどの根気はない。故人は彼自身も云っている通り、去年までは私との閨房生活けいぼうのことは努めて日記に附けないようにしていた。彼がそのことを遠慮なく記すようになったのは、というよりは、ほとんどそのことばかりを記す目的をもつて日記を書くようになったのは、今年の正月以来のことで、同時に私もこの正月からそれに対抗して附け始めたのであるから、まずそれ以後の彼と私とが代る代る語ることを対比して見、その間に漏れているところを補って行けば、二人がど

んな風にして愛し合い、溺れ合い、欺き合い、陥れ合い、そうして遂に一方が一方に滅ぼされるに至ったかのいきさつが、ほぼ明らかになるはずで、それ以前の日記にまで溯る要はないように思う。夫は本年一月一日の記において、私のことを「生レツキ陰性デ、秘密ヲ好ム癖ガアル」と云い、「知ツテイル」「#コト、1-2-24」デモ知ラナイ風ヲ装イ、心ニアル「#コト、1-2-24」ヲ容易ニ口ニ出サナイ」性質の女であると云っているが、これはたしかにその通りであることを否定しない。概括的に云えば、私よりも彼の方が何層倍か人間が正直にできており、従つてその記すところにも虚偽が少いことは認めざるを得ないけれども、そう云つても彼の言葉にも、全く「#言+嘘のつくり」、第4水準2-88-74」がないというわけでもない。たとえば「妻ハコノ日記帳ガ書齋ノドコノ抽出ニハイツテイルカヲ知ツテイルニ違イナイ」けれども、「マサカ夫ノ日記帳ヲ盗ミ読ムヨウナ」「#コト、1-2-24」ハシソウモナイ」と云つたり、「シカシ必ずシモソウトハ限ラナイ理由モアル」が、「今年カラハソレヲ恐レヌ」「#コト、1-2-24」ニシタ」と云つたりしているが、実はその後段において告白している通り、「ムシロ内々読マレル」「#コト、1-2-24」ヲ覚悟シ、期待シテイタ」というのが本心であつたことを、私は夙に見破っていた。正月四日の朝、彼が書棚の水仙の花の前にわざと抽出の鍵を落しておいたのは、私に日記を読んで貰いたくてたまらなくなつた証拠であるが、そんな小細工をしてくれないでも、私はとうから盗み読みをしていたのであることを、ここで白状することにしよう。私は私の一月四日の記において、「私は（夫の日記帳を）決して読みはしない。私は自分でここまでときめている限界を越えて、夫の心理の中にまではいり込んで行きたくない。私は自分の心の中を人に知らせることを好まないように、人の心の奥底を根掘り葉掘りするこ

とを好まない」と云っているが、ほんとうを云えばそれは虚言である。

「私は自分の心の中を人に知らせることを好まない」けれども、「人の心の奥底を根掘り葉掘りすること」は好きなのである。私は、彼と結婚したその翌日あたりから、ときどき彼の日記帳を盗み読む習慣を持ち始めていた。私は彼が「その日記帳をあの小机の抽出に入れて鍵をかけていることも、そしてその鍵を時としては書棚のいろいろな書物の間に、時としては床の絨^{じゅうたん}織の下に隠していることも、とうの昔から知っていた」たのであり、決して「日記帳の中を開けて見たりなんかしたことはない」どころではない。ただ今までは、われわれ夫婦の性生活につながりのある問題はあまり扱われていたことがなく、私には無味乾燥な学問的な事柄が多かったところから、めったに身を入れて見たことはなかった。時折ばらばらとページをめくってみる程度で、わずかに「夫のものを盗み読んでいる」ということだけに、或る満足を覚えていたに過ぎなかったのであるが、彼がそのことを記すことを「恐レヌ」「#コト、1-2-24」ニシタ」今年の正月一日の記から、私は当然の結果として彼の記述に惹^ひき付けられた。私は早くも正月二日の午後、彼が散歩に出かけた留守中に、彼の日記の書き方が今年から変化していることを発見した。ただし私が盗み読みをしていることを夫に秘していたのは、生来「知ツテイル」「#コト、1-2-24」デモ知ラナイ風ヲ装」うのが好きであるためばかりではない。盗み読んでは貰いたいのだが、読んでも読まない風をしていてくれるようにというのが、恐らくは夫の注文であるらしいことをも、察していたからである。

彼が私を、「郁子ヨ、ワガ愛スルイトシノ妻ヨ」と呼び、「何ヨリモ、僕ガ彼女ヲ愛シテイル」「#コト、1-2-24」」は「偽リノナイ」「#コト、1-2-24」デ」あると云っているのは、真実に違いないと思う。私は

その一事については寸毫も彼を疑っていない。が、同時に私も当初においてには彼を熱愛していたことを、認めて貰いたいのである。「遠い昔の新婚旅行の晩、……彼が顔から近眼の眼鏡を外したのを見ると、とたんにゾウツと身慄い（みふる）がしたこと」も事実であり、「今から考えると、私は自分に最も性の合わない人を選んだらしい」ことも、時々彼に面と向つてみて、「何という理由もなしに胸がムカムカ」したことも事実であるに相違ないが、そうだからといって、私が彼を愛していなかったということにはならない。「古風な京都ノ舊家二生レ封建的ナ空氣ノ中ニ育ツタ」私は、「父母の命ずるままに漫然とこの家に嫁ぎ、夫婦とはこういうものと思」わされて来たのであるから、好むと好まないにかかわらず、彼を愛するよりほかに術（すべ）はなかった。まして私には「今日モナ才時代オクレナ舊道徳ヲ重ンズル一面ガアリ、或ル場合ニハソレヲ誇リトスル傾向モア」つたのである。私は胸がムカムカするたびに、夫に対しても、亡くなった私の父母に対しても、そういう心持を抱（いだ）く自分自身を浅ましいとも、申しわけがないとも感じ、そんな心持が起れば起るほど、なおさらそれに反抗して彼を愛するように努めたし、また愛し得ていた。なぜかというのに、生れつき體質的に淫蕩であつた私は、どうでもこうでもそうするよりほかに生き方はなかつたからである。当時の私が、夫に対して何かの不満を持っていたとすれば、それは夫が私の旺盛な慾求に十分な満足を与えてくれないという点にあつたが、それでも私は、彼の体力の乏しさを咎（とが）めるよりは、自分の過度な淫慾を恥じる気持の方が強かつた。私は彼の精力の減退を歎きながらも、そのために愛憎（あいそ）を尽かすどころか、一層愛情を募らせつつあつた。しかるに、彼は何と考えたのか、この正月からそういう私に新しい眼を見開かせてくれたのである。彼が「今日マデ日記ニ記スコトヲ躊躇シテイタヨウナ事柄ヲモアエテ書

キ留メル。「#コト、1-2-24」ニシタ「真の動機が何であつたかは、よく分らない。「僕八彼女ト直接閨房ノ」「#コト、1-2-24」ヲ語り合フ機会ヲ与エラレナイ不満ニ堪エカネテコレヲ書ク」と云い、私の「アマリナ秘密主義」、私のいわゆる「身嗜ミ」、「アノ偽善的ナ」「女ラシサ」、「アノワザトラシイオ上品趣味」に反感を抱き、それを打破してやりたいために「コウイウ」「#コト、1-2-24」ヲ書ク氣ニナツタ」と云つてゐるのは、果してそれだけが理由だつたのであろうか。恐らくは他に重大な原因もあつたことと思われるけれども、日記は不思議にもそのことについて明瞭には記すところがない。あるいは彼自身も、ああいう日記を書きたくなつた心の経過、その由よつて来るところを理解してゐなかつたのかも知れない。とまれ私は、自分が「多クノ女性ノ中デモ極メテまれニシカナイ器具ノ所有者デアル」「#コト、1-2-24」を、始めて教えられたのであつた。私が「モシ昔ノ島原しまばらノヨウナ妓楼ぎろうニ売ラレ」た女であつたとしたら、「必ズヤ世間ノ評判ニナリ、無数ノ嫖客ひょうかくガ競ツテ」「周田二集マ」つたであらうことを、私は始めて知つたのであつた。ところで、「僕ハコンナ」「#コト、1-2-24」ヲ彼女ニ知ラセナイ方ガヨイカモ知レナイ。彼女ニソウイウ自覚ヲ与ユル「#コト、1-2-24」ハ、少クトモ僕自身ノタメニ不利カモ知レナイ」にもかかわらず、彼があえてその不利を冒す氣になつたのはなぜであらうか。彼は私のその「長所ヲ考エタダケデモ嫉妬ヲ感」じ、「モシモ僕以外ノ男性ガ彼女ノアノ長所ヲ知ツタナラバ、……ドンナ」「#コト、1-2-24」ガ起ルデアロウカ」不安であると云つてゐるが、その不安をことさら隠すところなく日記に書き記すということは、ひよつとすると、私にそれを盗み読んで貰い、そうして彼を嫉妬せしめるような行動を示して貰うことを、期待しているのではあるまいかという風に、私は取つた。この推測が當つてい

たことは、「僕八ソノ嫉妬ヲ密カニ享樂シツツアツタ」、「僕八嫉妬ヲ感ジルトアノ方ノ衝動ガ起ル」、「ダカラ嫉妬ハ或ル意味ニオイテ必要デモアリ快感デモアル」（一月十三日） 等々とあるので明らかであるが、もうそのことは一月一日の日記の中でうすうす私には想像できたのであつた。……………

六月十日。……………八日に私はこう書いています。「私は夫を半分は激しく嫌い、半分は激しく愛している。私は夫とほんとうは性が合わない……………」と。そうしてまたこうも書いています。「だからといって他の人を愛する気にはなれない。私には古い貞操観念がこびり着いているので、それに背くことは生れつきできない」、「私は夫のあの……………愛撫の仕方にはホトホト当惑するけれども、そういつても彼が熱狂的に私を愛していてくれることは明らかなので、それに対して何とか私も報いるところがなければ済まない」と。亡くなった父母に厳しい儒教的躰を受けた私が、仮にも夫の悪口を筆にするような心境に引き入れられたのは、二十年来古い道德観念に縛りつけられて、夫に対する不満の情を無理に抑壓していたせいもあるけれども、何よりも、夫を嫉妬せしめるように仕向けることが結局彼を喜ばせる所以であり、それが「貞女」の道に通ずるのであることを、おぼろげながら理解しかかっていたからである。しかし私はまだ、夫を「激しく嫌う」と云い、「性が合わない」と云っているに過ぎず、すぐそのあとから「他の人を愛する気にはなれない」、夫に「背くことは生れつきできない」と、弱音を吐いているのである。私はすでにその時分から、潜在的には木村を恋しつつあつたのかも知れないが、自分ではそれを意識していなかった。自分は夫に貞節を尽さんがために、心ならずも彼の嫉妬を煽るような言葉を、

恐る恐る、それも大変遠廻しに洩らしていただいただけであった。

だが、十三日に、「木村二対スル嫉妬ヲ利用シテ妻ヲ喜バス」「#コト、1-2-24」ニ成功シタ、「ソウイウ風ニシテ努メテ僕ヲ刺戟シテクレル」「#コト、1-2-24」ハ、彼女自身ノ幸福ノタメデモアルト思ツテ貰イタイ」という語、「僕ハ僕ヲ、氣ガ狂ウホド嫉妬サセテホシイ」、「妻ハ随分キワドイ所マデ行ツテヨイ。キワドケレバキワドイホドヨイ」、「多少疑イヲ抱カセルクライデアツテモヨイ。ソノクライマデ行ク」「#コト、1-2-24」ヲ望ム」という語が出て来るのを読んでから、私は急角度をもつて木村のことを考えるようになった。「少クトモ妻ハ、……自分デハ若イ二人ヲ監督シテイルツモリカモ知レナイガ、實際ハ木村ヲ愛シテイルヨウニ思エテナラナイ」と、七日に夫がそんな風に書いているあたりでは、私はむしろ「イヤらしい」というように感じ、いくら夫に嫉けられてもそういう道に外れたことができないものかと、反撥を感じていたのであったが、「キワドケレバキワドイホドヨイ」と云われるに及んで、私の心に急回転が起つた。私が意識するより前に、私に木村を好む様子があるのを見て夫が嫉けたのか、嫉けられたので無から有が生じたのか、そのところはよく分らない。が、私は自分の好奇心が木村の方へ傾いたのを明瞭に意識し出してからも、なおしばらくは、夫のために「心ならず」もそのように「努めて」いるのであると、自らを欺いていた。そう、私は今「好奇心」という語を使ったが、当時は夫を喜ばすために夫以外の人間にちよつとした好奇心を持つてみるのだ、という風に自分に云い聴かせていた。一月二十八日に、始めて人事不省になつた時の心理状態を云えば、木村に対する自分の氣持が夫のためのものであるのか、自分自身のためのものであるのか、その辺の境界があつた晩あたりから自分にも分らなくなつて来たの

で、その苦しさをごまかそうとしていたのであった。あの晩から、二十九日、三十日の朝にかけて、私はずっと寝通していた。「彼女ノ性質力ヲ推シテ、果シテホントウニ睡ツテイタノカ寝タフリヲシテイタノカ、ソノ点八疑ワシイ」と夫が書いているあの二日間、私は決して「寝タフリヲシテイタ」のではないが、そうかといって完全に意識を失いつづけていたとは云いがたい。あの時の半睡半醒の状態は、大体あの折の日記に書いた通りであるが、「彼女ノ口カラ『木村サン』トイウ一語ガ譚語ノヨウニ洩レタ」ことについては、多少書き添える必要がある。あれは「ホントウノ譚語ダツタノカ、譚語ノゴトク見セカケテ故意ニ僕ニ聞カセタノデアルカ」どちらであるかといえば、その中間ぐらいであったといえよう。私は「寝惚ケテ、木村ト情交ヲ行ツテイルト夢見」つつあったのであるが、とたんに「木村さん」という譚語を口走つたのを、臆臆とした意識の底で感じていた。「あゝ浅ましいことを口走っているな」と思いながら云っていた。そして、こんな言葉を夫に聞かれて恥かしいと思う一方、聞かれた方がよかつたという気持も、ないではなかつた。しかしその次の夜、「『木村サン』トイウ一語ガ今夜モ彼女ノ口カラ洩レタ。彼女八今夜モ同ジ夢、同ジ幻覚ヲ、同ジ状況ノ下ニオイテ見タ」のであるうかと云っている三十日の夜の場合は違う。あの夜は私は明らかに或る目的をもって寝たふりをし、譚語のように見せかけてあの言葉を云つた。はっきりした意図と計画に基いていたとまでは云いがたいが、やはり幾分は寝惚けていたかも知れないが、寝惚けているのを意識しながら、良心を麻痺させるのにそれを利用した。「僕八彼女ニ愚弄サレテイルト解スベキナノデアロウカ」と夫は云っているが、あるいはそう解するのが当たっているかも知れない。あの譚語には、「木村サントコンナ風ニナツタラナア」という気持と、「夫があの人を私に世話

してくれたらなあ」という気持と、二つの願望が籠っていたに違いなく、それを分つて貰うためにあの言葉を云った。

二月十四日に、木村は夫にポーラロイドという写真機のあることを教えた。「僕ニソウイウ機械ノアル」「#コト、1-2-24」ヲ教エタラ僕ガ喜ブデアロウトイウ「#コト、1-2-24」ヲ、ドウシテ木村ハ察シタノデアロウカ、ソレガ不思議ダ」と云っているが、それは私にも不思議であつた。夫が私の裸体像を撮影したがっているだろうなどは、私にいても察知してはいなかつた。仮に察知していたとしても、そんなことを木村に知らせてやる隙などはなかつた。あの時分、私は毎夜のように泥酔して木村の腕に凭りかかりつつ抱き運ばれていたけれども、夫婦間の秘戯に関することはおろか、ついで打ち解けた談合などを彼と遣り取りしたことはなかつた。ありていに云つて、彼とは酔つて運ばれるだけの関係で、夫の眼を掠めて話し合う機会などあるはずはなかつた。私はむしろ敏子が怪しいと睨んでいた。木村にそんな暗示を与えた者があるとなれば、敏子を措いて他にない。彼女は二月九日に、関田町に別居させてほしい旨を申し出ており、静かな場所で勉強したいというのを理由に挙げているが、「静かな場所」を欲するというのは、深夜両親の寝室で時々煌々と電燈が点つたり、螢光燈ランプが輝いたりするのに辟易しているという意味であろうことは、推測するにかたくなかつた。多分彼女は、螢光燈に照らされている寝室内の光景を夜な夜な隙見していたに違いないが、ストーブがゴウゴウと呻りを立てて燃えていたので、足音を忍ばせるには好都合であつたはずだ。とすれば、私を裸体にしてさまざまな姿態に置きかえることに限りない愉悦を覚えていた夫の所作をも、悉く見て知っていたであろうことも想像できる。とすればまた、彼女がそのことを木村に話したであろうことも想像できる。これ

らの想像が当たっていたことは後日に及んで明らかになったが、私は十四日の夫の日記を読んだ時に、おおよそこまでは察していた。つまり、当時私が裸体にされて弄ばれてもてあそいたことは、私自身より先に敏子が知り、木村に報告していたはずであった。

それにしても、木村は何のために「ソウイウ機械」のあることを夫に教えたり、私の裸体を撮影することを示唆しさしたりしたのであるか。このことについては、ついまだ木村に聞いてみるのを忘れていたが、察するところ、一つには夫にそういう智慧ちえを授けて彼の歡心を得たかったのであるろう。が、一つには、そうすれば他日夫の撮影した裸体写真を、自分も手に入れることができるようになることを、期待したからなのであるろう。そしてその方が主たる目的だったのであるろう。夫がやがてポイラロイドで満足できず、ツイイス・アイコンを使うようになり、それを現像する役目が木村に廻って来るようになるのを、こま細かい先の先まではどうか知れないが、大体そういうようなことが起り得ることを、木村は恐らく見通したのであるろう。

二月十九日に、「敏子の心理状態が私には掴めない」と書いているが、実は或る程度は掴めていた。今述べたような工合で、私は彼女がわれわれ夫婦の閨房の情景を木村に洩らしたであろうことは、ほぼ推していた。彼女は木村を、心密ひそかに愛しているのであり、それゆえに「内々私に敵意を抱きいだつつある」ことも分っていた。彼女は、「母は生れつき繊弱なたちで過度の房事には堪えられないのに、父が無理やりに云うことを聴かせ」ているのであると解し、その点では私の健康を気づかい、父を憎んでいたのであるが、父が妙な物好きから木村と私とを接近させ、木村も私もまたそれを拒こばまない風があるのを見て、父を憎むとともに私をも憎んだ。私はそれを随分早くから感じていた。ただ、私以上に陰険で

ある彼女は、「自分の方が母より二十年も若いにかかわらず、容貌姿態の点において自分が母に劣っている」ことを知っており、木村の愛がより多く母に注がれていることを知っているがゆえに、まず母を取り持つておいて徐ろに策を廻らすつもりでいたことも、私には読めていた。しかし二人を取り持つについて、彼女と木村との間にあらかじめどれだけの連絡があつたのかは、いまだに私によく分らない。たとえば、彼女が関田町へ間借りしたのは、螢光燈に辟易したためばかりでなく、木村の下宿が近いということも、初めから考慮の中にあつたことと思われるけれども、それは木村の入れ知恵だつたのか、彼女が単独で思いついたことなのか。あれは敏子が勝手にお膳立てをしたので、「僕は据え膳の箸を取っただけだ」と、木村は云つていたけれども、真相はどうなのであろうか。私はそういう点については、今も木村を信用していない。

敏子が私を嫉妬していたように、私も内心敏子に対してかなり激しい嫉妬を燃やしていた。にもかかわらず、私は努めてそのことを人にも悟らせず、日記にも書かないようにしていた。それは私の持ち前の陰険性のゆえでもあるが、それよりも、自分の方が娘よりも優れているという自信を持っていたところから、その自尊心を自ら傷つけたくなかつたからであつた。なおもう一つ、私が敏子を嫉妬する理由のあることというの、木村が彼女をも愛しているかも知れないという疑いのあること。を、夫に知られるのを何よりも私は恐れた。夫自身も、「モシ僕が木村デアッタトシテ、ドツチニヨケイ惹キ付ケラレルカトイエバ、ソレハ、年八取ツテイルケレドモ母ノ方デアル」「#コト、1-2-24」ハ「サシアタリ母ノ歡心ヲ買イ、母ヲ通ジテ敏子ヲ動カソウトシテイル」かも知れないと、多少疑念を挟んでいた時もあった。で、私は夫にそう

いう疑念を抱かせることを最も嫌った。木村は一途に私一人を愛しているもの、私のためにはいかなる犠牲をも惜しまないでいるものと、夫に思わせておきたかった。そうでなければ、夫の木村に対する嫉妬が生一本で強烈なものにならないからであった。

六月十一日。……夫は二月二十七日に、「ヤツパリ推察通りダツタ。妻八日記ヲツケテイタノダ」と云い、「数日前ニウスウス気ガ付イタ」と云っているけれども、実際はよほど前からハッキリと知っており、かつ内容を盗み読みしていたものと思う。私もまた、「自分が日記をつけていることを夫に感づかれるようなへまはやらない」「私のように心を他人に語らない者は、せめて自分自身に向つて語つて聞かせる必要がある」などと云っているのは、真赤な「#」言+嘘のつくり、「第4水準2-88-74」である。私は夫に、私には内証で読んで貰うことを欲していた。「自分自身に向つて聞かせ」たかったことも事実であるが、夫にも読ませることを目的の一つとして書いていた。では何のために音のしない雁皮紙を使つたり、セロファンテープで封をしたりしたかといえば、用もないのにそういう秘密主義を取るのが生来の趣味であったのだ、というよりほかはない。この秘密主義は、私のことをそう云つて嗤う夫にしても同様であった。夫も私も、互いに盗み読まれることは分つていながら、途中にいくつもの堰を設け、障壁を作つて、できるだけ廻りくどくする、そして、相手が果して標的へ到達したかどうかを曖昧にする、それが私たちの趣味であった。私が面倒な手数を厭わずセロファンテープ等を使ったのは、自分だけでなく、夫の趣味に迎合するためでもあった。

私は四月十日になつて、始めて夫の健康が尋常でないことを日記に書

いている。「夫は彼の日記の中に彼自身の憂慮すべき状態について何ごとかを洩らしているであろうか。……彼の日記を読まない私にはそれは想像できないけれども、実は私はもう一二月前から、彼の様子が変調を来たしていることに気がついていた」と。夫自身がこのことを自白したのは、三月十日の記事からであるが、実際は、彼が自分で気がつくより先に、私の方が知っていたのではないかと思う。私はしかし、いろいろの理由から、最初のうちはわざとそれに気がつかないふりをしていた。それは夫をいたずらに神経過敏にさせることを恐れたからでもあるが、それ以上に、神経過敏の結果として、彼が房事を慎しむようになることを一層恐れたのであった。私は夫の生命を心配しないわけではなかったが、飽くことを知らぬ性的行為の満足の方がもつと切実な問題であった。私は何とかして彼に死の恐怖を忘れさせ、「木村トイウ刺戟剤」を利用して嫉妬を煽り立てることに懸命になっていた。……が、私のこの気持は、四月にはいつてから次第に変わった。三月中、私はたびたび、自分がいまだに「最後の一線」を固守している旨を日記に書き、夫に私の貞節を信じさせるように努めたのであったが、「紙一重のところまで」接着していた私と木村の最後の壁がほんとうに除かれたのは、正直に云うと三月二十五日であった。翌二十六日の日記に、私と木村のそらぞらしい問答が記されているが、あれは夫を欺くための搾えごとであった。そして、私の心に重大な決意ができ上るようになったのは四月上旬、四日、五日、六日、あたりであったと思う。夫に誘導されて一步一步墮落の淵に沈みつつあった私であるが、まだそれまでは、夫の要請黙しがたく苦痛を忍んで不倫を犯しているかのように、そうしてそれは舊式な道德観から見ても、婦人の龜鑑と仰がれてもよい模範的行為であるかのように、自分を欺いていたのであったが、その時あたりか

ら、私は全く虚偽の仮面を投げ捨ててしまった。私はきつぱりと、自分の愛が木村の上にあつて夫の上にはないことを、自ら認めるようになった。四月十日に、「体の工合が寒心すべき状態にあるのは夫ばかりでなく、実は私も同様である」と書いているのは、深い魂胆があつてのことだ、ありようは、私は病気で何でもなかつた。もつとも、「敏子が十ぐらいの時に二三度嗜血かつけつした経験があ」り、「肺結核の症状が二期に及んでいると云われ」たのは事実であるが、それでも「医師の忠告を無視して不養生の限りを尽し」て、幸運にも「案ずるほどのこともなく自然に治癒してしま」い、それ以後再発したことはなかつたのであつた。従つて、「二月の或る日、この前の時と全く同じ泡あわを交えた鮮紅色の血液が痰たんとともに出た」ことも、「午後になると毎日のように疲労感が襲つて来」て、「おりおり胸が気味悪く疼うず」いたことも、「今度は次第に悪化して救いがたいことにな」りそうで、どうやら「ただごとでない」ような気がしたことも、すべて根も葉もない虚構で、それは夫を一日も早く死の谷へ落とし込む誘いの手として書いたのであつた。私も死を賭としているのであるから、あなたもその気におなりなさいと、私は夫にそう云つて聞かせるのが目的であつた。あれから以後の私の日記は、もつぱらその目的に添つて書かれていたのであるが、書くだけでなく、場合によつては嗜血の真似事をさえ演じて見せる用意をしていた。私は彼を息いこう暇なく興奮させ、その血圧を絶えず上衝させることに手段を悉つくした。（第一次の発作以後も、私は少しも手を緩ゆるめずに、彼を嫉妬させるべく小細工を弄ろうしつづけた）彼の肉体的破滅がそう遠くない時期に迫っているらしいことは、木村がよほど以前からそれとなく豫言していたが、私も、そして恐らくは敏子も、そういうことに勘の鋭い木村の直覚を、なまじな医師の判断よりもアテにしていた。

それにしても、私の体質に淫蕩の血が流れていたことは否み得ないとして、夫の死をさえたくらむような心が潜^{ひそ}んでいたとは、どうしたわけであろう。いったいそんな心が、いつ、どんな隙に食い込んだのである。亡くなった夫のような、ひねくれた、変質的な、邪悪な精神で、執^{しつ}拗^{よう}にジリジリと捻^ねじ曲げられたら、どんな素直な心でもしまいには曲つて来るのであろうか。そうではなくて、私の場合は、昔^{むかし}氣質^{かたぎ}な、封建的な女と見えたのは環境や父母の躰のせい、本来は恐ろしい心の持ち主だったのであろうか。このことはもっとよく考えてみなければどちらとも云えない。と同時に、終局においてやはり私は亡くなった夫に忠実を尽したことになるのである、夫は彼の希望通りの幸福な生涯を送ったのであると、云えるような気がしなくてもない。

敏子のことや木村のことも、今のところ疑問の点がたくさんある。私が木村と会合の場所に使った大阪の宿は、「ドコカナイデシヨウカト木村サンガ云ウカラ」敏子が「才友達ノ或ルアプレノ人」に聞いて教えてやったのだというけれども、ほんとうにそれだけが真実であろうか。敏子もあの宿を誰かと使ったことがあり、今も使っているのではないであろうか。

木村の計画では、今後適当な時期を見て彼が敏子と結婚した形式を取って、私と三人でこの家に住む、敏子は世間体を繕うために、甘んじて母のために犠牲になる、と、いうことになっているのであるが。……

底本：「鍵」中公文庫、中央公論社

1973（昭和48）年12月10日初版発行

1983（昭和58）年12月25日6刷発行

初出：「中央公論」中央公論社

1956（昭和31）年1月、5月、12月

入力：kompass

校正：酒井裕二

2016年5月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。